

層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗褐色土	やや強い	有り	濡ったローム 土微粒 炭化物微粒
2層	暗褐色土	やや強い	有り	濡ったローム少量 ローム小粒やや多量 焼土 炭 ローム
3層	暗褐色土	やや強い	有り	濡ったローム少量 ローム小粒少量 焼土 炭
4層	暗褐色土	強い	有り	黒褐色土主体 濡ったローム少量 白色粘土やや多量 焼土数点
5層	暗褐色土	強い	有り	黒褐色土主体 白色粘土少量 ローム中粒やや多量 焼土小粒 炭小粒
6層	暗褐色土	やや強い	有り	濡ったローム少量 ローム小粒微量
7層	暗褐色土	やや強い	有り	濡ったローム少量 ローム中粒やや多量 焼土数点 炭 ローム
8層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム中粒少量
9層	暗褐色土	やや強い	有り	濡ったローム微量 ローム中粒数点
10層	暗褐色土	強い	有り	濡ったローム微量 ローム大粒数点
11層	暗褐色土	強い	有り	黒褐色土主体 白色粘土少量 ローム中粒やや多量 焼土中粒数点 ローム大粒
12層	暗褐色土	強い	有り	暗褐色土主体 白色粘土少量 ローム中粒 焼土微粒 炭微粒
13層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム大粒少量
14層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土 ロームブロックほぼ均一
15層	暗褐色土	やや強い	有り	ロームブロック主体 暗褐色土少量
16層	暗褐色土	やや強い	有り	濡ったローム ローム中粒多量 ローム 焼土少量 炭微粒

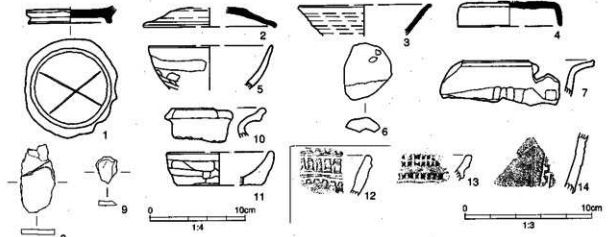


図2-4-55 A033

表 2-4-28 A033遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 高台付杯	-×-×- ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラケズリ	灰色 普	普	底部片	見書 底部外面「×」
2	須恵器 蓋	-×-×- ロクロ成形 外面 胴部中位ヘラケズリ	灰色 普	普	1/4	
3	須恵器 杯	(140)×-×- ロクロ成形	灰色 普	普	口縁片	
4	須恵器 蓋	(110)×-×- ロクロ成形	灰褐色 良	緻密	略完形	
5	土師器 杯	(130)×-×- ロクロ成形口縁部最上段を一段縮小して口縁部を成形 外面 胴部上半横位のヘラケズリ	褐色 普	普	口縁片	類別として向坑 A032-10
6	編 羽口	-×-×-	茶褐色 悪	粗	胴部片	劣化が激しい
7	土師器 甕	-×-×- ロクロ成形 外面 胴部上半横位のヘラケズリ	褐色 普	普		
8	鉄器	72×35×5.5 重量22.3g				
9	鉄器	28×19×5 重量4.5g				
10	土師器 甕	-×-×- ロクロ成形 口縁口唇をつまみあげる(常総型) 外面 口縁頸部ナデ	褐色 普	普	口縁片	
11	土師器 杯	(112)×(70)×(55) 外面 口縁ナデ 胴部上半～下半横位のヘラケズリ 底部全体ヘラケズリ	黒褐色 普	普	口縁片 ～ 底部片	
12	縄文 深鉢	-×-×- 外面 口縁下に3本の沈線を引き下端は連続刺突 両縁内には縦に二つ重なった連続刺突 内面 ケズリ後ミガキ口縁は内厚し口唇上にキザミ	淡褐色 灰褐色 良	緻密	口縁片	中期初頭 五領ヶ台Ⅱa式
13	縄文 深鉢	-×-×- 外面 口縁下にキザミを施した隆帯を3条貼付する 内面 ミガキ 口縁部形態は角頭状	茶褐色 良	比較的 緻密	口縁片	中期初頭 五領ヶ台Ⅱa式
14	縄文 深鉢	-×-×- 外面 交互刺突文と円形刺突を組み合わせたいわゆる「複合刺突文」を 縦位に施文する 内面はケズリ後ミガキ	暗褐色	比較的 緻密	胴部片	中期初頭 五領ヶ台Ⅱb式

## A033

検出地区 E4-82G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A032・A034・B004等がある。B002と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出している。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周していたと考えられる。竈は、北壁中央で検出されたが、B002との重複の為、袖は片袖のみの検出となった。

袖の内側は良く焼けていた。燃焼部はやや凹んでいた。明瞭な火床は検出されなかった。天井部は断面にて検出された。自然崩落と考えられる。

覆土は、色調を基本に15層に分層。覆土最下層にてローム主体の土層、また中層にて焼土を広範囲に検出していることから、住居廃絶時に人為的な埋め戻しが行われ、火を焚いたと思われる。その後については、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中層にかけて比較的多量に出土した。住居跡埋め戻しの時点での遺物の投棄が考えられる。それらに混ざり、縄文土器片も出土している。図示した竈の羽口、鉄製品の他に細かな鉄滓も出土している。

所見 出土遺物から、奈良時代の竪穴住居跡と判断した。住居廃絶時に投棄された遺物の中に、竈の羽口、鉄製品等が出土していることも、向境遺跡の当該期の集落の性格を考える上で示唆に富む。

#### A034

検出地区 E4-83G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A033・A027・B001・B002等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、住居跡中央部分は良く踏み固められている。小穴は2基検出された。P1は出入口施設と考えられる。P2は、楕円形の平底の浅いピットであるが、用途は不明である。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出されなかった。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。袖の内側は良く焼けていた。燃焼部はやや凹み、明瞭な火床を検出された。天井部は断面にて検出された。自然崩落と考えられる。

覆土は、色調を基本に15層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土した。図示した遺物以外に、黒曜石のフレイク、竈等も出土している。

所見 出土遺物から、奈良時代の竪穴住居跡と判断した。赤色塗彩の刻書土器が出土していることも注目される。

#### A035

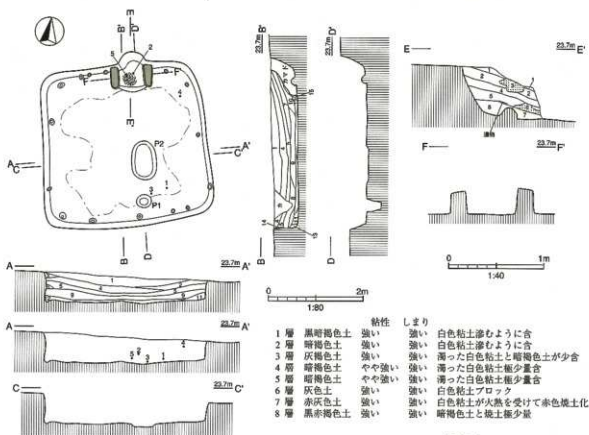
検出地区 E4-22G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構から離れ、孤立して立地する。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、住居跡南西隅は良く踏み固められている。小穴は2基検出された。P1は出入口施設と考えられる。P2は、用途の断定はできないが、所謂、ロクロピットの可能性があると思われる。楕円形の平底の浅いピットであるが、壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁中央で検出された。煙道部は攪乱で破壊されているが両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。袖の内側は若干赤化し、燃焼部はやや凹み、火床を検出されなかった。

覆土は、色調を基本に11層に分層。ローム、炭化物を含む覆土が多く検出されているが、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて須恵器を中心に少量出土した。

所見 出土遺物から、奈良時代の竪穴住居跡と判断した。鍛冶工房的色彩の強い住居跡群から離れた住居跡から、ロクロピットの可能性のある小穴を有する住居跡が検出されたことは興味深い。



層	土質	粘性	しまり
1層	黒暗褐色土	強い	白色粘土滲むように含
2層	暗褐色土	強い	強い
3層	灰褐色土	強い	薄った白色粘土と暗褐色土が少含
4層	暗褐色土	やや強い	薄った白色粘土少量含
5層	暗褐色土	やや強い	薄った白色粘土少量含
6層	灰色土	強い	強い
7層	赤灰色土	強い	白色粘土が火熱を受けて赤色焼土化
8層	黒赤褐色土	強い	暗褐色土と灰土少量

層	土質	粘性	しまり
1層	黒褐色土	やや強い	有り
2層	暗褐色土	やや強い	有り
3層	黒褐色土	有り	有り
4層	黒褐色土	やや強い	有り
5層	黒褐色土	有り	有り
6層	暗褐色土	弱い	有り
7層	暗褐色土	弱い	有り
8層	黒褐色土	弱い	有り
9層	暗褐色土	弱い	有り
10層	黒褐色土	弱い	有り
11層	黒褐色土	弱い	有り
12層	暗褐色土	やや強い	有り
13層	暗褐色土	弱い	有り
14層	黒赤褐色土	弱い	有り
15層	黒灰褐色土	弱い	有り

少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
少量の褐色土が滲むように混じる  
黒褐色土主体  
暗褐色土主体  
黒褐色土主体  
黒褐色土とロームブロックほぼ均一に混じる  
黒褐色土とロームブロックほぼ均一に混じる  
黒褐色土主体

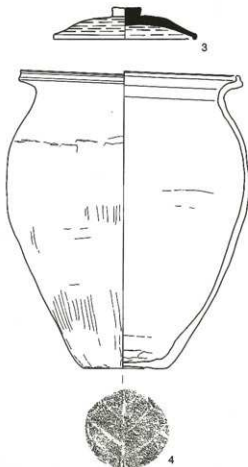
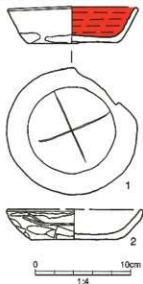


図2-4-56 A034



表 2-4-29 A034遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	注 量 口径×底径×器高 成 形・調整 等の 特徴	色 調 焼 成	胎 上	遺 存	備 考
1	土師器 坏	137×92×39 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体静止糸切り 内面 一部スス付着灯明皿として使用か?	赤褐色	普	4/5	赤彩施書「X」 底部外面
2	土師器 坏	143×92×32 ロクロ成形 外面 胴部上半~下端ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部全体ヘラ切り後ヘ ラミガキ 内面 胴部上半ミガキ	橙褐色 普	普	2/3	口縁一部に スス付着
3	須恵器 蓋	150×-×33 ロクロ成形	砂灰褐色 赤灰色 普	白色砂粒 少	4/5	
4	土師器 甕	230×86×315 最大径257 口縁外反し上端つまみ上げられる外面凹線状に調整胴上半 に彫らみを持つ 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラナデか? 下半 ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 底部木炭痕 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半下半ヘラナデ 下半ヘラケズリ	橙褐色 普	粗砂粒多	完形	外面コゲ状 付着物
5	土製品 支脚	上部径42×下部径86×最大長160 重量800g 千ずくね	橙褐色 悪	粗	略完形	

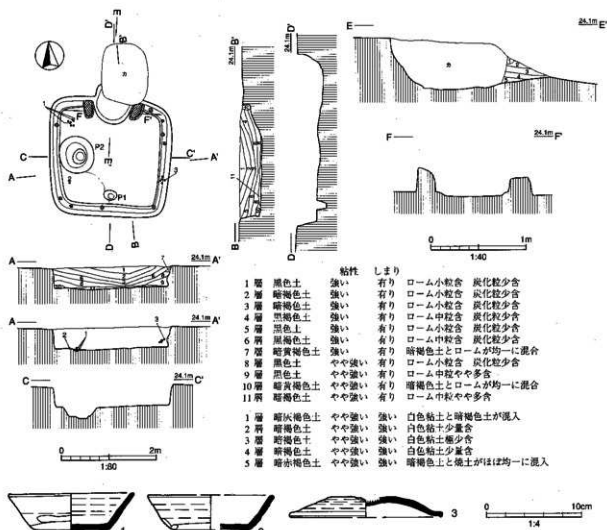


図 2-4-57 A035

表 2-4-30 A035遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 罎	132×80×43 ロクロ成形 体部下端-ヘラケズリ 底部全体-磨止ヘラ切り	灰褐色 普	普	略完形	
2	須恵器 罎	(132)×(80)×37 ロクロ成形 体部下端-ヘラケズリ 底部全体-磨止ヘラ切り	灰褐色 普	白色砂粒 少量含む	1/4	
3	須恵器 蓋	(162)×-×- ロクロ成形	灰褐色 普	普	2/3	

## A036

検出地区 E4-53G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A029・A031等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、よく踏み固められている。小穴は2基検出された。P1は出入口施設と考えられる。P2は、柱穴と思われる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。袖の内側は良く焼けていた。燃焼部はやや凹み、明瞭な火床を検出された。天井部は断面にて検出された。

覆土は、色調を基本に13層に分層。覆土中から、ローム、焼土、炭化物等を多く検出し、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土した。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。「寺」の墨書土器が出土。仏教関連の影響が強い住居跡か。

## A037

検出地区 E4-64G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A031・D011等がある。B003と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、住居跡西側で硬化面を比較的広範囲に検出している。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は3/4周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。袖の内側は若干焼けていた。燃焼部はやや凹み、明瞭な火床は検出されなかった。天井部は断面にて検出された。自然崩落と考えられる。

覆土は、色調を基本に11層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土した。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の竪穴住居跡と判断した。堀立柱建物跡と重複関係にあり、向境遺跡の奈良・平安期の集落展開を考える上で、示唆に富む。

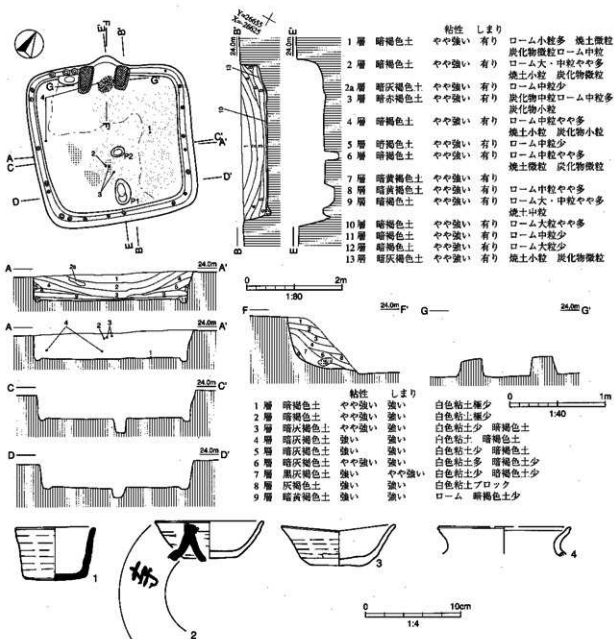


図 2-4-58 A036

表 2-4-31 A036遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高	調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	83×64×56	ロクロ成形 底部切り難しは静止ヘラ切り 底部から口縁にかけて体部が直立し コップ状の形態を呈する	青灰色 良	緻密	略球形	
2	土師器 坏	115×57×40	ロクロ成形 外面の体部下端はヘラケズリ 底部切り難しは回転ヘラ切り	褐色 普	普	全体の 1/2	墨書 「寺」「人」 体部外面
3	土師器 坏	120×57×39	ロクロ成形 外面の体部下端はヘラケズリ 底部切り難しは回転ヘラ切り	褐色 普	普	全体の 2/3	
4	土師器 坏	(140)×-×(29)	ロクロ成形 口縁は外反し通部は若干つまみ上げ 口縁内外面ともナア	赤褐色 普	普	口縁片	

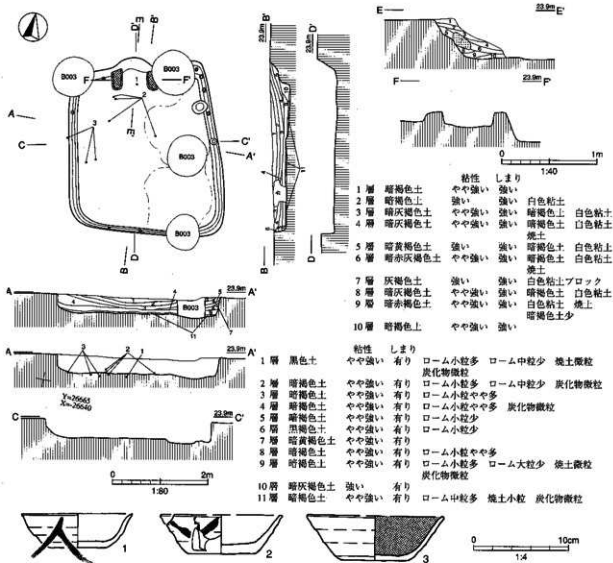


図 2-4-59 A037

表 2-4-32 A037遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等 の符徴	色測 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	115×58×31 ロクロ成形 外面の体部下端はヘラケズリ 底部切り離しは回転ヘラ切り	淡褐色	菅	完全	墨書「人」 体部外面正位
2	土師器 坏	(128)×(72)×41 ロクロ成形 外面の体部下端はヘラケズリ	褐色 菅	菅	全体の 2/3	墨書「口」 体部外面
3	土師器 坏	(144)×(70)×47 ロクロ成形 外面の体部下端はヘラケズリ 底部切り離しは回転糸切りで周縁はヘラケズリ	褐色 黒色 菅	菅	2/3	内黒

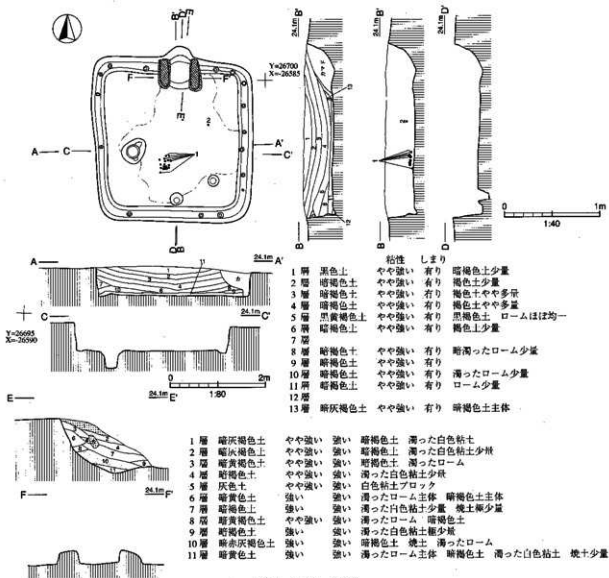


図 2-4-60 A039

A039

検出地区 D4-99G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A026・A038・A040等がある。

遺 構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、適度に踏み固められている。住居跡壁際はやや軟弱であった。小穴3基を検出。P1は出入口施設、P2、P3は用途不明。P2については柱穴かあるいは、ロクロピットの可能性もある。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。両袖とも袖の内側は若干焼けていたが、燃焼部において明瞭な火床は検出されなかった。燃焼部の形態としては若干掘り込まれていた。天井部は断面にて検出され、自然崩落と考えられる。

覆土は、色調を基本に13層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。(調査中の不手際で一部土説の不備あり。)

遺 物 覆土下層と覆土上層から少量出土した。墨書土器1点出土。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。A034同様、鍛冶工場の色彩が強い住居跡群から、ロクロピットの可能性のある小穴を有する住居跡が検出されたことは、興味深い。あるいは有機的な関連があるかもしれない。

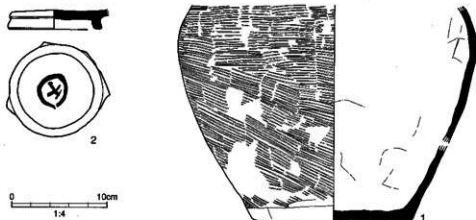


図 2-4-61 A309(2)

表 2-4-33 A039遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 甕	最大径(313)平底肩部分が張る 外面 胴部上半下半タタキ目下端底部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナゲ及びナゲか? 器面の剝離著しい	-×162×(230)	灰褐色 青	砂粒雲母	1/3	
2	須恵器 甕	外面 底部全体回転ヘラ切り	-×98×(21) ロクロ成形	褐色 青	青	底部片	墨書「㊦」 底部外面

#### A040

検出地区 D4-90G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A026・A032・A041等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、竈前で一部硬化面を検出している。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。両袖とも袖の内側は若干焼けていたが、燃焼部において明瞭な火床は検出されなかった。燃焼部の形態としては若干掘り込まれていた。

覆土は、色調を基本に16層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土中層にかけて少量出土した。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

#### A041

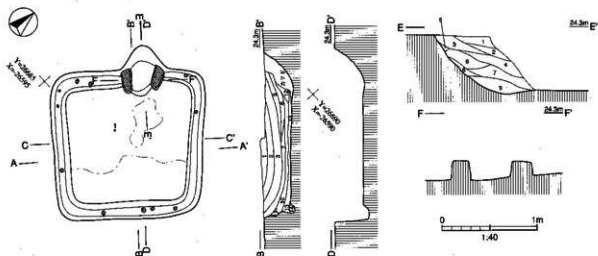
検出地区 D4-90G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A024・A025・A032・A040等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、硬化面を広範囲に検出している。小穴を1基検出。出入口施設と思われる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。両袖とも袖の内側は若干焼けていたが、燃焼部において明瞭な火床は検出されなかった。燃焼部の形態としては若干掘り込まれていた。天井部は断面にて検出。自然崩落したものと考えられる。

覆土は、色調を基本に9層に分層。床面に少量の焼土が検出されていたことから、人為的な埋戻しが行われたのち、概ね自然堆積による埋没が進んだと想定される。

遺物 床面直上～覆土中層にかけて比較的多量に出土した。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。灯明皿、墨書土器の出土が目立つ。



- |   |   |   |
|---|---|---|
| <p>A-A' 24.3m</p> <p>A-A' 24.3m</p> <p>C-C' 24.3m</p> | <p>1層 暗灰褐色土 やや強い</p> <p>2層 暗褐色土 強い</p> <p>3層 暗灰褐色土 強い</p> <p>4層 暗褐色土 強い</p> <p>5層 暗黄褐色土 強い</p> <p>6層 暗褐色土 強い</p> <p>7層 暗灰褐色土 強い</p> <p>8層 暗黄褐色土 強い</p> <p>9層 暗赤褐色土 強い</p> | <p>粘性 しまり</p> <p>暗褐色土 滑った白色粘土</p> <p>滑った白色粘土極少</p> <p>暗褐色土 滑った白色粘土</p> <p>滑った白色粘土極少</p> <p>滑ったローム主体</p> <p>滑った白色粘土極少</p> <p>滑ったローム極少</p> <p>暗褐色土 滑った白色粘土極少 焼土</p> <p>暗褐色土 滑ったローム</p> <p>滑った白色粘土極少 焼土極少</p> <p>焼土主体 暗褐色土 滑った白色粘土</p> |
|---|---|---|

- |   |                         |
|---|-------------------------|
| <p>1層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>2層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>3層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土多量</p> <p>4層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>5層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土多量</p> <p>6層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>7層 黒褐色土 やや強い 有り 褐色土少量 黒色土少量</p> <p>8層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>9層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>10層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>11層 暗黄褐色土 やや強い 有り 暗褐色土 ロームほぼ均一</p> <p>12層 暗灰褐色土 やや強い 有り 褐色土少量</p> <p>13層 暗褐色土 やや強い 有り</p> <p>14層 暗黄褐色土 やや強い 有り 暗褐色土 ロームほぼ均一</p> <p>15層 暗褐色土 やや強い 有り ローム小粒少量</p> <p>16層 暗褐色土 やや強い 有り</p> | <p>0 2m</p> <p>1.80</p> |
|---|-------------------------|

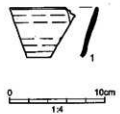
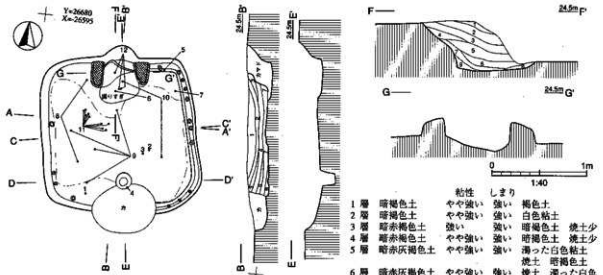


図 2-4-62 A040

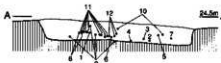
表 2-4-34 A040遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	須恵器 坏	口ク口成形	暗灰褐色 黒色 青	青	口縁片	



層	土質	粘性	しまり	成分
1層	暗褐色土	やや強い	強い	褐色土
2層	暗褐色土	やや強い	強い	白色粘土
3層	暗赤褐色土	強い	強い	暗褐色土 焼土少
4層	暗赤褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 焼土少
5層	暗赤灰褐色土	やや強い	強い	滑った白色粘土
6層	暗赤灰褐色土	やや強い	強い	焼土 暗褐色土
7層	暗黄褐色土	強い	強い	焼土 滑った白色
8層	暗黄褐色土	強い	強い	滑った褐色土少
9層	暗黄褐色土	強い	強い	滑ったローム主体 暗褐色土塵少



層	土質	粘性	しまり	成分
1層	黒色土	やや強い	有り	褐色土量 ローム小粒や多 焼土微粒 炭微粒
2層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 ローム小粒や多 焼土微粒 焼土微粒 炭微粒 ローム中粒
3層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 ローム小粒少 焼土微粒散点 炭微粒散点
4層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
5層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム中粒や多 焼土微粒 炭微粒
6層	黒色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
7層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム中粒散点 焼土小粒 炭小粒
8層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 ローム中粒散点
9層	黒褐色土	やや強い	有り	黒褐色土主体 褐色土少
				ローム中粒や多 ローム大粒 焼土中粒
				暗褐色土主体 ローム少
				ローム大粒 焼土小粒
				暗褐色土主体 ローム大粒少

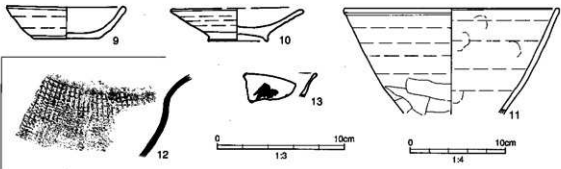
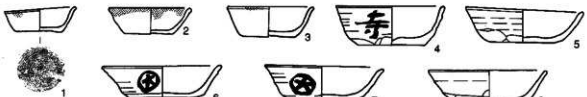


図 2-4-63 A041



表 2-4-35 A041遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	76×50×27 ロクロ成形 外面 回転糸切り後底縁未調整	褐色 青	青		口縁内外の一部 にスス付着 灯明皿
2	土師器 坏	87×55×27 ロクロ成形 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	褐色 青	青	完形	口縁内外面に タール付着 灯明皿
3	土師器 坏	91×56×32 ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切り底縁ヘラケズリ	橙褐色 青	青	完形	
4	土師器 坏	115×71×42 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体静止ヘラ切り	橙褐色 青	青	完形	墨書釈文「寺」 体部外面正位
5	土師器 坏	123×67×35 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部回転全体ヘラケズリ	褐色 青	青	完形	
6	土師器 坏	127×68×34 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	褐色 青	青	完形	墨書「色」 体部外面
7	土師器 坏	125×67×37 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	褐色 青	青	完形	墨書「色」 体部外面正位
8	土師器 坏	126×72×36 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラケズリ	⑧暗褐色 ⑨褐色	青	1/3	縦刻「×」 底部外面
9	土師器 坏	126×70×34 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラケズリ	褐色 青	青	1/3	
10	土師器 高台付皿	140×-×35 台部径63mm	橙褐色 青	青	3/4	
11	土師器 鉢	225×-(114) ロクロ成形 口唇肥厚 底部より直線的に深く深めの鉢	橙褐色 青	砂粒 雲母	2/3	外面にコゲ状 付着物
12	須恵器 甕	ロクロ成形 外面 胴部上半タタキ	橙褐色～ 灰褐色 青	青	頸部～ 胴部片 の1/4	
13	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書 体部外面

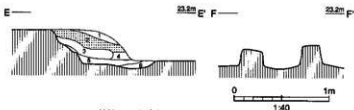
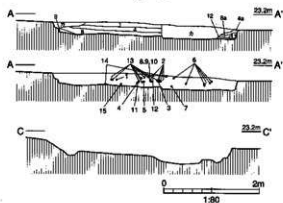
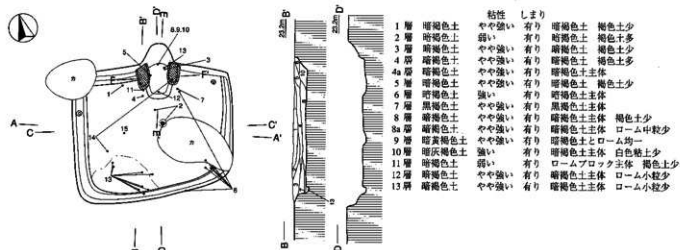
## A042

検出地区 E5-2G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてA030・A043等がある。  
遺 構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、住居跡南側で一部、硬化面を検出して  
上、それ以外は軟弱な床である。付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁で斜めに直線的に立ち  
上がる。周溝は3/4周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であっ  
た。両袖とも袖の内側は良く焼けていたが、燃焼部において明瞭な火床は検出されなかった。燃焼部の  
形態としては若干掘り込まれていた

覆土は、色調を基本に13層に分層。概ね自然堆積による埋没が進んだと想定される。

遺 物 床面直上～覆土中層にかけて比較的多量に出土した。

所 見 出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と判断した。灯明皿、墨書土器の出土が目立つ。



E-E'		粘性		しまり	
1層	暗褐色土	強い	強い	暗褐色土主体	ローム少
2層	暗褐色土	強い	少し強い	暗褐色土	粘土多
3層	暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と粘土	ローム少
4層	暗褐色土	強い	少し強い	暗褐色土主体	粘土少
5層	暗褐色土	強い	少し強い	暗褐色土主体にロームと粘土	焼土粒少
6層	暗褐色土	少し強い	少し強い	暗褐色土主体にローム少	焼土粒微

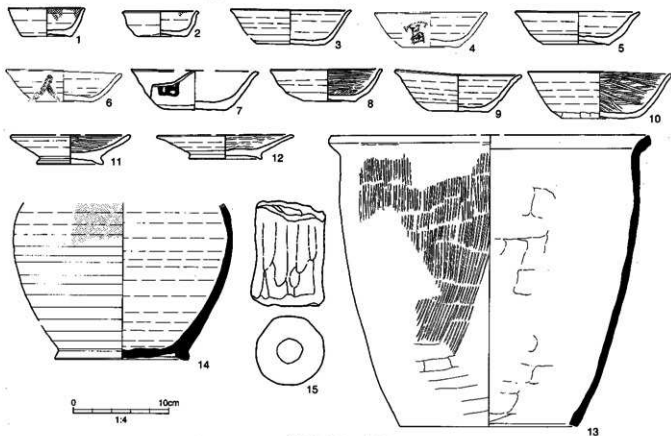


図2-4-64 A042

13

表 2-4-36 A042遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 澁成	胎土	遺存	備考
1	土師器 灯明皿	79×52×30 ロクロ成形 口縁やや外反 体部中央やや丸味をもつ 底部中央回転糸切り後無調整	橙褐色 良	砂粒	完形	口縁内外面 タール状付着物
2	土師器 杯	81×50×27 ロクロ成形 歪みを持つ 口縁外反 平坦面を作出 底部中央回転糸切り後無調整	明褐色 普	砂粒	4/5	口縁内面に微量 のタール状付着 物
3	土師器 杯	(124)×60×37 ロクロ成形 口縁外反 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 後底縁回転ヘラケズリ	暗褐色 普	砂粒	1/2	外面スス付着
4	土師器 杯	(117)×60×37 ロクロ成形 口縁外反 体部下端下半丸味を持つ 体部下端～底部回転ヘラケズリ	橙褐色 普	砂粒並母	2/3	墨書 体部外面 内面スス付着
5	土師器 杯	129×70×35 ロクロ成形 口縁外反 底部上げ底 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	暗茶褐色 普	砂粒	完形	外面スス付着
6	土師器 杯	120×60×34 ロクロ成形 口縁外反 体部下端～底部 回転ヘラケズリ	橙褐色 普	砂粒	2/3	墨書「人」 体部外面
7	土師器 杯	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央一回転糸切り 底部縁ヘラケズリ	褐色 普	普	底部片	墨書「？」 体部外面
8	土師器 杯	115×53×35 ロクロ成形 体部丸味を持つ 外歪 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケ ズリ 内面 ヘラミガキ	明橙褐色 悪	砂粒	略完形	
9	土師器 杯	132×63×43 ロクロ成形 歪みを持つ 口縁外反 体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ?	橙褐色 普	砂粒	2/3	
10	土師器 杯	152×80×50 ロクロ成形 大型の杯 口縁やや外反 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後 底縁ヘラケズリ	明褐色 普	砂粒並母	2/3	
11	土師器 高台付皿	(124)×70×31 ロクロ成形 高台部「ハ」の字状 外面 底部回転糸切り後 内面 ヘラミガキ	明暗褐色 普	砂粒並母	1/2	
12	土師器 高台付皿	(140)×75×26 ロクロ成形 17将部やや肥厚高台部ゆるやかな「ハ」の字状 外面 底部中央回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ (はつきりしない)	橙褐色 普	砂粒並母	1/2	
13	須恵器 瓶	(335)×(187)×310 口縁外反 胴上半にやや膨らみを持つ 外面 口縁頸部ヨコナゲ 胴部上半～下半下端ヘラケズリ	暗赤褐色 良	砂粒多	口縁～ 胴部片	
14	須恵器 長頸壺	—×140×(177) ロクロ成形 高台部「ハ」の字状 内削ぎ 胴部下半下端～底縁回転ヘラケズリ 底部中央 不明	灰褐色 良	砂粒 小石	1/3	外面自然釉
15	土製品 織羽口		橙褐色 悪	粗		

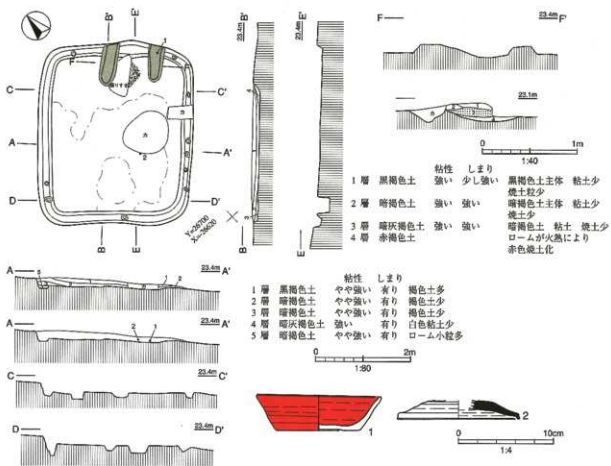


図 2-4-65 A043

表 2-4-37 A043遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	130×88×38 体部外縁 造台形状 ロクロ成形 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止糸切り後ヘラケズリ	橙褐色 着	砂粒	略完形	全身赤彩 口縁内面少量の タール状付着物
2	須恵器 蓋	蓋径(128)×かえり径(126)×残存(20) ロクロ成形 蓋体部上半回転ヘラケズリ 頂部は平坦 かえりやや外反	灰茶褐色 良	粗砂粒	1/4	蓋体部片

#### A043

検出地区 E4-92G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A030・A034・A042等がある。

遺構 小型の隅丸長方形のプラン。床はロームの床で、住居跡南側で硬化面を広範囲に検出している。付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁であるが、掘り込み浅く僅かに検出したのみで住居跡南側は周溝のみを検出した。周溝は全周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。両袖とも袖の内側は良く焼け、燃焼部において明瞭な火床を検出した。燃焼部の形態としてはほぼ平坦であった。周溝は竈下を回っていることが確認できた。天井部は断面で確認できた。

覆土は、色調を基本に5層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土した。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。

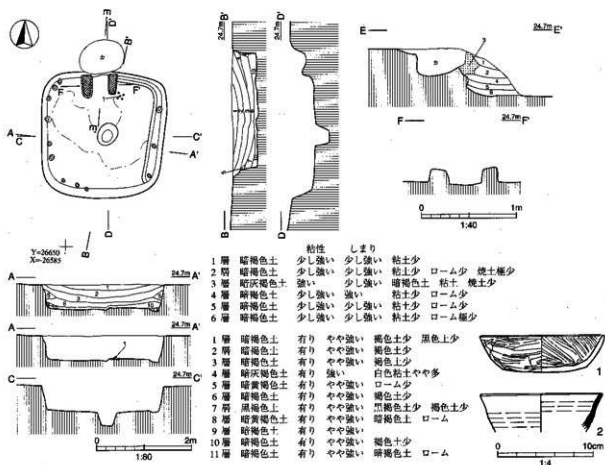


図 2-4-66 A044

表 2-4-38 A044遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 罎	132×84×39 外面 全体ヘラケズリ後、口縁部にヘラミガキ 底部-ヘラケズリ後縁部にヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	◎暗赤褐 ◎暗褐 良	砂粒 炭母	略丸形	内外面スス付着
2	須恵器 罎	130××(40) 口縁外縁 ロクロ成形	◎灰褐 ◎淡褐 黒	砂粒	口縁片	

A044

検出地区 D4-59G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A030・A034・A042等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームのしっかりした床である。小穴1基を検出した。用途は判然としませんが、柱穴か或いはロクロビットが考えられる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は一部で検出した。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。両袖とも袖の内側は若干焼けていたが、燃焼部において明瞭な火床は検出できなかった。天井の一部を断面で確認できた。竈は壊されたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に11層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土した。

表 2-4-39 奈良・平安時代竪穴住居跡第 2 群 一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模:長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	現地施設・位置 周溝・備考
A024a	E4-71G	隅丸方形 3.2×3.0×3.7 N-37°-E	床面 ロームと暗褐色土の貼床 硬化面を 広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 北東隅に位置する 周溝 一部で検出 周溝幅 1m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層に多量に出土	色調を基本に12層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A024b	E4-71G	隅丸長方形 4.67×3.47×0.46 N-37°-E	床面 ロームを踏み固めた深く平坦な床 壁際で硬化面を検出 壁 ロームの床でほぼ垂直に立ち上がる	竈 検出されず 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 1m
		床面直上～覆土上層に多量に出土	色調を基本に9層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A025	D4-80G	隅丸長方形 3.70×2.95×0.46 N-101°-E	床面 壁際はロームと暗褐色の混合土 中央はロームの床で良く踏み固められている 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 2基検出 周溝 1/2周する 周溝幅 0.20m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層に少量に出土	色調を基本に12層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A026	D4-100G	隅丸長方形 4.57×3.21×0.30 N-105°-E	床面 ロームと少量の暗褐色土の混合土による床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 南東隅に位置する 周溝 全周する 周溝幅 0.19m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土	色調を基本に13層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A027	E4-83G	隅丸長方形 5.00×3.52×0.35 N-86°-E	床面 ロームの床一部で硬化面を検出 壁際は黒褐色土とロームの混合土による床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 東隅に位置する コーナー竈 周溝 3/4周する 周溝幅 1m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層に少量に出土	色調を基本に9層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A028	E4-85G	隅丸長方形 3.70×2.80×0.40 N-24°-E	床面 ロームの床住居跡隅に硬化面を検出 壁 ロームの壁 ほぼ垂直に立ち上がる	竈 東隅に位置する コーナー竈 周溝 一部検出 周溝幅 1m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土	色調を基本に9層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A029	E4-52G	隅丸長方形 4.40×2.60×0.45 N-38°-E	床面 ロームの床で一部に硬化面を残す 壁 ロームの壁 ほぼ垂直に立ち上がる	竈 北東隅に位置する 周溝 全周する 周溝幅 1m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に12層に分層 2度に渡り埋没 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A030a	E5-3G	隅丸方形 (3.59)×3.20×0.27 主軸方位不明	床面 ロームの床 広範囲に硬化面を検出 壁 ロームの壁はほぼ垂直に立ち上がる	炉壁 竈 検出されず 周溝 全周する 周溝幅 1m 主柱穴 2本
		床面直上～覆土上層にかけて土器を中心に多量に出土	色調を基本に10層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A030b	E5-3G	隅丸長方形 4.67×3.80×0.42 N-95°-E	床面 壁際はロームの床 中央は黒褐色土 主体の貼床 壁 ロームの壁 ほぼ垂直に立ち上がる	竈 南東隅に位置する 周溝 全周する 周溝幅 1m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて須恵器の坏、蓋を中心に多量に出土	色調を基本に13層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A030c	E5-3G	隅丸方形 3.47×3.28× N-107°-E	床面 ロームと少量の暗褐色土との混合土 の床 壁・ロームの壁 ほぼ垂直に立ち上がる	竈 南東隅に位置する 周溝 全周する 周溝幅 1m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に1層のみ	

A031	E4-52G	隅丸方形 2.95×2.9×0.15 N-86°-E	床面 ロームの床 一部に硬化面 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 2基検出 周溝 一部で検出 周溝幅 不明 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に4層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A032	E4-81G	隅丸方形 3.40×3.38×0.48 N-4°-W	床面 ロームの床 硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 全面する 周溝幅 不明 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土	色調を基本に15層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A033	E4-82G	隅丸方形 3.48×3.20×0.55 N-21°-W	床面 ロームの床 中央に広範囲の硬化面を検出 壁 ロームの壁ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 全面 周溝幅 不明 主柱穴
		床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土	色調を基本に15層に分層 人為的な埋め戻し後概ね自然堆積による埋没が想定される	
A034	E4-83G	隅丸方形 3.42×3.40×0.60 N-5°-W	床面 ロームの床 住居跡中央部は良く踏み固めている 壁 ロームの壁ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 検出されなかった 周溝幅 不明 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に15層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A035	E4-22G	隅丸方形 4.4×2.6×0.45 N-116°-W	床面 ロームの床住居跡南西隅はよく踏み固められている 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 全面 周溝幅 不明 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に11層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A036	E4-53G	隅丸方形 2.58×2.55×0.45	床面 ロームの床 良く踏み固められている 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 全面 周溝幅 0.16m 主柱穴 1本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土	色調を基本に13層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A037	E4-64G	隅丸方形 3.35×3.3×0.5	床面 ロームの床 住居跡西側で比較的大範囲の硬化面を検出 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 3/4周 周溝幅 不明 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に11層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A039	D4-99G	隅丸方形 3.53×3.33×0.62 N-1°-E	床面 ロームの床 速度に踏み固めている 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 全面 周溝幅 0.18m 主柱穴 不明
		覆土下層と覆土上層から少量出土	色調を基本に13層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A040	D4-90G	隅丸方形 (0.60)×3.23×0.39 N-6°-W	床面 ロームの床 竈前で一部硬化面を検出 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 全面 周溝幅 0.28m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土中層にかけて少量出土	色調を基本に16層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A041	D4-90G	隅丸方形 (3.60)×3.23×0.39 N-6°-W	床面 ロームの床 硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁 ほほ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 全面 周溝幅 0.15m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土中層にかけて比較的多量に出土	色調を基本に9層に分層 人為的な埋め戻し後概ね自然堆積による埋没	

A042	E5-2G	隅丸方形 3.30×2.86×0.30 N-17°-E	床面 ロームの床 全体として軟弱である が住居跡南側で一部の硬化面を検出 壁 ロームの壁 斜めに直線的に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 3/4 周 周溝幅 0.18m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土中層にかけて比較的多 量に出土	色調を基本に13層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	
A043	E4-92G	隅丸長方形 3.82×3.24×0.18 N-43°-E	床面 ロームの床 住居跡南側で硬化面を 広範囲に検出 壁 ロームの壁であるが、掘り込みは浅く 僅かに検出したのみで住居跡南側は周溝の みを検出	竈 北壁中央に位置する 周溝 全周する 周溝幅 0.24m 主柱穴 不明
		覆土中から少量出土	色調を基本に5層に分層 概ね自然堆積によ る埋没が想定される	
A044	D4-59G	隅丸方形 2.75×2.57×0.51 N-12°-W	床面 ロームのしっかりした床 壁 ロームの壁 ほぼ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央に位置する 周溝 一部で検出する 周溝幅 0.21m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に11層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	



2 掘立柱建物跡

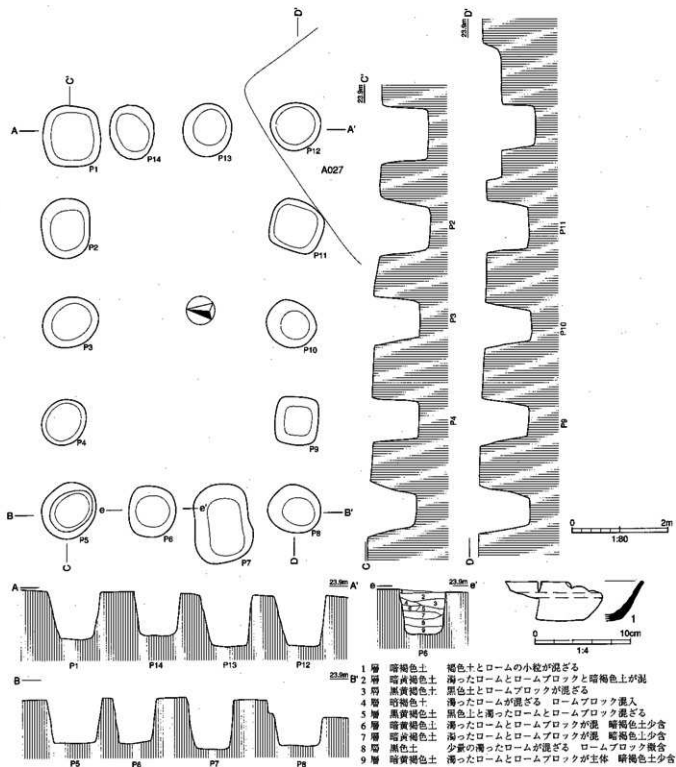


図 2-4-67 B001

表 2-4-40 B001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 環	-X-X38 ロタロ成形 底部全体一回転ヘラ切り	灰色 普	普	口縁片	

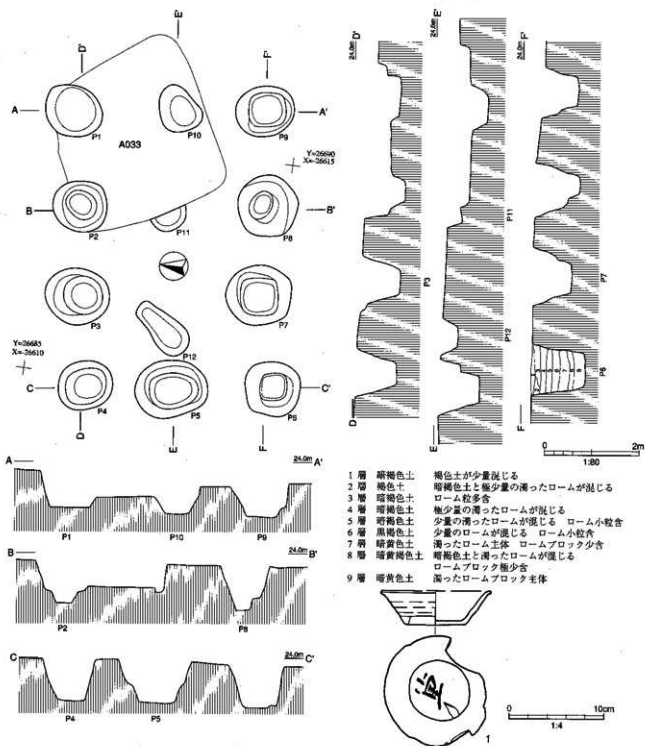


図 2-4-68 B002

表 2-4-41 B002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 L径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	116×62×36 ロクロ成形 体部ド端ヘラケズリ 底部全体一回転糸切り 底縁ヘラケズリ	褐色 音	音	2/3	墨書底部外面 「小黑」

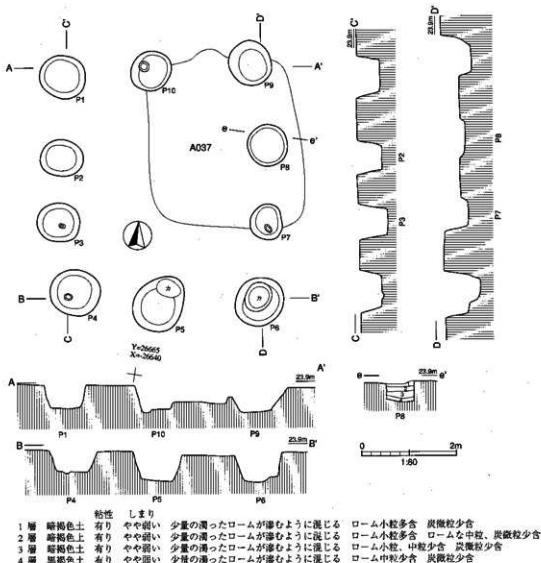


図2-4-69 B003

#### B001

検出地区 E4-73G。台地平坦面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A034・B002等がある。A027と重複関係にあるが、本掘建柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行4間(8.12m)×梁行3間(4.84m)。桁行の主軸方位はN-86°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡で、桁行、梁行がほぼ東西南北に一致する。各柱穴の堀方の形状は、方形、円形のものが混在している。各柱穴ともしっかり掘られている。

遺物 各柱穴から少量出土。P6から須恵器の杯の口縁、鉄滓が出土している。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘立柱建物と判断した。同じく奈良・平安時代の堅穴住居跡A027より新しい時期になり、向境遺跡の奈良平安時代第2群の集落の展開を考える上で、示唆に富む。

#### B002

検出地区 E4-82G。台地平坦面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A034・B004・B005等がある。A033と重複関係にあるが、本掘建柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行3間(5.84m)×梁行2間(3.92m)。桁行の主軸方位はN-82°-Eとなる。総柱の掘建柱か、

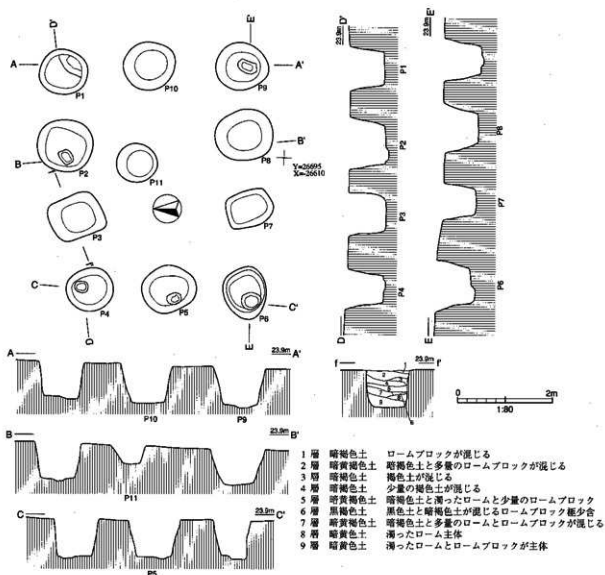


図 2-4-70 B004

2間×2間の側柱に庇が取り付け付いたものか判然としなかったが、P12の位置が悪いことから、恐らく後者であろうB001同様、桁行、梁行がほぼ東西南北に一致する。各柱穴の掘方の形状は、不整形で、各柱穴ともしっかり掘られている。

遺物 少量出土。P10から墨書土器「小黑」出土。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良～平安時代の掘立柱建物と判断した。同じく奈良時代の堅穴住居跡A033より新しい時期になり、向境遺跡の奈良平安時代第2群の集落の展開を考える上で、示唆に富む。

#### B003

検出地区 E4-54G。台地平坦面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A031・A036等がある。A037と重複関係にあるが、本掘立柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行3間(4.88m)×梁行2間(4.12m)。桁行の主軸方位はN-8°-Wとなる。側柱の掘立柱建物跡で、B001・B002同様、桁行、梁行がほぼ東西南北に一致するが、本掘立柱建物跡は長軸(正誤梁行)が南北方向に一致している。各柱穴の掘方の形状は、不整形で、各柱穴ともしっかり掘られている。

遺物 遺物は出土しなかった。

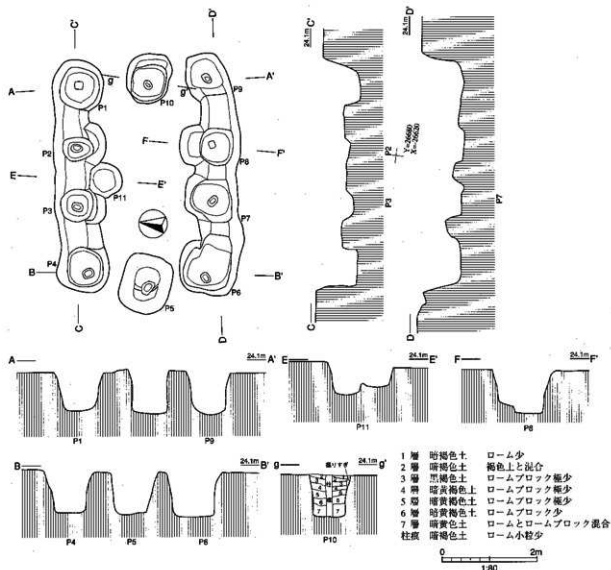


図2-4-71 B005

**所見** 遺物は出土しなかったが、遺構の規模・形態及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物と判断した。同じく奈良・平安時代の縦穴住居跡A037より新しい時期になり、向境遺跡の奈良平安時代第2群で検出された掘立柱建物跡で住居跡と重複関係にあるものは全て住居跡より新しい。本遺跡の集落の展開を考える上で、示唆に富む。

#### B004

**検出地区** E4-91G。台地平坦面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A026・A033・B002等がある。

**遺構** 桁行3間(4.80m)×梁行2間(3.68m)。桁行の主軸方位はN-87°-Eとなる。御柱の掘立柱建物跡と思われるが、柱穴列の内側でP11を検出しているため、庇付の御柱も検討の余地が残る。桁行、梁行がほぼ東西南北に一致し、規模、形態、主軸方位等でB002に類似する。各柱穴の堀方の形状は、方形、不整形のものが混在し、各柱穴ともしっかり掘られている。

**遺物** 遺物は出土しなかった。

**所見** 遺物は出土しなかったが、遺構の規模・形態及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物と判断した。B002と同時期か。

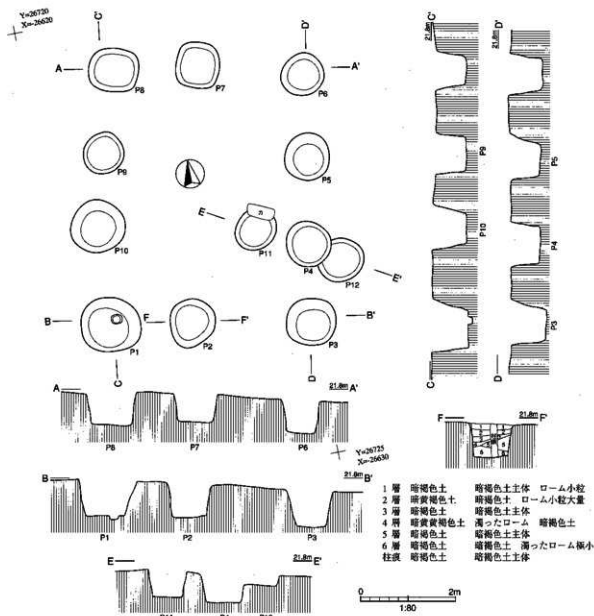


図2-4-72 B022

**B005**

検出地区 E4-72G。台地平坦面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A024・A033・B001・B002等がある。

遺構 桁行3間(4.20m)×梁行2間(3.92m)。桁行の主軸方位はN-84°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡と思われる。完掘状況では、溝もちの掘立柱建物とも考えられるが、掘立柱建物自体の拡張も考えられるので、なお、検討の余地が残る。B001・B002同様、桁行、梁行がほぼ東西南北に一致するが、本掘立柱建物跡は長軸(桁行)が南北方向に一致している。各柱穴の掘方の形状は、方形を意識した不整形で、各柱穴ともしっかり掘られている。

遺物 各柱穴から土師器の甕胴部片、陶器片(何れも細片)など少量が出土した。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物と判断した。

**B022**

検出地区 E5-22G。台地先端の緩斜面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A054・

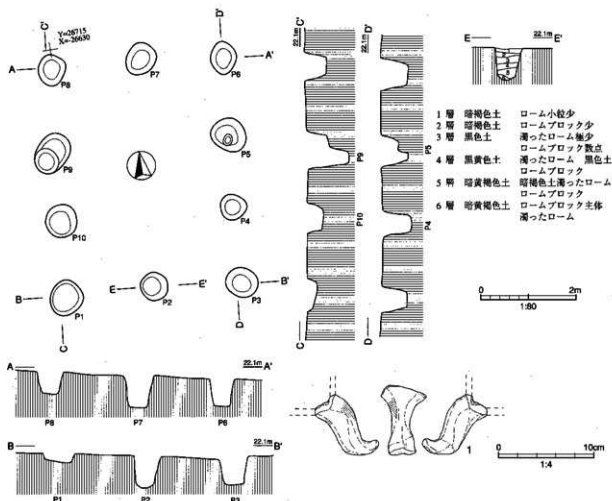


図 2-4-73 B023

表 2-4-42 B023遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 形状	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	陶器 獸蹄	残存長(74)獸蹄と思われるつま先部分が立ち上がり断面三角状を呈する 指痕による調整か? 遺存状態不良だが断片的に軸葉が残存する	白色 良	きめ 細かく 緻密	断片	

A055・B021・B023等がある。

遺構 桁行3間(5.40m)×梁行2間(4.20m)。桁行の主軸方位はN-11°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。側柱の柱穴の他にP11・P12を検出したが、本掘立柱建物跡に伴うものかどうかは不明である。

遺物 柱穴堀方から土師器小破片が少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。B022・B023は、規模、主軸方位で近似している。同時存在の可能性が有るだろう。

#### B023

検出地区 E5-14G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A030・A055・B022・D013等がある。

遺構 桁行3間(4.88m)×梁行2間(4.20m)。桁行の主軸方位はN-9°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれているが、規模が他の掘立

柱建物跡と比べやや小規模である。

遺物 柱穴堀方からは遺物は出土していないが、同じ検出グリッドから三彩陶器と思われる獸脚が出土している。

所見 柱穴堀方からは遺物は出土しなかったが、遺構の規模、形態及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。グリッド出土の獸脚は同じく獸脚を出土したA030のものと近似し、遺構としても近接している。A030との強い相関関係を感じる。ほぼ同時期と考えて良いのではないだろうか。また、B022・B023は、規模、主軸方位で近似している。これもまた、同時存在の可能性が有るだろう。

表 2-4-43 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出区	間数		主軸方位		柱穴規模(長軸×短軸×深さ)	備考
		桁行	梁行	桁行	梁行		
B001	E7-73	4×3		N-86°-E		P1 1.30×1.22×1.00 P8 1.10×1.12×1.06 P2 1.28×1.04×1.00 P9 0.92×1.02×0.99 P3 1.20×1.05×0.98 P10 1.05×0.84×0.97 P4 1.00×0.88×1.00 P11 1.14×1.08×0.89 P5 1.04×1.28×0.58 P12 1.05×1.00×1.06 P6 1.10×1.00×0.98 P13 1.14×1.02×1.10 P7 1.68×1.12×1.06 P14 1.14×0.92×0.90	
		8.12		4.84			
B002	E4-82	3×2		N-82°-E		P1 1.28×1.10×0.38 P7 1.40×1.25×0.80 P2 1.28×1.14×0.56 P8 1.32×1.28×0.95 P3 1.36×1.20×0.80 P9 1.25×1.05×0.69 P4 1.16×1.03×0.83 P10 1.00×0.82×0.32 P5 1.54×1.22×0.82 P11 0.80×0.38×0.18 P6 1.22×1.14×1.12 P12 1.34×0.70×0.32	
		5.84		3.92			
B003	E4-54	3×2		N-8°-W		P1 1.30×1.22×1.00 P6 1.02×1.02×0.58 P2 0.90×0.78×0.50 P7 0.75×0.68×0.32 P3 0.90×0.80×0.60 P8 0.90×0.85×0.50 P4 1.06×0.98×0.48 P9 0.95×0.88×0.40 P5 1.04×1.28×0.58 P10 0.86×0.86×0.45	
		4.88		4.12			
B004	E4-91	3×2		N-87°-E		P1 1.02×1.00×0.73 P7 1.00×0.80×0.67 P2 1.18×1.08×0.83 P8 1.20×1.06×0.72 P3 1.10×0.90×0.78 P9 1.09×1.02×0.82 P4 0.98×0.90×0.80 P10 1.10×1.02×0.80 P5 1.14×0.88×0.82 P11 0.87×0.81×0.38 P6 1.10×0.94×0.83	
		4.80		3.68			
B005	E4-72	3×2		N-84°-E		P1 0.90×0.80×0.80 P7 0.90×0.88×0.21 P2 0.64×0.52×0.10 P8 0.80×0.70×0.24 P3 0.68×0.68×0.18 P9 0.90×0.90×0.87 P4 0.84×0.75×0.88 P10 1.06×0.98×0.90 P5 1.24×1.05×0.88 P11 0.75×0.78×0.25 P6 1.18×1.00×0.84	
		4.20		3.92			
B022	E5-22	3×2		N-11°-E		P1 1.30×1.18×0.78 P6 0.92×0.90×0.70 P2 1.04×0.96×0.70 P7 1.06×1.00×0.56 P3 1.04×1.01×0.74 P8 1.08×1.00×0.62 P4 0.94×0.94×0.62 P9 0.90×0.85×0.65 P5 1.00×0.94×0.62 P10 1.14×1.12×0.72	
		5.40		4.20			
B023	E5-14	3×2		N-9°-E		P1 0.74×0.70×0.20 P6 0.70×0.54×0.58 P2 0.67×0.60×0.58 P7 0.66×0.64×0.70 P3 0.67×0.60×0.58 P8 0.66×0.58×0.46 P4 0.54×0.54×0.60 P9 0.90×0.66×0.84 P5 0.78×0.66×0.40 P10 0.70×0.64×0.36	
		4.88		4.20			



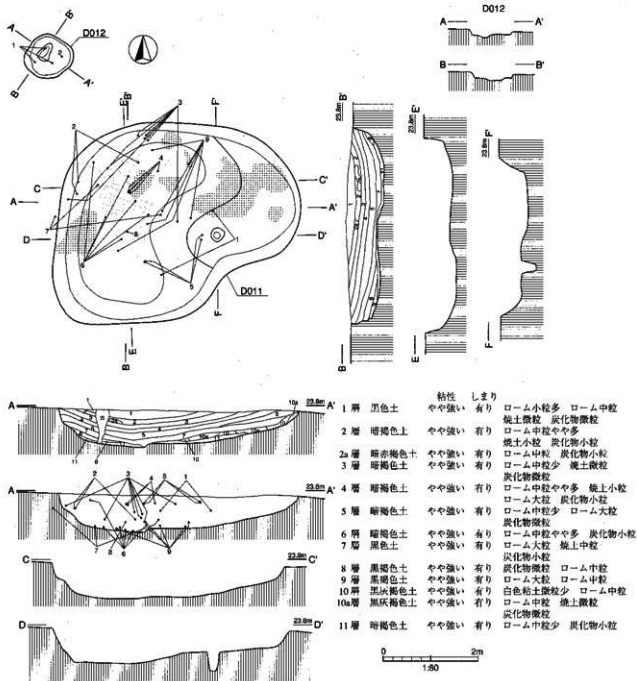


図2-4-74 D011・D012

#### D011

検出地区 E4-74G。台地平坦面に位置する。周辺遺構としてD012・A027・A028・A037等がある。

遺構 不整形のプランで、底部はほぼ平坦、壁は斜めに立ち上がる。

覆土は、色調を基本に11層に分層した。底面付近には粘土が、覆土上層では焼土が広範囲に検出され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 底面直上から、覆土上層にかけて多量に出土。接合資料でみると底面直上と覆土上層でのまとまりがある。仏教関連の墨書土器、鍛冶関連の遺物の出土が注目される。

所見 出土遺物から奈良～平安時代の土坑と判断した。遺構の形態、遺物の出土状況から、2基

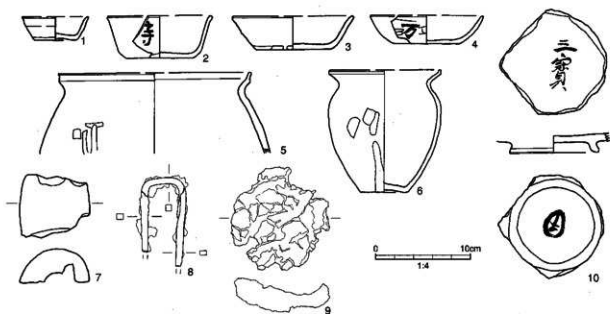


図 2-4-75 D011

表 2-4-44 D011遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小形環	70×66×25 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転切り後底縁ヘラケズリ	褐色 青	青	2/3	口唇部にスズ 附着灯明皿 として使用か
2	土師器 環	110×74×45 ロクロ成形 箱形 外面 底部全体ヘラケズリ	橙褐色 青	青	1/3	墨書「寺」 体部外面正位
3	土師器 環	130×80×35 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体ヘラケズリ	褐色 青	青	1/3	
4	土師器 環	(120)×-×30 ロクロ成形 外面 胴部上半～下端ヘラケズリ 底部全体ヘラケズリ	褐色 青	青	1/4	墨書「万」 体部外面正位
5	土師器 壺	(220)×-×(86) ロクロ成形 常総型 口唇をつまみ上げる 外面 口縁頸部ナテ 胴部縦位のヘラケズリ	褐色 青	砂粒少量 含む 青	口縁片 ～ 胴部片	
6	土師器 小形壺	(114)×50×128 ロクロ成形 外面 口縁～胴部上半ナテ 中位～下端縦位のヘラケズリ	暗褐色 黒褐色 青	青	1/3	
7	編 羽口		①橙褐色 ②橙褐色 ③	粗	破片	
8	鉄器 鏝?	94×7×6 -×6.5×6 重量38.8g				
9	鉄製品 碗形滓	109×103×35 重量157.8g				
10	土師器 高台付環	-×-×- ロクロ成形 外面 底部全体回転ヘラケズリ	褐色 青	青	底部片	墨書「三寶」 底部内面 「㊸」底部外面

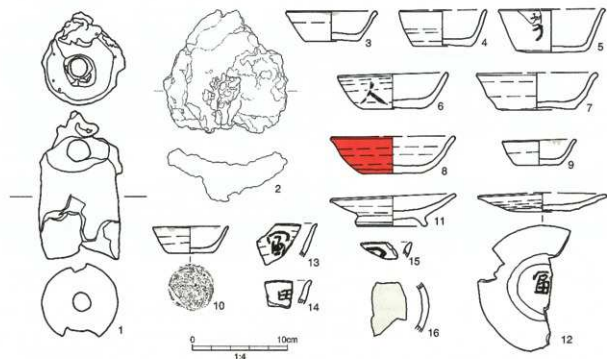


図 2-4-76 D012

の土坑の重複が考えられる。基本的な形態については、D013・D014の様な楕円形の土坑が直行して重複していると想定する。用途については、本土坑から向境遺跡第2群の住居跡から出土する特徴的な遺物（「寺」・「三宝」等の仏教関連の墨書土器、碗形鉄滓、轆の羽口等の鍛冶関連の遺物）が出土していることから、近隣のA026・A027等の住居跡で生活した人々の廃棄土坑を考えている。何れにしても慎重を期さなければならないだろう。また、隣接して位置するD012との関係も考慮しなければならないだろう。

#### D012

検出地区 E4-73G。台地平坦面に立地する。周辺遺構としてD011・A027・A028・A037等がある。

遺 構 不整の隅丸方形の掘込みの浅い土坑。底部はほぼ平坦、壁は斜めに立ち上がる。

遺 物 底面直上から覆土上層にかけてぎっしりとつまった状態で出土。墨書土器、鍛冶関連の遺物の出土が目される。

所 見 出土遺物から奈良～平安時代の土坑と判断した。用途については、本土坑から向境遺跡第2群の住居跡から出土する特徴的な遺物（墨書土器、鍛冶関連の遺物）が出土していることから、近隣のA027・A028等の住居跡で生活した人々の廃棄土坑を考えている。何れにしても慎重を期さなければならないだろう。また、隣接して位置するD011との関係も考慮しなければならないだろう。本土坑では、D011で出土していない高台付の皿も出土していることからD011より、やや新しい土坑と考えられる。

表 2-4-45 D012遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土製品 輪羽口	85×胴中央82×(147) 先端部に鉄分付着 手づね	砂灰褐色 ～褐色 砂褐色 系	粗		
2	鉄製品 碗形滓	131×125×56 重量522.5g 木炭及び木炭痕を有する砂鉄焼結塊付着				
3	土師器 坏	94×56×32 ロクロ成形 外面 底部全体回転ヘラケズリ	褐色 香	普	1/3	口縁内外面に スス付着灯明皿 として使用か?
4	土師器 坏	90×60×38 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラ切り	褐色 香	普	1/3	口縁内面に スス付着
5	土師器 坏	110×74×45 ロクロ成形 箱形 外面 底部全体静止ヘラケズリ	橙褐色 香	普	3/4	墨書「寺」 体部外面正位
6	土師器 坏	114×66×38 ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	橙褐色 香	普	1/3	墨書「人」 体部外面正位
7	土師器 坏	124×80×39 ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切り後底縁未調整	褐色 香	普	1/3	
8	土師器 坏	130×62×39 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り底縁ヘラケズリ	砂赤褐色 砂褐色 香	普	1/3	赤彩 体部外面
9	土師器 坏	76×47×27 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラ切り	褐色 香	普	完形	口縁内面にスス 付着灯明皿と して使用か?
10	土師器 坏	78×47×28 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切り	褐色 香	普	完形	口縁内外面に スス付着灯明皿 として使用か?
11	土師器 高台付皿	130×台部径70×32 ロクロ成形 外面 底部全体回転ヘラ切り 内面 胴部丁寧なミガキを施す	橙褐色 香	普	1/2	
12	土師器 高台付皿	－×－×－ ロクロ成形 外面 底部中央回転ヘラ切り後底縁ヘラケズリ 内面 胴部丁寧なミガキを施す	褐色 香	普	1/4	墨書「冨」 底部外面 高台部欠損?
13	土師器 坏	－×－×－ ロクロ成形	褐色 香	普	口縁片	墨書「冨」 体部外面正位
14	土師器 坏	－×－×－ ロクロ成形	褐色 香	普	口縁片	墨書「田」 体部外面正位
15	土師器 坏	－×－×－ ロクロ成形	褐色 香	普	口縁片	墨書 「？」 体部外面正位
16	二彩陶器	－×－×－ ロクロ成形	砂緑色 砂乳白色 良	緻密	破片	

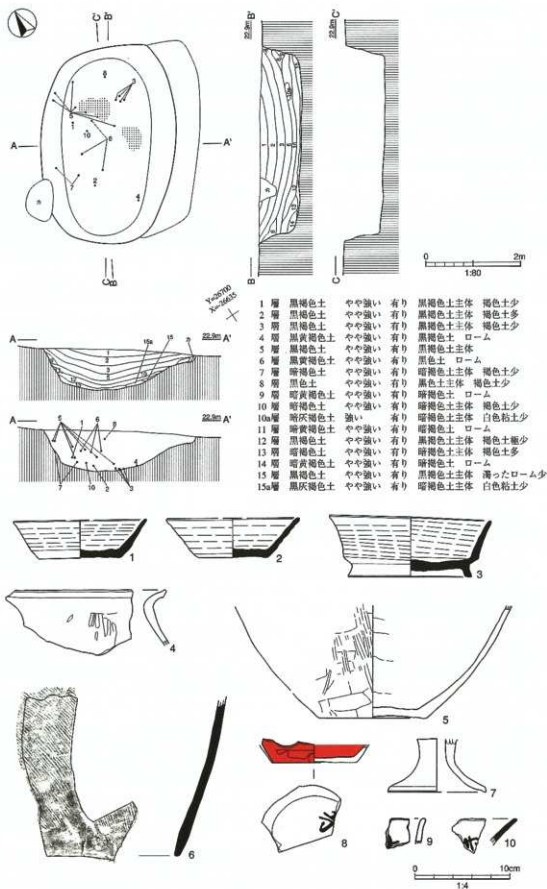


图 2-4-77 D013

表 2-4-46 D013遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	注 量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	須恵器 坏	140×85×40 ロクロ成形 逆台形状を呈する 体部下端～底部回転ヘラケズリ	灰褐色 悉	砂粒 酸化物粒	3/4	
2	須恵器 坏	(138)×72×42 ロクロ成形 体部外傾 体部下端～底部回転ヘラケズリ	灰色	粗砂粒	3/4	
3	須恵器 高台付鉢	170×130×66 ロクロ成形 高台部「ハ」の字状 口縁外反 体部下端～底部回転ヘラケズリ	暗灰色 普	粗砂粒	2/3	
4	須恵器 甕	×××× ロクロ成形 口唇部を若干つまみ上げる	淡褐色 普	砂粒	口縁片	
5	土師器 甕	××110×(114) 外面 胴部下半下端ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 胴部下半ヘラナデ	暗赤褐色 良	砂粒	胴部～ 底部片	
6	須恵器 甕	×××× ロクロ成形 外面タタキ 内面ナデ	灰色 良	砂粒	胴部～ 底部片	
7	土師器 高坏	×××× ロクロ成形	橙褐色 普	普	胴部	
8	土師器 坏	×××× ロクロ成形	赤褐色 普	普		墨書「寺」 底部外面 赤彩内外全面
9	土師器 坏	×××× ロクロ成形 口唇部若干外反	褐色 普	普	口縁片	墨書「口」 体部外面
10	須恵器 坏	×××× ロクロ成形	灰色 普	普	口縁片	墨書「？」 体部外面横位

## D013

検出地区 E4-94G。台地平坦面に位置する。周辺遺構としてA026・A029・B023等がある。

遺 構 楕円形のプランで、底部はほぼ平坦、壁は斜めに立ち上がる。

覆土は、色調を基本に15層に分層した。覆土下層～中層にかけては粘土が、覆土上層では焼土が広範囲に検出され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 底面直上から、覆土上層にかけて多量に出土。接合資料でみると底面直上と覆土中層での纏まりがある。仏教関連の墨書土器が目される。

所 見 出土遺物から奈良～平安時代の土坑と判断した。用途については、本土坑から向境遺跡第2群の住居跡から出土する特徴的な遺物（「寺」・「三宝」等の仏教関連の墨書土器、赤色塗彩の坏等）が出土していることから、近隣のA026・A029等の住居跡で生活した人々の廃棄土坑を考えている。何れにしても慎重を期さなければならないだろう。類例として、D011・D014等がある。

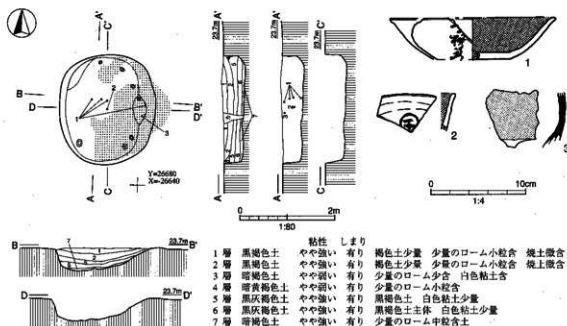


図 2-4-78 D014

表 2-4-47 D014遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(172)×(72)×44 外面 体部下端ヘラケズリ後 内面 丁寧なミガキ	全体をヘラミガキ	砂褐色 砂黒色 香	普	1/3	墨書体部外面 正位「三宝」 内黒
2	土師器 坏	-×-×- 内面 丁寧なミガキ		砂褐色 砂黒色 香	普	口縁片	墨書体部外面 「印」 内黒
3	須恵器 壺	-×-×- ロクロ成形 胴部下半ケズリ		砂緑灰色 砂灰褐色 香	普	胴部片	灰釉

D014

検出地区 E4-84G。台地平坦面に位置する。周辺遺構としてA028・A037等がある。

遺 構 楕円形のプランで、底部はほぼ平坦、壁は斜めに立ち上がる。

覆土は、色調を基本に7層に分層した。覆土上層にかけて粘土が広範囲に検出され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 覆土下層～覆土上層にかけて比較的多量に出土。仏教関連の墨書土器が目目される。また、陶器片(細片)が出土している。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。用途については、本土坑から向境遺跡第2群の住居跡から出土する特徴的な遺物(「寺」・「三宝」等の仏教関連の墨書土器)が出土していることから、近隣のA027・A036等の住居跡で生活した人々の廃棄土坑を考えている。何れにしても慎重を期さなければならないだろう。類例として、D011・D013等がある。

(3) 第3群の遺構と遺物

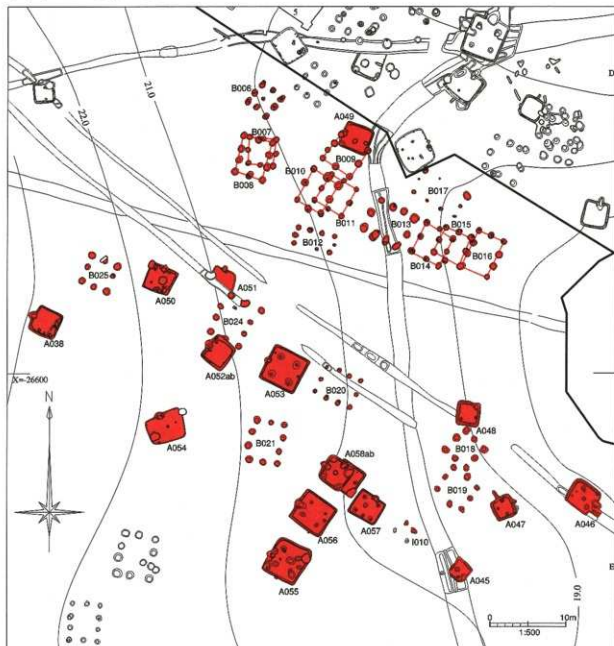


図 2-4-79 奈良・平安時代第3群遺構配置図

第3群は、調査区東側に入り込む小支谷を取り巻くように展開する一群で、隣接する境掘遺跡と一帯となる集落である。竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡18棟、その他の遺構1基を検出した。時期的には奈良～平安時代で、平安時代が主体になると思われる。

1 竪穴住居跡

A045

検出地区 E5-63G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A047・A057・B019等がある。中世以降の溝と重複関係にある。

遺 構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出した。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は3/4周する。竈は北隅で検出されコーナー竈である。煙道は壁に対して斜行して掘り込まれていた。



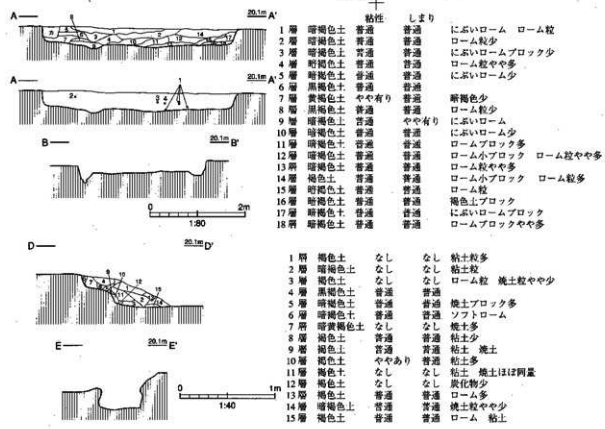
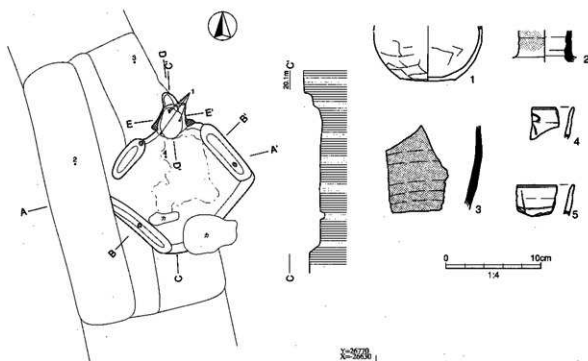


図2-4-80 A045

溝に壊されていたため遺存状況はあまり良くなかった。然焼部はやや窪み、明瞭な火床は検出されなかった。

覆土は色調を基本に18層に分層。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

表 2-4-48 A045遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型壺	—×59×(59) 外面 胴部下半～底部-ヘラケズリ 内面 胴部下半-ヘラナデ	暗褐色 青	砂粒 雲母	胴部片 ～ 底部片	外面スス付着
2	陶器? 長頸壺	—×—×(33) ロクロ成形	灰白色 良	砂粒	頸部片	外面自然袖
3	陶器 長頸壺	—×—×(93) ロクロ成形	緑灰色 灰褐色 青	砂粒	胴部片	外面自然袖
4	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	橙褐色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面
5	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	橙褐色 青	青	口縁片	線刻「□」 体部外面

## A046

検出地区 E5-63G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A045・A047・B019等がある。中世以降の溝と重複関係にある。

遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、硬化面を広範囲に検出した。竈付近はやや軟弱であった。小穴を8基検出した。用途は不明である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は1/2周する。竈は南東壁中央で検出された。煙道がやや長めのタイプである。溝に壊されていたため遺存状況はあまり良くなかった。燃焼部はやや窪み、明瞭な火床を検出した。

覆土は色調を基本に20層に分層。床面直上～覆土下層で焼土、炭化物を検出している。人為的な埋め戻しが想定される。①・②は溝の覆土である。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。竈が南にある珍しい例と言えよう。

## A047

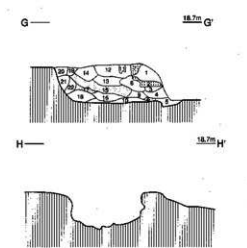
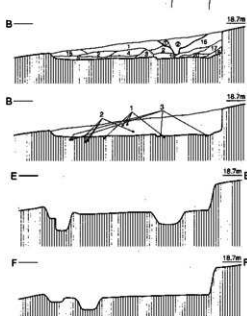
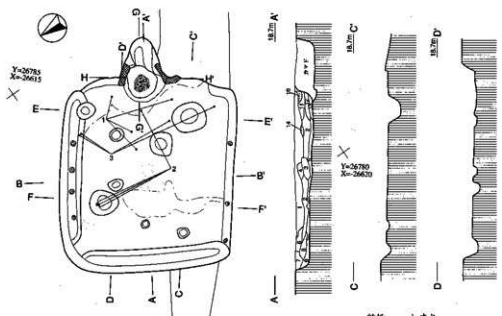
検出地区 E5-72G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A045・A046・B019等がある。

遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、硬化面を広範囲に検出した。竈付近はやや軟弱であった。小穴を2基検出した。用途は不明である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は南東壁中央で検出された。煙道の長いタイプである。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。燃焼部はやや窪み、明瞭な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に22層に分層。床面直上～覆土下層で焼土を検出している。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、奈良時代の竪穴住居跡と判断した。



層	土質	粘性	しまり	備考
1層	黒褐色土	なし	なし	ローム粒少
2層	暗褐色土	普通	なし	ローム粒やや多
3層	暗赤褐色土	なし	なし	ローム塊やや多
4層	暗褐色土	なし	なし	焼土 暗褐色やや多
5層	暗褐色土	普通	普通	焼土やや多
6層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒 一部炭化物
7層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒多 一部ロームブロック
8層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒
9層	褐色土	普通	普通	ローム粒多
10層	暗灰褐色土	やや有り	普通	粘土多
11層	暗褐色土	普通	普通	粘土粒やや多
12層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒やや多
13層	暗褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
14層	暗灰褐色土	やや有り	普通	暗褐色 粘土多
15層	暗褐色土	やや有り	普通	ローム粒多
16層	褐色土	やや有り	普通	ローム粒多
17層	暗褐色土	なし	なし	ローム小ブロック
18層	暗褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
19層	暗褐色土	普通	やや有り	ローム小ブロック
20層	暗褐色土	普通	なし	炭化物
21層	褐色土	なし	なし	ローム小
22層	明褐色土	なし	なし	ローム多

層	土質	粘性	しまり	備考
1層	暗褐色土	やや有り	やや有り	暗褐色土主体
2層	暗灰褐色土	有り	有り	粘土多含
3層	暗褐色土	有り	やや有り	粘土、焼土含
4層	灰褐色土	なし	なし	炭化物多含
5層	褐色土	なし	なし	焼土、ローム粒ほぼ同量含
6層	暗赤褐色土	なし	なし	焼土主体
7層	暗灰褐色土	普通	普通	粘土多含
8層	褐色土	やや有り	やや有り	粘土多含、炭化物粒少含
9層	褐色土	普通	普通	ロームブロック、焼土含
10層	明褐色土	なし	なし	ロームブロック多含
11層	褐色土	なし	やや有り	焼土ブロック多含
12層	褐色土	普通	普通	褐色土主体
13層	褐色土	普通	有り	粘土多含
14層	褐色土	なし	やや有り	焼土多含
15層	赤褐色土	なし	なし	焼土主体
16層	褐色土	なし	なし	ほぼ均一な層
17層	暗赤褐色土	なし	なし	焼土多含
18層	褐色土	なし	なし	焼土小ブロック、炭化物含
19層	明褐色土	普通	普通	にぶいローム
20層	明褐色土	普通	普通	にぶいローム主体
21層	明褐色土	普通	普通	ソフトローム
22層	褐色土	普通	普通	ソフトローム焼土粒を混入

図2-4-81 A046

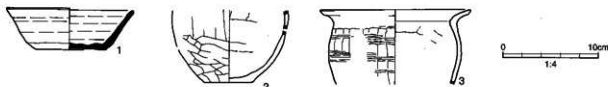


図 2-4-82 A046(2)

表 2-4-49 A046遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	推定(135)×73×44 ロク口成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央ヘラケズリ?	暗灰色 良	粗砂粒	1/3	
2	土師器 小型甕	一×52×残存(76) 輪積み 外面 胴部下半一縦ヘラケズリ 下端一ナメヨコのヘラケズリ 底部ヘラケズリ 胴部下端ヘラケナダ	暗褐色 橙褐色 悪	砂粒	1/3	
3	土師器 小型甕	(158)×一×残存(79) 口縁外反 頸部「く」の字状 輪積み 外面 口縁 頸部ヨコナダ 胴部上半タテヘラケズリ後 横ヘラミガキ 内面 口縁横ナダ 頸部 胴部上半ヘラケナダ	黒褐色 善	砂粒	口縁一 胴部片	

#### A048

検出地区 E5-61G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A047・B018等がある。

遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、硬化面を広範囲に検出した。竈付近と住居跡中央部はやや軟弱であった。小穴を2基検出した。P1は出入口施設と考えられ、P2は用途は不明である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北東壁隅で検出された。コーナー竈で、煙道も壁に対して斜行して切り込まれていた。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。燃焼部はやや窪み、明瞭な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に30層に分層。床面直上焼土を検出している。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、奈良時代の竈穴住居跡と判断した。須恵器の甕と馬歯が相伴して出土していることは興味深い。雨乞い等の祭祀に関連する可能性がある。

#### A049

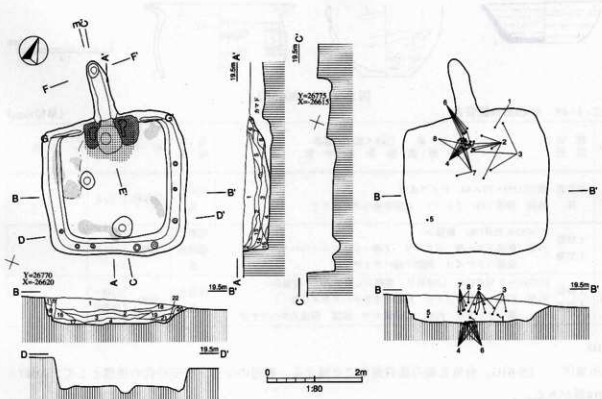
検出地区 D5-57G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B010・B011等がある。隣接する向境遺跡の住居跡群と一帯となる住居跡である。B009と重複関係にあるが本住居跡の方が新しい。

遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームと少量の暗褐色土との混合土による貼床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出した。小穴を2基検出した。P1は出入口施設と考えられ、P2は用途は不明である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は西壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が焼けていたが、燃焼部では明瞭な火床は検出できなかった。燃焼部の形状は、若干掘り凹められていた。天井部は断面で確認され、竈は壊されたと判断した。

覆土は色調を基本に9層に分層。床面直上～覆土下層にかけて広範囲に粘土、僅かな焼土、炭化物を検出している。人為的な埋め戻しが想定される。

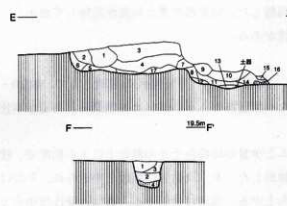
遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。鉄製品の出土が多いことが注目される。

所見 出土遺物から、平安時代の竈穴住居跡と判断した。



- |     |      |    |    |              |
|-----|------|----|----|--------------|
| 1層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒やや多      |
| 2層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒         |
| 3層  | 褐色土  | 普通 | 普通 | ローム粒多        |
| 4層  | 明褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒多        |
| 5層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒         |
| 6層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒 粘土焼土少   |
| 7層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒 やや多     |
| 8層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土多          |
| 9層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒 焼土粒 粘土粒 |
| 10層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土多          |
| 11層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | ローム小ブロック     |

- |     |      |    |    |                   |
|-----|------|----|----|-------------------|
| 12層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒やや多           |
| 13層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | ローム粒ブロックやや多       |
| 14層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | 焼土粒少              |
| 15層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | ロームブロック           |
| 16層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | ローム粒多             |
| 17層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | 焼土ローム粒、ロームブロックやや多 |
| 18層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | にぶいローム            |
| 19層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム小ブロック          |
| 20層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | にぶいローム            |
| 21層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | にぶいローム            |
| 22層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ロームブロック           |



- |     |      |    |    |            |
|-----|------|----|----|------------|
| 1層  | 灰褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土粒多       |
| 2層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土少        |
| 3層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | ローム粒少      |
| 4層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土粒少       |
| 5層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 焼土少        |
| 6層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | にぶいローム粒少   |
| 7層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土粒        |
| 8層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 焼土粒        |
| 9層  | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土 焼土やや少   |
| 10層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土やや多      |
| 11層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土やや多      |
| 12層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土やや多      |
| 13層 | 褐色土  | 普通 | 普通 | 焼土粒、炭化物混じる |
| 14層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土粒やや多     |
| 15層 | 無褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土粒        |
| 16層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土粒        |

- |    |      |    |    |       |
|----|------|----|----|-------|
| 1層 | 灰褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土粒多  |
| 2層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 焼土少   |
| 3層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 焼土粒極少 |
| 4層 | 暗褐色土 | 普通 | 普通 | 粘土少   |

図 2-4-83 A047

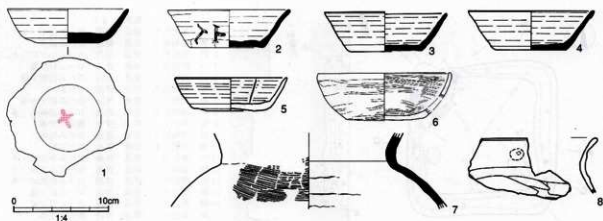
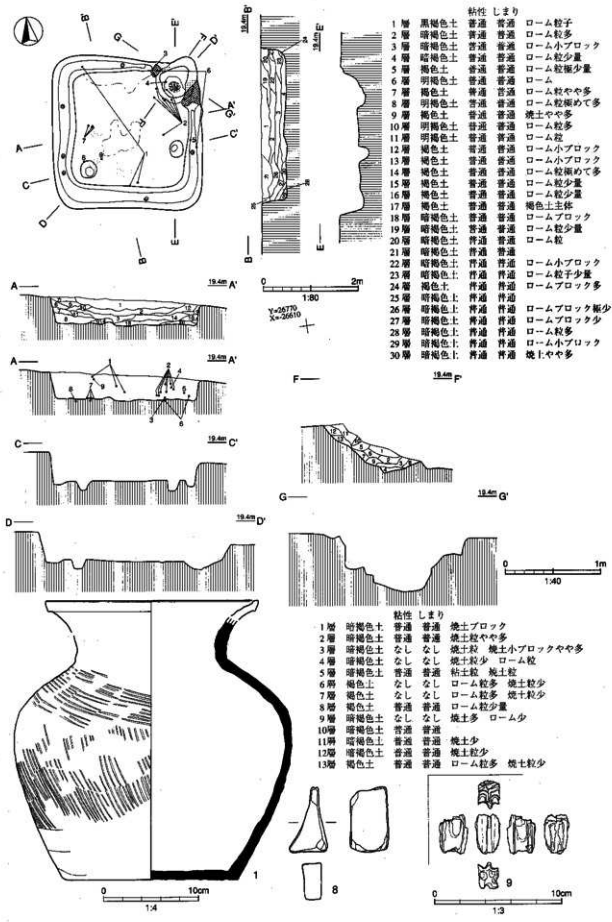


図2-4-84 A047(2)

表2-4-50 A047遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	128×65×36 ロクロ成形 体部外傾 外面 胴部下端～底部一回転ヘラケズリ 底部中央回転余切り後、底縁回転ヘラケズリ	白褐色 悪	砂粒 雲母	2/3	朱書「×」 底部外面
2	須恵器 坏	127×78×40 体部外傾 底部大きい ロクロ成形 外面 胴部下端～回転ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	灰褐色 悪	砂粒 雲母	略完形	墨書「山人」 体部外面
3	須恵器 坏	130×78×42 体部外傾 ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ	暗灰褐色 普	小礫	4/5	
4	須恵器 坏	132×73×42 体部外傾 ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ロクロ 体部下端一回転ヘラケズリ	白灰色 悪	粗砂粒	4/5	
5	土師器 坏	118×77×35 ロクロ成形 外面 底部中央回転余切り後、底縁回転ヘラケズリ	暗褐色～ 橙褐色 良	砂粒	完形	線刻? 体部内面
6	土師器 坏	140×83×50 口縁内湾 外面 口縁～ヨコナデ 体部～底部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁～体部上半～ナデ後ヘラミガキ	茶褐色 普	砂粒	2/3	
7	須恵器 甕	—×—(81) 輪積み 外面 頸部～ナデ 胴部上半～平行タタキ 内面 ナデ 輪積みのもと	青灰褐色 悪	粗砂粒	頸部片	
8	土師器 甕	—×—×— ロクロ成形 外面 口縁～頸部～ナデ 胴部～横位斜位のヘラケズリ	橙褐色 普	普	口縁片	



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	黒褐色土	普通	普通	ローム粒子
2層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒多
3層	暗褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
4層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒少量
5層	褐色土	普通	普通	ローム粒少量
6層	明褐色土	普通	普通	ローム
7層	褐色土	普通	普通	ローム粒やや多
8層	明褐色土	普通	普通	ローム粒極めて多
9層	褐色土	普通	普通	焼土やや多
10層	明褐色土	普通	普通	ローム粒多
11層	褐色土	普通	普通	ローム粒
12層	褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
13層	褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
14層	褐色土	普通	普通	ローム粒極めて多
15層	褐色土	普通	普通	ローム粒少量
16層	褐色土	普通	普通	ローム粒少量
17層	褐色土	普通	普通	褐色土主体
18層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロック
19層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒少量
20層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒
21層	暗褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
22層	暗褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
23層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒子少量
24層	褐色土	普通	普通	ロームブロック多
25層	明褐色土	普通	普通	普通
26層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロック極少
27層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロック少
28層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒多
29層	暗褐色土	普通	普通	ローム小ブロック
30層	暗褐色土	普通	普通	焼土やや多

層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗褐色土	普通	普通	焼土ブロック
2層	暗褐色土	普通	普通	焼土粒やや多
3層	暗褐色土	なし	なし	焼土小ブロックやや多
4層	暗褐色土	なし	なし	ローム粒
5層	暗褐色土	普通	普通	粘土粒 粘土粒
6層	褐色土	なし	なし	ローム粒多 焼土粒少
7層	褐色土	なし	なし	ローム粒多 焼土粒少
8層	褐色土	普通	普通	ローム粒少量
9層	暗褐色土	なし	なし	焼土多 ローム少
10層	暗褐色土	普通	普通	普通
11層	暗褐色土	普通	普通	焼土少
12層	暗褐色土	普通	普通	焼土粒少
13層	褐色土	普通	普通	ローム粒多 焼土粒少

図 2-4-85 A048

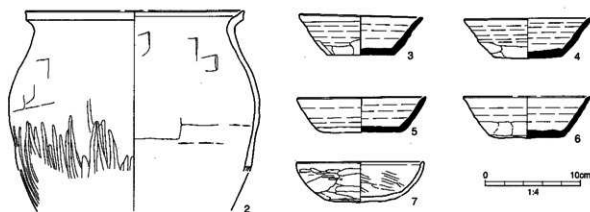


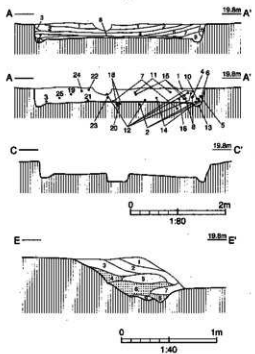
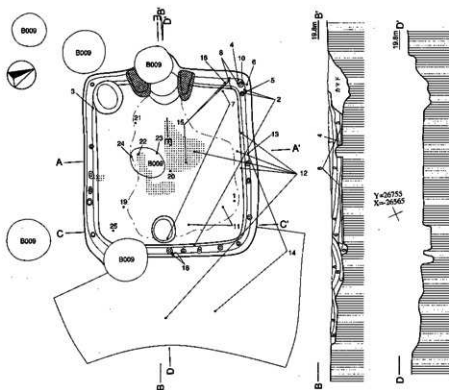
図 2-4-86 A048(2)

表 2-4-51 A048遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 壺	(222)×185×299 最大径294 口縁外反 輪積み 胴上半が残る 外面 口縁・頸部-ヨコナデ 胴部上半・下半-平行タタキ目 下端-ヘラケズリ 内面 器面の剥離著しく不明	灰褐色 墨	砂粒 雲母	4/5	
2	土師器 壺	(228)×-×(213) 口縁 凹線状に調整される 胴部輪積み 頸部「く」の字状 外面 口縁-ヨコナデ 頸部・胴部上半 ヘラケズリ後ナデ 下半-ヘラミガキ 内面ヘラナデ	暗褐色 青	砂粒 雲母	口縁- 胴部片	
3	須恵器 坏	128×70×44 体部外傾 ロクロ成形 外面 胴部下端・底部-手持ちヘラケズリ	暗灰色 青	小礫多	完形	
4	須恵器 坏	133×71×42 ロクロ成形 体部外傾 体部下半やや膨らみを持つ 外面 胴部下端・底部-手持ちヘラケズリ	暗灰色 青	小礫多	略完形	
5	須恵器 坏	135×85×37 ロクロ成形 底部が大きくやや浅い 外面 胴部下端・底部-ヘラケズリ	暗灰褐色 青	砂粒 小礫	略完形	
6	須恵器 坏	(133)×81×45 体部外傾 ロクロ成形 外面 胴部下端・底部-ヘラケズリ	灰白色 墨	粗砂粒 雲母	1/2	
7	土師器 坏	135×-×43 口縁やや内湾気味に立ち上がる 外面 口縁-ヨコナデ 体部-底部-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁-ヨコナデ 体部-底部-ナデ後ヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒 雲母	2/3	内外面 スス付着
8	瓦石	長径67×短径38				
9	馬歯	残存長(31)×残存幅(20)×最大幅(22) 重量10.2g				





層	土質	粘性	しまり	成分
1層	暗褐色土	有り	有り	ローム小粒 焼土微粒 炭微粒
2層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム小粒 焼土小粒 炭微小粒
3層	暗黄褐色土	やや強い	有り	ローム中粒 焼土微粒
4層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム小粒 褐色土 焼土小粒 灰小粒
5層	暗灰褐色土	やや強い	有り	ローム中粒 焼土小粒
6層	暗褐色土	強い	有り	暗褐色土 褐色土
7層	黒褐色土	やや強い	有り	ローム中粒 焼土小粒
8層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土 褐色土
9層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土 褐色土
A層	暗褐色土	有り	有り	暗褐色土 褐色土
B層	黒色土	有り	有り	褐色土 黒色土
C層	黒褐色土	有り	有り	黒褐色土
a層	暗褐色土	有り	有り	暗褐色土
b層	暗褐色土	有り	有り	暗褐色土
1層	暗褐色土	粘性 有り	しまり 有り	暗褐色土 白色粘土
2層	暗褐色土	やや強い	強い	暗褐色粘土 白色粘土
3層	暗褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 白色粘土
4層	暗灰褐色土	やや強い	やや強い	焼土小粒 褐色土 白色粘土
5層	赤灰褐色土	やや強い	強い	焼土小粒 白色粘土 暗褐色土
6層	灰褐色土	やや強い	強い	赤色焼土化した白色粘土 白色粘土 暗褐色土
7層	黒褐色土	やや強い	強い	焼土小粒 褐色土 暗褐色土 白色粘土
8層	暗灰褐色土	やや強い	やや強い	暗褐色土 白色粘土
9層	暗黄褐色土	やや強い	強い	ローム 焼土

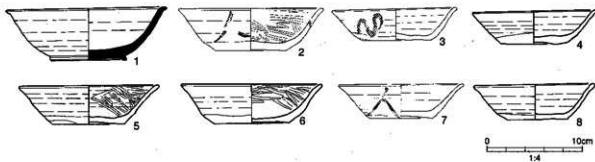


図 2-4-87 A049

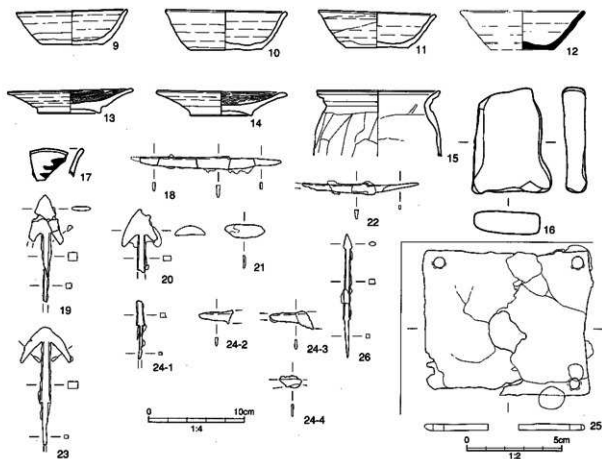


図 2-4-88 A049(2)

表 2-4-52 A049遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	灰釉陶器 高台付杯	166×高台径80×55 口縁外反ロクロ見込み内に重ね焼痕 底部一回転ヘラケズリ	灰白色 青		略完形	壊?
2	土師器 杯	(150)×72×44 口縁外反体部丸味をもつロクロ 外面一胴部下端底部一回転ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	1/2	墨書 釈文「人」 体部外面
3	土師器 杯	(128)×70×35 口縁外反ロクロ 胴部下端底部一回転ヘラケズリ回転糸切りのち 回転ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 金雲母	1/2	墨書 体部外面
4	土師器 杯	128×70×35 体部外縁口縁強みを持つロクロ 胴部下端底部一回転ヘラケズリ回転糸切りのち 回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	略完形	
5	土師器 杯	145×75×41 口縁外反ロクロ 外面胴部下端底部一回転ヘラケズリ回転糸切りのち回転ヘラケズリ 内面ヘラミガキが加えられる	明褐色 青	砂粒 金雲母	略完形	
6	土師器 杯	146×80×42 口縁外反強みを持つロクロ 外面胴部下端底部一回転ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 金雲母	2/3	
7	土師器 杯	(128)×65×36 口縁外反ロクロ 胴部下端底部一手持ちヘラケズリ回転糸切りのち手持ちヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 金雲母	1/3	墨書 体部外面

8	土師器 坏	124×63×39 口縁外反ロクロ 胴部下端底部-回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	2/3	
9	土師器 坏	121×65×40 口縁やや外反やや雑な作りロクロ 胴部下端底部-回転ヘラケズリ	橙褐色 普通	砂粒 金雲母	2/3	
10	土師器 坏	115×65×38 体部下半丸みを持つ やや歪みを持つロクロ 胴部下端底部-回転ヘラケズリ回転糸切りのち回転ヘラケズリ	褐色 普通	砂粒 金雲母	略完形	
11	土師器 坏	126×76×43 口縁やや外反ロクロ 胴部下端底部-回転ヘラケズリ回転糸切りのち回転ヘラケズリ	褐色 普通	砂粒 金雲母	3/4	
12	須恵器 坏	(128)×(66)×42 体部外細ロクロ 胴部下端-回転ヘラケズリ 底部-ヘラケズリ	暗灰色 普通	砂粒 金雲母	1/3	朱書「人」 体部外面
13	土師器 高台付皿	129×66×26 口縁外反ロクロ 高台部は底部より直線的に作られる 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒 雲母	3/4	
14	土師器 高台付皿	135×高台径65×27 口縁外反ロクロ 高台底部よりやや内径気味に作られる 外面 回転糸切りのち回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 普通	砂粒 金雲母	3/4	
15	土師器 小型甕	(128)×-(70) 口縁外反し上端つまみ上げられる 外面凹縁状の調整 外面 口縁頸部-ヨコナデ 胴部上半-ヘラケズリ 内面 口縁頸部-ヨコナデ 胴部上半-ヘラナデ	暗褐色 普通	砂粒 金雲母	口縁- 胴部片	内外面スス付着
16	石製品 磁石	103×67×28 全体に熱を受け赤化している	赤灰褐色			
17	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐色 普通		口縁片	釈文「口」 体部外面
18	鉄器 刀子	149×9×2.5 -×12.5×4 -×7×2.5 重量18.8g				
19	鉄器 鉄鏃	113×20×4 -×7×4 -×10×9 -×6×5.5 重量24.5g				
20	鉄器 鉄鏃	67×32×9 67×8×5 重量20.4g				
21	鉄器 小鎌?	42×13×1.5 重量4.0g				
22	鉄器 刀子	122×9×4 -×4×2 重量13.9g				
23	鉄器 鉄鏃	124.5×9×4 -×8×3 -×10×7.5 -×4×3.5 重量32.3g				
24 -1	鉄器 鉄鏃	62×7.5×4.5 -×3×3 重量8.2g				
24 -2	鉄器 刀子	36×9×3 重量3.2g				

24 -3	鉄器 刀子	46×10×2.5 重量4.6g			
24 -4	鉄器 刀子	24×12×2 重量1.7g			
25	鉄器 帯金具	90×84×3 重量96.6g			
26	鉄器 鉄鏝	130×7×4 -×6×5 重量11.2g	-×3.5×4		

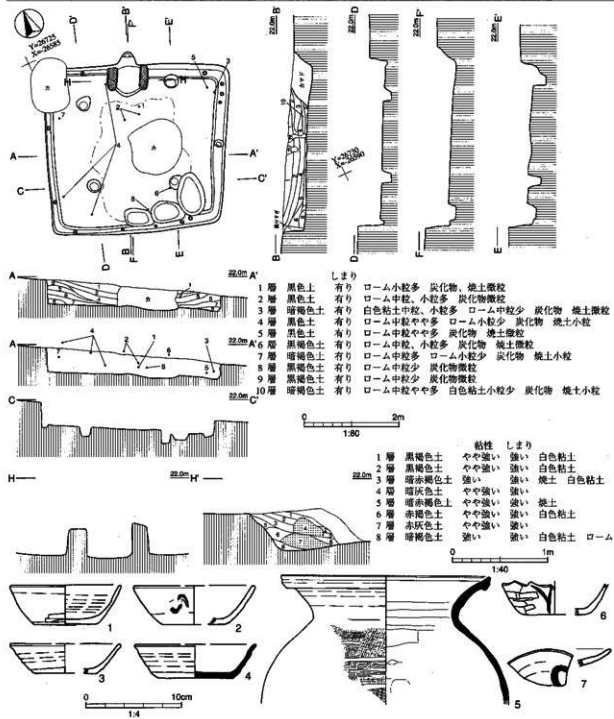


図 2-4-89 A050

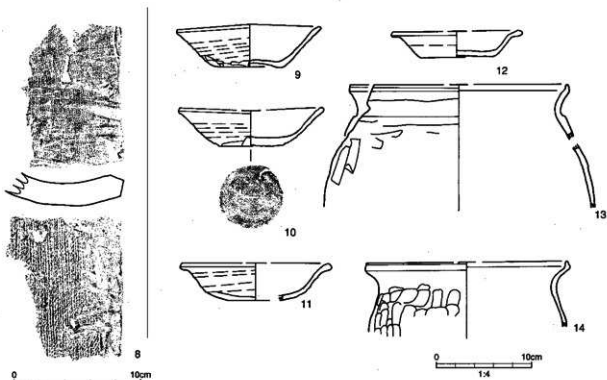


図 2-4-90 A050(2)

表 2-4-53 A050遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	117×66×42 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切りヘラケズリ	褐 青	青	略完形	
2	土師器 坏	(122)×(66)×40 外面 体部下端-底縁-ヘラケズリ	褐 青	青	2/3	墨書「口」 体部外面
3	土師器 坏	(116)×(66)×31 外面 体部下端-底縁-ヘラケズリ 底部中央-回転糸切り	褐 青	青	底部- 口縁片	
4	須恵器 坏	(127)×(78)×36 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り	暗灰 青	青	底部- 口縁片	
5	須恵器 壺	(217)×-×(137) ロク口成形 口縁外反 折り返し口縁 外面 口縁頸部-ヨコナデ 胴部-タタキ後一部ナデ及びタタキ工具での ナデが交差する 内面 ナデ	灰色 青	粗砂粒 雲母	口縁片 -胴部	
6	土師器 坏	-×(70)×(37)	砂模褐 色褐 青	青	体部- 底部片	墨書「人」 体部外面座位
7	土師器 皿	内面 ミガキ	褐 青	青	口縁片	墨書 記号 体部外面
8	土製品 瓦	690g	灰白色 赤	青		
9	土師器 坏	152×70×45 外面 体部下端-底縁-ヘラケズリ 底部中央-回転糸切り	褐 青	青	3/4	

10	土師器 坏	154×66×41 口縁外反 楕円形にやや歪む 外面 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り	赤黒褐 四暗掲 普	普	略定形
11	土師器 坏	160×60×39 口縁外反 外面 体部下端・底縁-ヘラケズリ 底部中央-回転糸切り	褐 普	普	2/3
12	土師器 坏	138×(78)×(28) 外面 回転ヘラ切り	褐 普	普	1/4
13	土師器 壺	230×-×133 口唇をつまみ上げやや内湾する 外面 従位のヘラケズリ	褐 普	普	口縁- 胴部片
14	土師器 壺	212×-×(81) 口唇をつまみ上げ、やや内湾する 外面 口縁・頸部-ナデ 胴部上半-縦位のヘラケズリ	淡褐 普	普	口縁片

#### A050

検出地区 D5-29G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A051・B024・B025等がある。

遺 構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出した。小穴を7基検出した。P1～P4は柱穴と考えられ、P5は出入口施設と考えられる。P6～7は用途は不明である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が良く焼けていた。燃烧部については若干掘り凹められていて、明瞭な火床は検出できなかったが、熱を受け劣化している状況は確認できた。天井部は断面で確認され、竈は壊されたと判断した。

覆土は色調を基本に10層に分層。床面直上で僅かに焼土を検出していることから、まず、人為的な埋め戻しが行われ、その後自然堆積による埋没が進んだと思われる。

遺 物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。平瓦が出土していることが注目される。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。A050の所在するグリッドから比較的少量の土師器が出土した(9～13)。土師器の坏の様相が違うことから、上層に別の新しい遺構があった可能性がある。

#### A051

検出地区 D6-39G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A050・B024等がある。中世以降の溝に一部壊されている。

遺 構 小形の隅丸方形のプランと思われるが、溝による攪乱と浅い掘込みのため、詳細は不明。床はロームの床で硬化面を広範囲に検出した。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁であるが、立ち上がりが僅かであるため詳細不明。ほぼ垂直に立ち上っていたものと思われる。周溝は検出されなかった。竈は北壁ほぼ中央で検出された両袖とも検出され、燃烧部については若干掘り凹められていた。明瞭な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に7層に分層。覆土中にロームを含む覆土が多く人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した

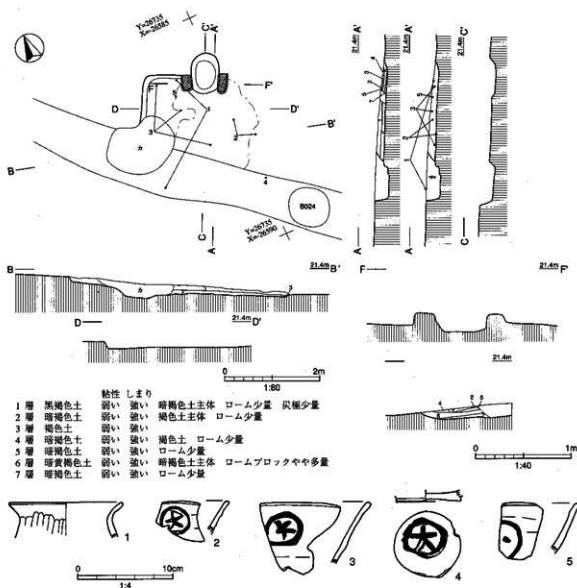


図 2-4-91 A051

表 2-4-54 A051遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小形甕	120×-×(35) ロク口成形 外面 胴部上半細かな縦位のヘラケズリ	①橙褐色 ②黒褐色 黄	黄	口縁片	
2	土師器 坏	-×-×- ロク口成形	褐色 黄	黄	口縁片	墨書「㊦」 体部外面正位
3	土師器 坏	-×-×- ロク口成形	橙褐色 黄	黄		墨書「㊦」 体部外面正位
4	土師器 甕	-×-×- ロク口成形 外面 底部中央回転未切り後底縁ヘラケズリ 内面 底部中央ミガキ	①褐色 ②橙褐色 黄	黄		墨書「㊦」 底部外面
5	土師器 坏	-×-×- ロク口成形	褐色 黄	黄	口縁片	墨書「㊦」 体部外面

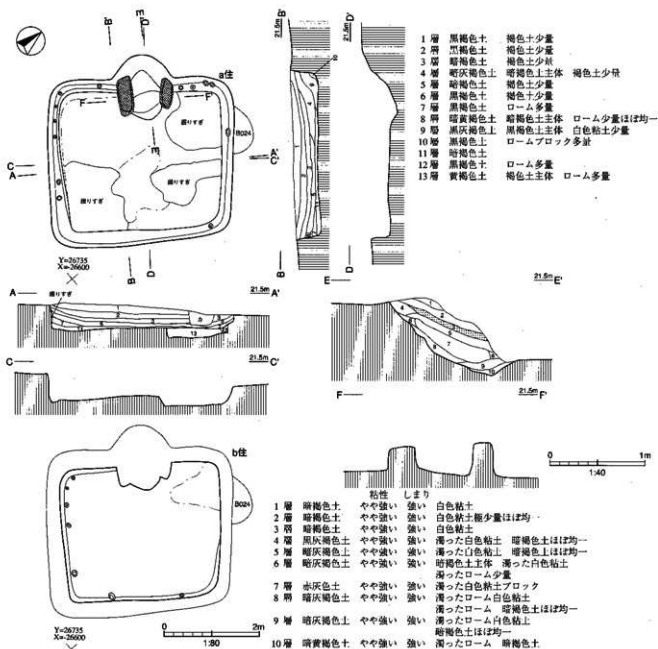


図 2-4-92 A052ab

### A052

検出地区 D5-40G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A051・A053・B024等がある。2軒の住居跡の重複で、上層の住居跡をA052a、下層の住居跡をA052bとし、遺構については個々に遺物、所見についてはまとめて報告する。

### A052a

遺 構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームと暗褐色土の混合土による貼床で、住居跡中央部に硬化面を広範囲に検出した。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は東壁はほぼ中央で検出され、両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が良く焼けていた。燃焼部については若干掘り凹められていて、明瞭な火床は検出できなかった。天井部は断面で確認され、竈は自然崩落したと判断した。

覆土は色調を基本に13層に分層。床面には僅かであるが、焼土、粘土、炭化物が検出されている。人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと思われる。



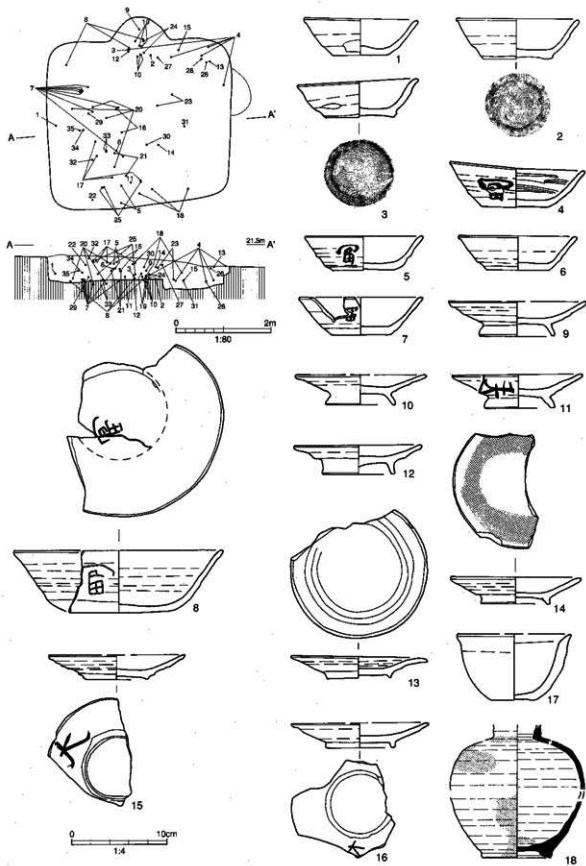


图 2-4-93 A052ab(2)

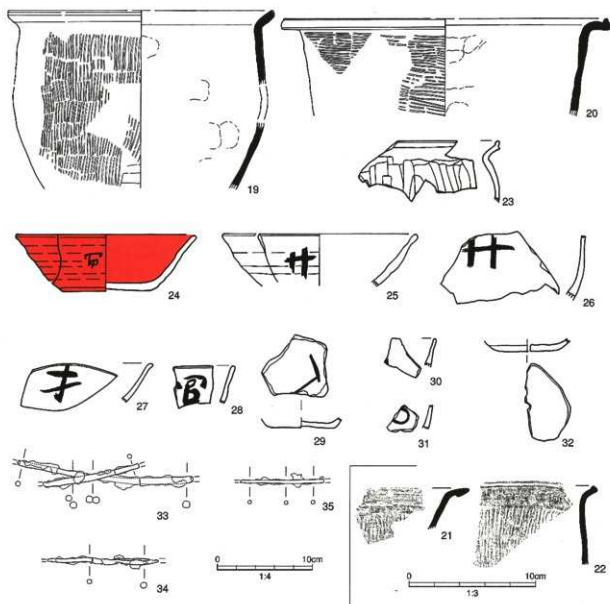


図 2-4-94 A052ab(3)

A052b

**遺構** 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームと暗褐色土の混合土による貼床で、一部で硬化面を検出した。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出されなかった。竈は検出されなかった。上層の住居跡が竈を構築する際に壊されたものと考えられる。

**遺物** 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土した。「富」の墨書土器、鉄製品の出土が目される。

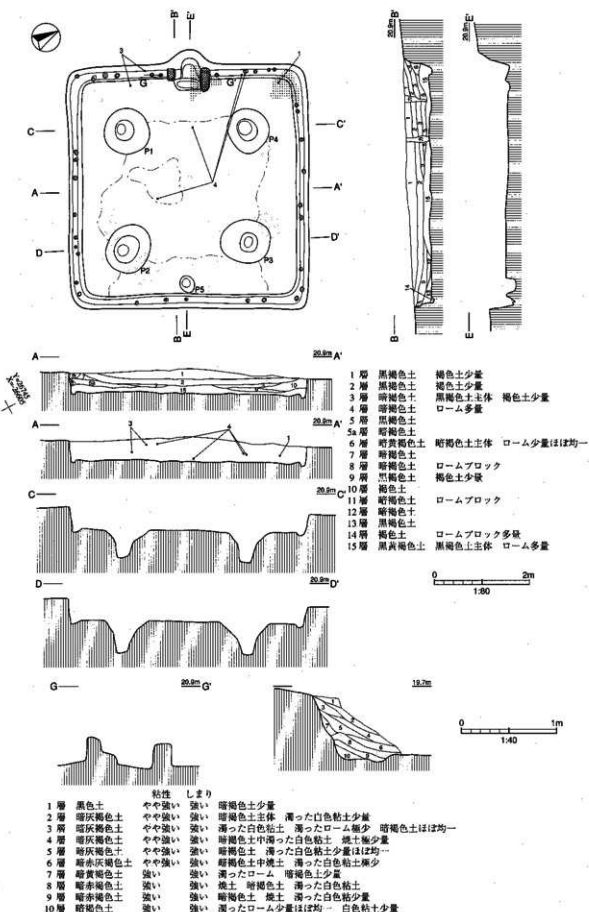
**所見** 出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と判断した。

表 2-4-55 A052遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	121×60×39 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ 内面 丁寧なミガキを施す	暗褐色 青	青	完形	
2	土師器 坏	129×69×42 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 底縁ヘラケズリ	淡褐色 青	青	完形	
3	土師器 坏	128×73×38 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 底縁ヘラケズリ	橙褐色 青	青	略完形	
4	土師器 坏	142×68×40 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り	褐色 青	青	完形	墨書「冨」 体部外面正位
5	土師器 坏	125×65×36 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 底縁ヘラケズリ 内面 体部ミガキ	褐色 青	青	4/5	墨書「冨」 体部外面正位
6	土師器 坏	123×67×36 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り	褐色 青	青	2/3	
7	土師器 坏	130×64×40 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転ヘラ切り	橙褐色 青	青	1/3	墨書「冨」 体部外面
8	土師器 鉢	(220)×103×66 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転ヘラケズリ	褐色 青	青	1/3	線刻「冨」 体部外面正位 底部内面「冨」
9	土師器 皿	144×80×37 外面 底部回転ヘラ切り	橙褐色 青	青	1/3	
10	土師器 皿	(138)×75×32 外面 底部回転ヘラ切り	橙褐色 青	青	1/3	
11	土師器 皿	137×75×35	褐色 青	青	1/2	墨書「口」 体部外面
12	土師器 皿	134×77×31 外面 底部回転ヘラ切り	橙褐色 砂黒褐色 青	青	略完形	
13	土師器 皿	144×67×22 外面 底部回転糸切り後、底縁をつまみ出して台部を作り出す 内面 周辺は弧に沿って、底部は直線・方向に丁寧なミガキを施す	褐色 青	青	3/4	
14	土師器 皿	(136)×73×28 外面 底部回転ヘラ切り 内面 周辺は弧に沿って、底部は直線・方向に丁寧なミガキを施す	橙褐色 砂黒褐色 青	青	1/2	体部内面 スズ付着 線刻「×」 底部内面
15	土師器 皿	(143)×70×26 外面 体部下端・底縁ヘラケズリ 底部中央回転糸切り	褐色 青	青	1/3	墨書「大」 底部外面
16	土師器 皿	(144)×73×26 外面 体部下端・底縁ヘラケズリ 底部中央回転糸切り	砂褐色 砂黒褐色 青	青	口縁～ 底部片	線刻「大」 体部外面
17	土師器 碗	120×(47)×70	砂褐色 砂黒褐色 青	青	1/2	

18	陶器 長頸壺	一×70×(142) ロク口成形 肩部が張り胴上半に最大径をもつやや幅広い低い高台を有する 底部中央回転糸切り	砂茶褐色 砂暗灰色 良	長石 褐色粒	胴部～ 底部片	肩部から底部に かけて一部 自然軸
19	須恵器 甕	(276)×一×(191) 口縁外反し外面に稜を持つ 外面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半タタキ 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部ヘラナデあるいはナデ?一部指頸圧痕	暗赤褐色 青	砂粒 雲母	口縁～ 胴部片	
20	須恵器 甕	(338)×一×(104) 口縁大きく外反 上端は内側に屈曲 外面 口縁ヨコナデ頸部ハケ状工具でなでた様な調整胴部上半タタキ 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部ヘラナデ及びナデ 一部指頸圧痕	茶褐色 悪	砂粒 雲母	口縁片	
21	須恵器 甕	外面 胴部上半タタキ	灰 青	青	口縁片	
22	須恵器 甕	外面 胴部上半タタキ	灰 青	青	口縁片	
23	土師器 甕	唇をつまみ上げる 外面 口縁・頸部ナデ 胴部上半縦位のヘラケズリ	砂暗褐色 砂褐色 青	青	口縁片	常総型
24	土師器 鉢	(188)×92×60 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転ヘラ切りヘラケズリ	赤褐～褐 青	青	1/4	赤彩 体部内外面 縁部「富」 体部内面
25	土師器 鉢	外面 体部下端ヘラケズリ 内面 体部上半ミガキ	砂暗褐 砂褐 青	青	体部片	墨書 記号 体部外面
26	土師器 鉢	外面 体部下端ヘラケズリ 内面 体部上半ミガキ	橙褐 青	青	体部片	墨書 記号 体部外面
27	土師器 坏	外面下端ヘラケズリ	褐 青	青	口縁片	墨書「才」 体部外面
28	土師器 坏		褐 青	青	口縁片	墨書「富」 体部外面
29	土師器 坏	外面 体部下端・底縁ヘラケズリ 底部中央回転糸切り	褐 青	青	底部片	墨書「人」 底部内面
30	土師器 坏		橙褐 青	青	口縁片	墨書「口」 体部内面
31	土師器 坏		淡褐 青	青	体部片	墨書 記号 体部外面
32	土師器 坏	外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り 底部 中央を穿孔、紡錘車として転用か?	淡褐 青	青	底部片	
33	鉄器 鉛子	183×7×7 一×4×4 一×14×11 一×5×4.5 重量29.0g				
34	鉄器 釘?	116×6×6 一×4×4.5 重量11.2g				
35	鉄器 紡錘車 芯軸?	87.5×4×4 一×3.5×3.5 一×3.5×3.5 重量6.4g				



- |     |       |                  |
|-----|-------|------------------|
| 1層  | 黒褐色土  | 褐色土少量            |
| 2層  | 黒褐色土  | 褐色土少量            |
| 3層  | 暗褐色土  | 黒褐色土主体 褐色土少量     |
| 4層  | 暗褐色土  | ローム多量            |
| 5層  | 暗褐色土  |                  |
| 5a層 | 暗褐色土  |                  |
| 6層  | 暗黄褐色土 | 暗褐色土主体 ローム少量ほぼ均一 |
| 7層  | 暗褐色土  |                  |
| 8層  | 暗褐色土  | ロームブロック          |
| 9層  | 黒褐色土  | 褐色土少量            |
| 10層 | 褐色土   |                  |
| 11層 | 暗褐色土  | ロームブロック          |
| 12層 | 暗褐色土  |                  |
| 13層 | 黒褐色土  | ロームブロック多量        |
| 14層 | 褐色土   |                  |
| 15層 | 黒黄褐色土 | 黒褐色土主体 ローム多量     |

- |     |       |      |     |              |              |          |
|-----|-------|------|-----|--------------|--------------|----------|
| 1層  | 黒色土   | 粘性   | しまり | 暗褐色土少量       |              |          |
| 2層  | 暗灰褐色土 | やや強い | 強い  | 暗褐色土主体       | 濡った白色粘土少量    |          |
| 3層  | 暗灰褐色土 | やや強い | 強い  | 濡った白色粘土      | 濡ったローム極少     | 暗褐色土ほぼ均一 |
| 4層  | 暗灰褐色土 | やや強い | 強い  | 暗褐色土中濡った白色粘土 | 粘土極少量        |          |
| 5層  | 暗灰褐色土 | やや強い | 強い  | 暗褐色土         | 濡った白色粘土少量    | ほぼ均一     |
| 6層  | 暗赤褐色土 | やや強い | 強い  | 暗褐色土中塊土      | 濡った白色粘土極少    |          |
| 7層  | 暗黄褐色土 | 強い   | 強い  | 濡ったローム       | 暗褐色土少量       |          |
| 8層  | 暗赤褐色土 | 強い   | 強い  | 塊土 暗褐色土      | 濡った白色粘土      |          |
| 9層  | 暗赤褐色土 | 強い   | 強い  | 暗褐色土         | 塊土 濡った白色粘土少量 |          |
| 10層 | 暗褐色土  | 強い   | 強い  | 濡ったローム少量     | ほぼ均一         | 白色粘土少量   |

図2-4-95 A053

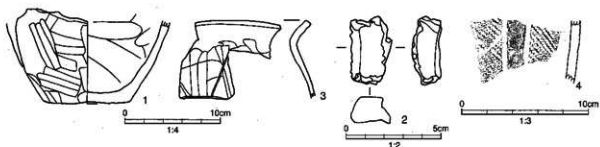


図 2-4-96 A053(2)

表 2-4-56 A053遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺 外面 体部下半縦位斜位のヘラミガキ 内面 体部下半ナデ	-X-X- ロク口成形	暗褐色 青	骨 砂粒 少々含む	副部片 - 底部片	
2	土製品	-X-X-	橙褐色 黒	粗		
3	土師器 壺 外面 口縁ナデ 胴部上半縦位のヘラケズリ	-X-X- ロク口成形	暗褐色 青	青	口縁片	
4	縄文 深鉢 外面 胴部RL単筋斜縄文を沈線による区画 内面 胴部上半縦位のミガキ	-X-X-	橙褐色 青	青	副部片	加曾利E式

#### A053

検出地区 E5-41G。台地先端の緩斜面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A052・B020・B021・B024等がある。

遺 構 中型の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、住居跡中央部で硬化面を検出した。小穴を5基検出した。P1～P4は柱穴と考えられ、P5は出入口施設と考えられる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は西壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が焼けていた。燃焼部は明瞭な火床は検出できなかった。形状としては若干掘り凹められていた。

覆土は色調を基本に15層に分層。床面直上で焼土、粘土を検出していることから、人為的な埋め戻しが想定される（調査中の不手際で、一部土説に不備あり）。

遺 物 床面直上～覆土中層にかけて少量出土。(2)の土製品は用途不明である。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。他の奈良・平安時代の竪穴住居跡とは、規模・形態上の相違が見られ、時代的な違いがあると思われる。

#### A054

検出地区 E5-21G。台地先端の緩斜面に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A052・A053・B021・B022・B024等がある。

遺 構 中型の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、ほぼ平坦。小穴を2基検出した。P1は柱穴か。P2は用途不明。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は一部で検出された。竈は北壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が良く焼けていた。燃焼部は明瞭な火床は検出できなかったが、熱を受け劣化している状況は認められた。形状として

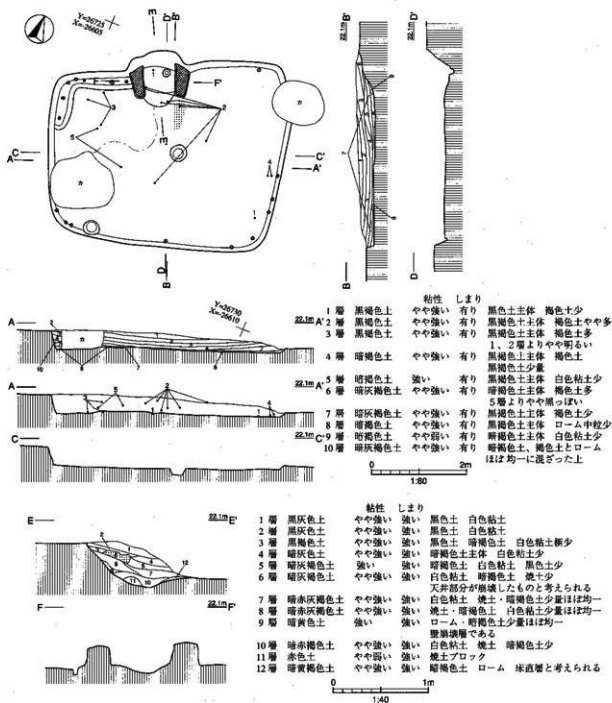


図 2-4-97 A054

は若干掘り凹められ、燃焼部内に小穴1基を検出した。天井部は、断面にて一部検出した。竈は壊されたものと判断した。

覆土は色調を基本に10層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。「寺」・「三宝」等、仏教関連の墨書土器の出土が目立つ。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の竪穴住居跡と判断した。墨書土器の出土傾向からすると、第1群の竪穴住居跡群に近いものがある。

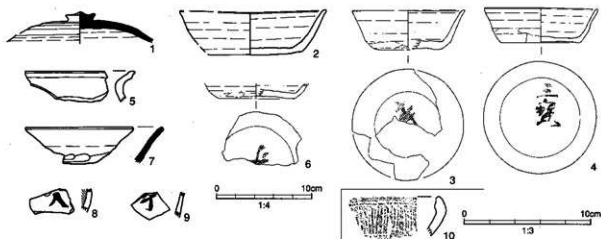


図 2-4-98 A054(2)

表 2-4-57 A054遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 蓋	31×-×(34) ロクロ成形 宝珠状のつまみを持ち蓋体部上半は回転ヘラケズリ調整 頂部はやや平坦	灰白色 青	白色粒 小石	1/2	
2	土師器 坏	152×99×47 ロクロ成形 口縁やや外反 体部丸みを持つ 底部手持ちヘラケズリ	橙褐色 墨	砂粒 金雲母	2/3	
3	土師器 坏	(117)×(70)×42 ロクロ成形 体部外傾 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	1/2	墨書「寺」 底部外面
4	土師器 坏	118×84×37 ロクロ成形 断面逆台形状を呈する 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後 底縁ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	完形	墨書「三立」 底部外面
5	土師器 小形壺	-×-×- ロクロ成形 口唇直下にナデにより波線を作り出す 外面 口縁～胴部上半ナデ調整	褐色 青	青	口縁片	外面に一部 スス付着
6	土師器 坏	-×(80)×(16) ロクロ成形 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	暗橙褐色 良	砂粒多	底部片	墨書「口」 底部外面
7	須恵器 坏	-×-×- ロクロ成形	暗灰色 青	白色砂粒 雲母長石 石英 各少量	口縁片	
8	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書「口」 体部外面 内黒
9	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	赤褐色 青	青	体部片	墨書「口」 体部外面
10	縄文 滌鉢	-×-×- 口縁内湾 口縁 上下横位の縄文線間に縦位の集台沈線充填	明褐色 良	粗砂粒	口縁片	



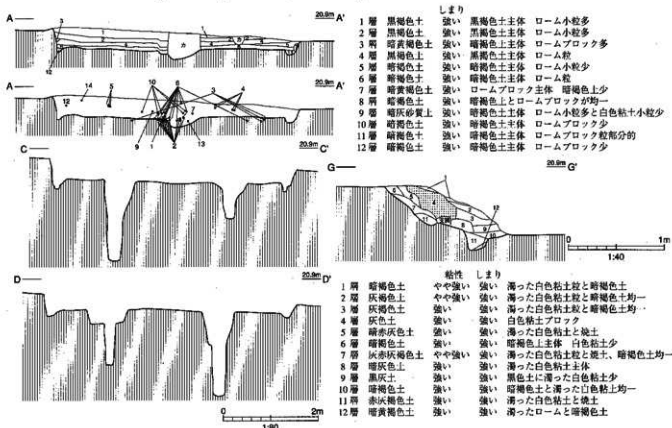
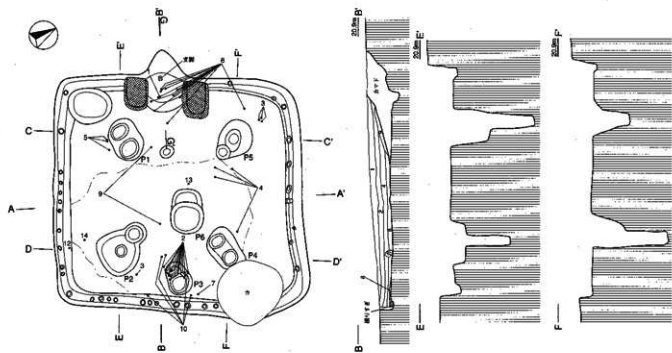


図 2-4-99 A055

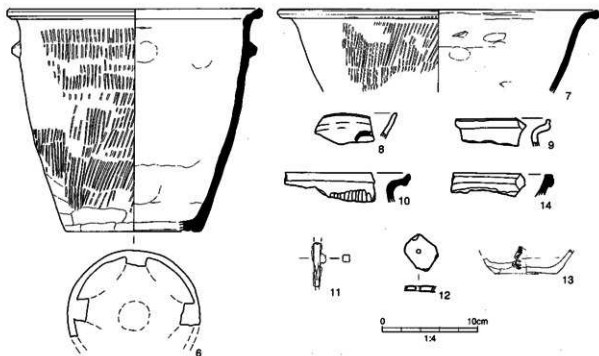


図 2-4-100 A055(2)

表 2-4-58 A055遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切り後ヘラケズリ	褐色 青	青	略完形	墨書「人」 体部外面正位
2	土師器 杯	123×70×42 ロクロ成形 歪みを持つ 体部外縁 体部下丸みを持つ 胴部下端 底部ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒雲母	略完形	墨書 体部外面
3	土師器 杯	118×60×39 胴部下端 底縁回転ヘラケズリ	明褐色 黒	砂粒 金雲母	2/3	墨書 体部外面
4	土師器 杯	(128)×70×38 口縁 外反体部上半に括れを持つ ロクロ成形 胴部下端 回転ヘラ ケズリ 底部 回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗橙褐色 黄	砂粒雲母	1/2	外面スス附着
5	土師器 高台付皿	(132)×(81)×26 ロクロ成形 外面 底部中央 回転糸切り 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 黄	砂粒雲母	1/3	
6	須恵器 瓶	264×140×237 台形状の短い突起を有する多孔の瓶(中央部は凹形周囲に対称する4個 の本葉形の孔の計5個を有すると思われる) 外面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半ト半 タクキ 下端 ヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部ヘラナデ及びナデ 一部指痕圧痕	暗赤褐色 青	砂粒	1/2	
7	須恵器 壺	(333)×××88 口縁 外反 外面 口縁頸部 ヨコナデ 胴部上半 タクキ目 内面 口縁頸部 ヨコナデヘラナデ及び一部指痕圧痕	褐色 青	砂粒雲母	口縁片	
8	土師器 杯	ロクロ成形	淡褐色 青	青	口縁片	墨書「口」 体部外面
9	土師器 壺	ロクロ成形 口縁一口唇をつまみ上げる(常盤型) ナデ	褐色 青	青 砂粒 少量含む	口縁片	

10	須恵器 甕	ロクロ成形 外面 口縁 ナデ 胴部上半タタキ	黒褐色 青	青	口縁片	
11	鉄器 釘	45×7×7 重量8.5g				
12	土師器 坏	ロクロ成形 底部中央に径3mmの穿孔 外面 底部中央回転ヘラ切り	褐色 青	青	底部片	
13	土師器 坏	一×66×(26) ロクロ成形 体部下半折れを持つ 胴部下端 ヘラケズリ 底部 回転糸切り後ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒雲母	底部片	墨書体部外面
14	須恵器 甕	ロクロ成形 口縁一折り返しナデ	暗褐色 青	青	口縁片	

#### A055

検出地区 E5-33G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A056・B022等がある。

遺 構 中型の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。小穴を6基検出した。P1～P4は柱穴で、P5は出入り口施設と考えられる。P6は貯蔵穴か。P7は本住居跡に伴うものではなく、別の土坑2基が重複したものである。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全週する。竈は東壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は良好である。両袖とも内側が良く焼けていた。燃烧部の形状は、平底の掘り込みが認められ、火床を検出した。燃烧部内から支脚が出土した。天井部は断面にて検出した。竈は自然崩落したものと判断した。

覆土は色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。また、図示はしなかったが、内黒の土師器、陶器の細片も出土している。

所 見 出土遺物から、奈良～平安時代の竪穴住居跡と判断した。柱穴の配置から、拡張住居と考えられる。

#### A056

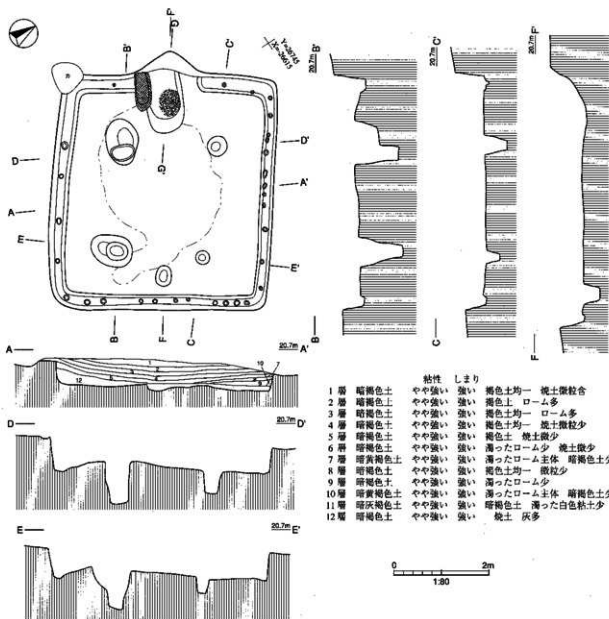
検出地区 E5-43G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A055・A057・A058・B021等がある。

遺 構 中型の隅丸方形のプラン。床面は、ロームの床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。また、住居跡中央は熱を受け、赤化していた。小穴を5基検出した。P1～P4は柱穴で、P5は出入り口施設と考えられる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全週する。竈は西壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は良好であったが、片袖を調査中の不手際により、作図前に掘削してしまった。袖の内側が良く焼け、燃烧部も皿状の掘り込みがあり、火床を検出した。天井部は断面にて検出した。竈は自然崩落したものと判断した。

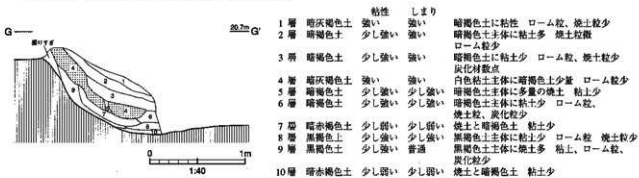
覆土は色調を基本に12層に分層。多量の焼土、炭化材を検出。人為的な埋め戻しが行われ、その後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

遺 物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。竈内からの出土が多い。多量の墨書土器、鉄製品の出土が目される。

所 見 出土遺物から、奈良～平安時代の竪穴住居跡と判断した。焼土、炭化物の検出状況、遺物の出土状況から、焼失住居と判断した。



- | 層   | 土質    | 粘性   | しまり | 特徴             |
|-----|-------|------|-----|----------------|
| 1層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 褐色土均一 焼土微粒含    |
| 2層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 褐色土 ローム多       |
| 3層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 褐色土均一 ローム多     |
| 4層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 褐色土均一 焼土微粒少    |
| 5層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 褐色土 焼土微少       |
| 6層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 濡ったローム少 焼土微少   |
| 7層  | 暗黄褐色土 | やや強い | 強い  | 濡ったローム主体 暗褐色土少 |
| 8層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 褐色土均一 微粒少      |
| 9層  | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 濡ったローム少        |
| 10層 | 暗黄褐色土 | やや強い | 強い  | 濡ったローム主体 暗褐色土少 |
| 11層 | 暗灰褐色土 | やや強い | 強い  | 暗褐色土 濡った白色粘土少  |
| 12層 | 暗褐色土  | やや強い | 強い  | 焼土 灰多          |



- | 層   | 土質    | 粘性   | しまり  | 特徴                      |
|-----|-------|------|------|-------------------------|
| 1層  | 暗灰褐色土 | 強い   | 強い   | 暗褐色土に粘性 ローム粒、焼土粒少       |
| 2層  | 暗褐色土  | 少し強い | 強い   | 暗褐色土主体に粘土多 焼土粒微         |
| 3層  | 暗褐色土  | 少し強い | 強い   | ローム粒少                   |
| 4層  | 暗灰褐色土 | 強い   | 強い   | 暗褐色土に粘土少 ローム粒、焼土粒少      |
| 5層  | 暗褐色土  | 少し強い | 少し強い | 炭化材散点                   |
| 6層  | 暗褐色土  | 少し強い | 少し強い | 白色粘土主体に暗褐色土少量 ローム粒少     |
| 7層  | 暗赤褐色土 | 少し弱い | 少し弱い | 暗褐色土主体に多量の焼土 粘土少        |
| 8層  | 黒褐色土  | 少し強い | 少し強い | 暗褐色土主体に粘土多 粘土少          |
| 9層  | 黒褐色土  | 少し強い | 普通   | 暗褐色土主体に粘土多 粘土、ローム粒、炭化粒少 |
| 10層 | 暗赤褐色土 | 少し弱い | 少し弱い | 焼土粒、炭化粒少                |

図 2-4-101 A056

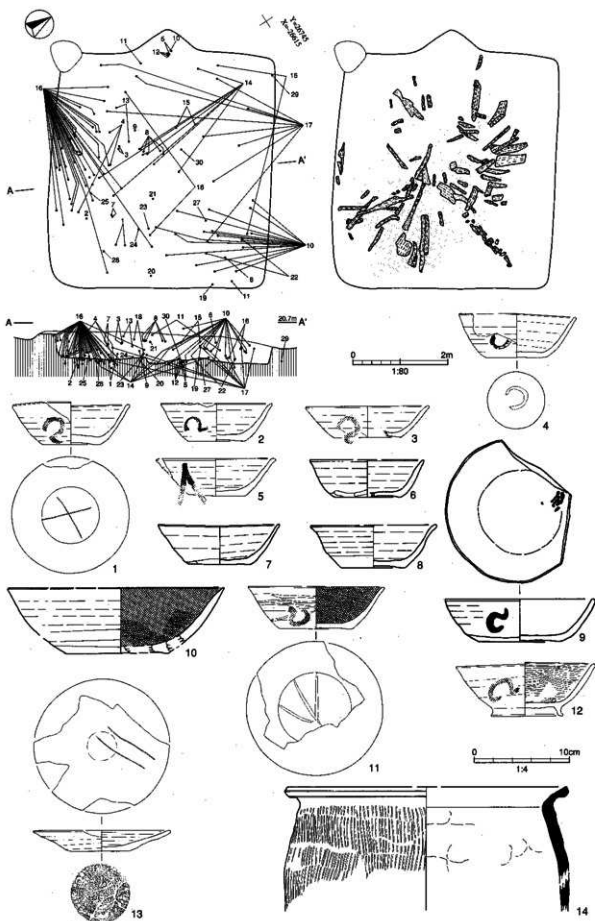


图 2-4-102 A056(2)

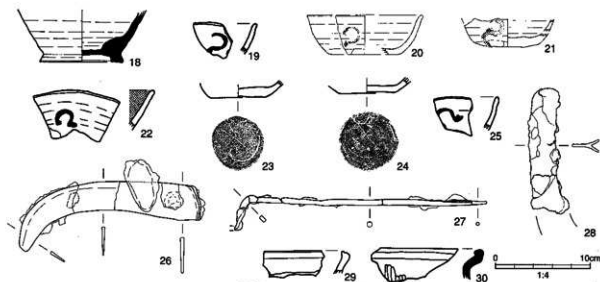
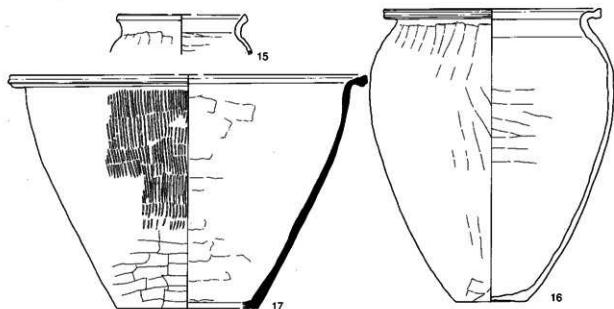


図 2-4-103 A056(3)

表 2-4-59 A056遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	121×60×45 ロク口成形 口唇肥厚 体部外傾し丸みを持つ 底部回転糸切り	橙褐色 良	砂粒 金雲母	略完形	墨書体部外面 線刻底部外面
2	土師器 坏	(115)×60×40 ロク口成形体部外傾 口唇狭小 体部下端～底部回転ヘラケズリ	橙褐色 善	砂粒 金雲母	1/2	墨書「口」 体部外面
3	土師器 坏	(128)×(70)×33 ロク口成形 体部外傾 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	明褐色 善	砂粒	1/2	墨書「口」 体部外面 底部外面ヘラ善
4	土師器 坏	(121)×61×47 ロク口成形 断面逆台形状 体部下端ヘラケズリ底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 悪	砂粒	1/2	墨書「口」 体部外面 底部外面 ヘラ善?
5	土師器 坏	120×60×40 口縁外反 上端平坦面を作出 体部外傾 ロク口成形 体部下端～底部回転ヘラケズリ	暗橙褐色 暗褐色 善	砂粒 金雲母	2/3	墨書 体部外面 「人」

7	土師器 坏	126×63×43 ロクロ成形 体部外縁 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色 青	砂粒 金雲母	2/3	
8	土師器 坏	(130)×66×45 ロクロ成形 口縁外反 口唇やや肥厚 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 黒	砂粒 金雲母	1/2	
9	土師器 坏	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央ヘラ切り 底縁ヘラケズリ	明褐色 青	青	2/3	墨書「□」 体部外面 底部内面 「□」
10	土師器 坏	(226)×106×70 ロクロ成形 体部外縁 外面 胴部下半～底部回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色～ 橙褐色 青	砂粒	2/3	内黒
11	土師器 坏	(141)×75×45 ロクロ成形 体部外縁 外面 腕らにヘラミガキ 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 青	砂粒 雲母	1/3	墨書体部外面 ヘラ書底部外面 内黒
12	土師器 高台付輪	145×75×57 口縁外反 体部丸みを持つ 高台部下端外反 外面 体部下端～底部中央回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	褐色 青	砂粒 金雲母	完形	墨書 体部外面
13	土師器 皿	(142)×60×22 ロクロ成形 底部外面周縁に凹形の連続厚度 体部下端～底部回転ヘラケズリ	暗褐色 黒	砂粒	3/4	篆刻底部内面 内面スス付着
14	須恵器 甕	(293)×—×(132) 口縁上端つまみ上げられる 受け口状 外面積を持つ 外面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半タタキ 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半ヘラナデ及びナデー部指頭圧痕	暗赤褐色 良	砂粒 金雲母	口縁片	
15	土師器 小形甕	(134)×—×(42) 口縁受け口状 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラナデ	暗褐色 青	砂粒	口縁片	
16	土師器 甕	(227)×(74)×311 口縁受け口状 上端つまみ上げられる外面は凹縁状に調整 外面 口縁～頸部ヨコナデ 胴部～底部ヘラケズリ 内面 口縁～頸部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	橙褐色～ 暗褐色 青	粗砂粒 金雲母	3/4	外面 コゲ状付着物
17	須恵器 甕	(327)×(145)×250 底部中央に凹形孔それを狭む形で木蓋形の孔が4つ計5つの孔を有する と思われる 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半タタキ下半ヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナデ胴部ヘラナデ及びナデー部指頭圧痕	暗灰色 良	粗砂粒多	口縁～ 底部片	
18	須恵器 甕	—×86×(56) ロクロ成形高台部丸みを帯びた「△」の字状 底部中央 回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	青灰色 良	粗砂粒	胴～ 底片	底部内面 自然軸
19	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「記号」 体部外面
20	土師器 坏	(119)×(70)×42 ロクロ成形 口縁上端外反 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 金雲母	1/3	墨書 体部外面
21	土師器 坏	—×63×(30) ロクロ成形 底部外面歪みを持つ 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	1/3	墨書 体部外面
22	土師器 坏	ロクロ成形 内面 丁寧なミガキ	暗褐色 黒色 青	青	口縁片	墨書「記号？」 体部外面 内黒
23	土師器 坏	ロクロ成形 外底 中央回転糸切り 底面 ヘラ切り	褐色 青	青		底部外面 寛書「×」
24	土師器 坏	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切り	褐色 青	青	底部片	寛書「×」 底部外面
25	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「記号」 体部外面

26	鉄器 鏝	189×17×3 —×30×3 —×38×4 重量100.7g				
27	鉄器 鏝?	264×6.5×3.5 —×5.5×5 —×3×3 重量36.5g				
28	鉄器 鏝	133×29×13 重量79.2g				
29	土師器 甕	ロクロ成形 口縁-口髷をつまみ上げる (=常総型)	褐色 青	青	口縁片	
30	須恵器 甕	ロクロ成形 外面 L1縁ナデ 頸部上下タタキ	灰色	青	口縁片	

#### A057

検出地区 E5-52G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A056・A057・B021 等がある。

遺 構 小型の隅丸方形のプラン。床面はロームの床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。小穴を6基検出した。P1～P4は柱穴でP5は出入り口施設と考えられる。P6は深さ10cm程度の掘込みの浅い平底のピットである。同様のピットがA057でも検出されている。用途の断定はできないが、甕の羽口が出土していることから或いは鍛冶炉かもしれない。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は良好である。両袖とも内側が良く焼けていた。燃焼部内に小穴を1基検出。明瞭な火床は検出されなかった。天井部は断面にて検出した。竈は壊されたものと考えられる。

覆土は色調を基本に17層に分層。一部で焼土を検出しているが既ね自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上に数点、覆土中層～上層にかけて比較的多く出土。全体的な出土量は少量である。甕の羽口が出土している。また、陶器の細片も出土している。

所 見 出土遺物から、奈良～平安時代の竪穴住居跡と判断した。

#### A058

検出地区 E5-41G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A056・A057・B018・B019 等がある。2軒の住居跡の重複で、新しい住居跡をA057a、古い住居跡をA057bとし、遺構については個々に、遺物及び所見については、まとめて報告する。また、遺物実測図に付してあるアルファベットはそれぞれの帰属する住居跡を示している。

#### A058a

遺 構 小形の隅丸方形のプラン。床面はロームの床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出した。小穴を5基検出した。P1～P4は柱穴と判断した。P5は深さ15cm程度の掘込みの浅い平底のピットである。用途の断定はできないが、A056同様、鍛冶炉かもしれない。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は2基検出された。KAは、北東壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残り遺存状況は良好である。両袖とも内側が僅かに焼けていた。燃焼部は掘込みが認められ、凹凸が激しかった。明瞭な火床は検出されなかった。天井部は断面にて検出した。竈は自然崩壊したのと考えられる。また、周溝は袖の下を通っていた。KBは、北西壁ほぼ中央で検出され、袖は基部が僅かに残るのみであった。熱を受け、赤化、劣化が進んだ場所は認められず、燃焼部においても、若干凹凸のある掘込みが検出されたのみであった。天井部も断面にて僅かに認められたのみであった。KBからKAへの



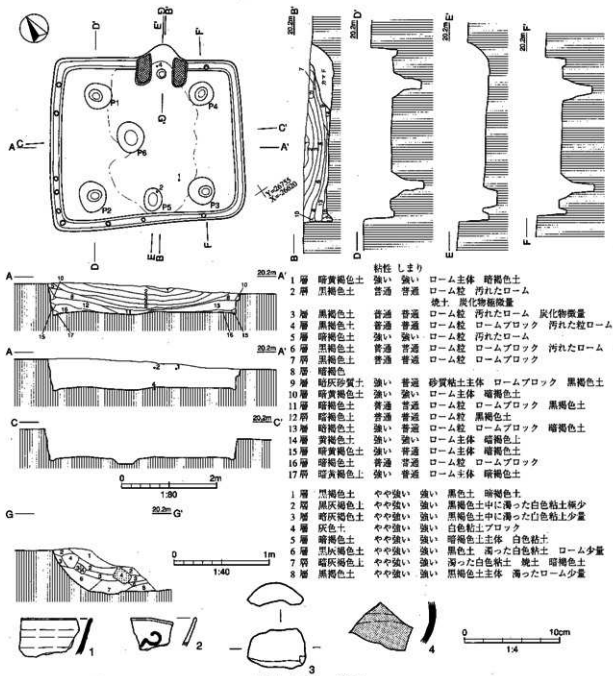


図 2-4-104 A057

表 2-4-60 A057遺物観察表

(単位mm)

No	種別	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	口ク口成形		灰色 青	普	口縁片	
2	土器器 坏	口ク口成形		暗褐色 青	普	口縁片	墨書「口」 体部外面
3	土製品 繭羽口			赤赤灰褐 青小褐色 黒	粗	断片	
4	陶磁器			赤暗赤灰 ~黒褐色 青	普		

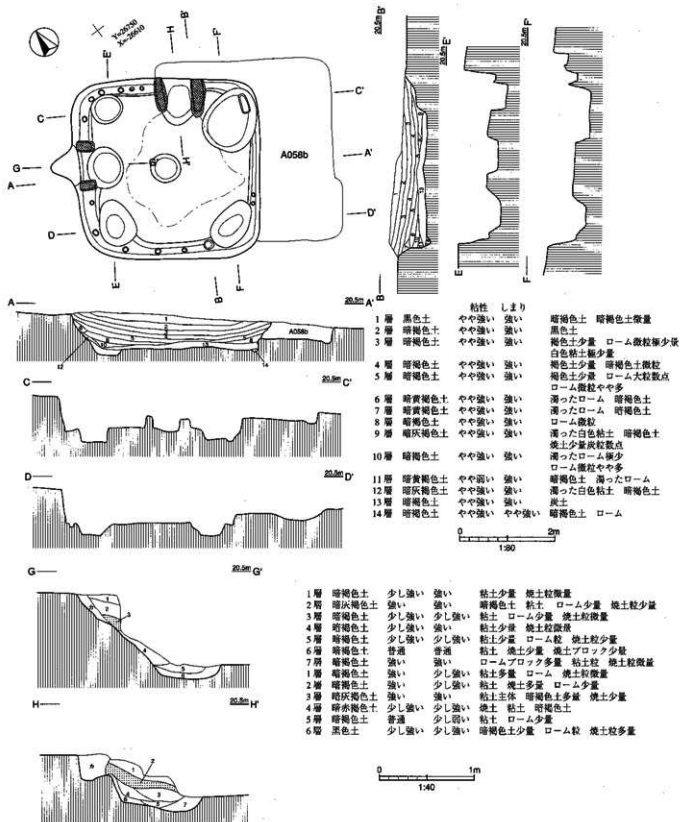


図 2-4-105 A058

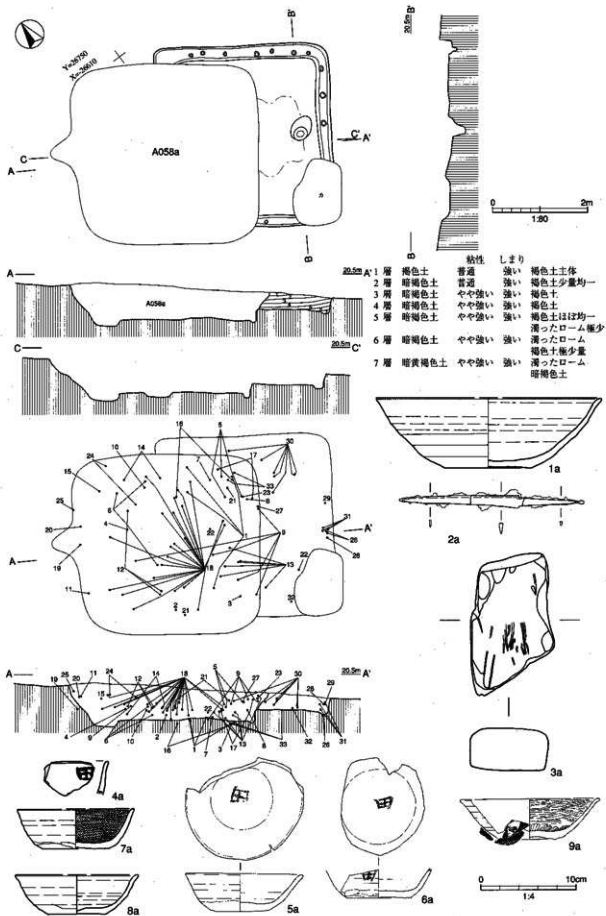


図 2-4-106 A058(2)

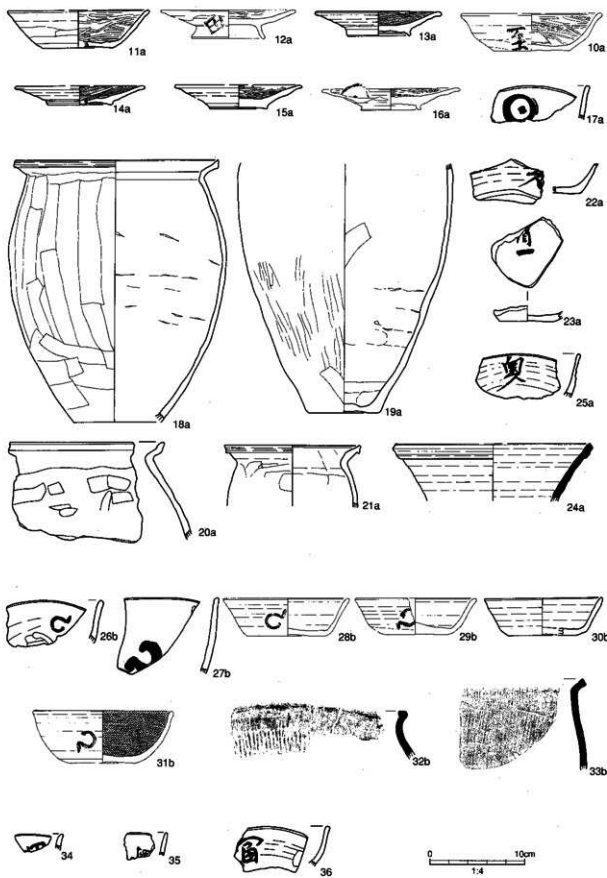


图 2-4-107 A058(3)

表 2-4-61 A058遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 成	胎土	遺存	備考
1	土師器 鉢	(237)×90×74 ロクロ成形 口縁外反 胴部下半～底部回転ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒雲母	1/3	外面 コケ状付着物
2	鉄器 刀子	193×7.5×2 -×11×4 -×4×2 重量 20.2g				
3	石製品 砥石	-×-×- 割痕数カ所有り			断片	
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐色 青	青	口縁片	墨書「田」 体部外面正位
5	土師器 坏	(122)×60×41 ロクロ成形 口縁外反 底部丸みを持つ 体部下端～底部回転ヘラケズリ	暗褐色 青	砂粒雲母	2/3	墨書「田」 底部内面
6	土師器 坏	-×67×(31) ロクロ成形 体部下丸みを持つ 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁一部ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒多 雲母	底部片	墨書 体部外面 底部内面
7	土師器 坏	(122)×70×42 ロクロ成形 体部丸みを持つ 口縁上端外反 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	砂橙褐色 赤黒色 青	砂粒雲母	1/3	内黒
8	土師器 坏	(128)×(61)×42 ロクロ成形雲母を持つ 口縁上端し体部丸みを持つ 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐色 良	砂粒雲母	1/3	
9	土師器 坏	145×68×43 ロクロ成形 口縁外反 外面 体部下端回転ヘラケズリ 底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒雲母	2/3	墨書「口」 体部外面
10	土師器 坏	(146)×(80)×40 ロクロ成形 口縁外反 外面 体部下端～底部回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	暗橙褐色 良	砂粒雲母	1/2	墨書「口」 体部外面
11	土師器 坏	(148)×(75)×40 ロクロ成形 口縁外反 外面 体部下端～底部回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	明橙褐色 良	砂粒雲母	1/3	
12	土師器 高台付皿	(139)×75×30 高台部「ハ」の字状 器面やや荒れ 外面 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	橙褐色 やや黒	砂粒雲母	1/3	墨書「出」 体部外面
13	土師器 高台付皿	131×68×27 ロクロ成形 高台部断面三角状 外面 底部中央回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	橙褐色 青	砂粒雲母	2/3	体部外面 微量の付着物
14	土師器 高台付皿	(134)×(68)×20 ロクロ成形 低い高台部口縁上端外反 外面 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒雲母	1/3	
15	土師器 皿	(132)×62×26 ロクロ成形 高台を途中で省略 外面 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒雲母	1/2	
16	土師器 高台付皿	(143)×63×23 ロクロ成形 体部大きく開く 口縁内面に浅い辻籠状の調整 高台部下端外反 外面 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒雲母	1/2	墨書「口」 体部外面
17	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「口」 体部外面

18	土師器 壺	215×93×279 最大径230口縁外反やや受け口状に上端はつまみ上げられる頸部「く」の字状 外面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半ド半タテヘラケズリ 下端ナナメヘラケズリ底部中央ヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラナデ 輪襷痕顕著	明褐色 弁	砂粒	2/3	
19	土師器 甕	-×(73)×(264) やや細長い胴部 外面 胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 胴部上半ヘラナデ輪襷痕が見られる	茶褐色 普	粗砂粒	1/3	
20	土師器 壺	-×-×- 口唇部をつまみ上げられる(常盤型か?) 外面 口縁頸部ナデ胴部上半横位の浅いヘラケズリ	砂褐色 砂淡褐色 弁	砂粒多 含む		口縁~ 胴上部
21	土師器 壺	(143)×-(65) 口縁外反し上端はつまみ上げられる 外面は凹線上に調整 外面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半ヘラケズリ後一部ヘラナデ 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半ヘラナデ	砂褐色 砂褐色 良	砂粒		口縁片 外面スス付着
22	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	砂褐色 砂暗褐色 弁	普		体部片 ~ 底部片 墨書「久」 体部外面 体部内面下 端 スス付着
23	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	褐色 普	普		口縁片 ~ 底部片 墨書「□□」 底部内面
24	須恵器 壺	(209)×-(162) ロクロ成形 口縁外反し上端でやや内湾 折り返し口縁 外面に稜を持つ	黒褐色 良	粗砂粒多		口縁片
25	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ	褐色 普	普		口縁片 ~ 体部片 墨書「？」 体部外面
26	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ	褐色 普	普		口縁片 ~ 体部片 墨書 体部外面
27	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内面 丁寧なミガキ	砂褐色 砂黒色 普	普		口縁片 墨書「□」 体部外面 内黒
28	土師器 坏	131×83×40 ロクロ成形 逆台形状を呈する 口縁外反 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	褐色 良	砂粒雲母		完形 墨書「□」 体部外面
29	土師器 坏	(126)×62×39 ロクロ成形 体部外傾しド半に丸みを持つ 体部下端~底部回転ヘラケズリ	褐色 弁	砂粒雲母	1/2	墨書「□」 体部外面
30	土師器 坏	123×72×41 ロクロ成形 逆台形状を呈する 底部中央 回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	暗褐色 普	砂粒雲母	3/4	外面少量の ケール状付着物
31	土師器 坏	145×70×56 ロクロ成形 体部丸みを持つ 外面 体部下端~底部回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	砂褐色 砂黒色 良	砂粒雲母	3/4	墨書「□」 体部外面 内黒
32	須恵器 壺	-×-×- ロクロ成形 口唇部をつまみ上げられる 外面 タタキ	青灰色 普	砂粒少 含む		口縁~ 胴部片
33	須恵器 壺	-×-×- ロクロ成形 口唇部をつまみ上げる 外面 タタキ	灰褐色 普	普		口縁~ 胴部片
34	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色 普	普		口縁片 墨書「？」 体部外面正位
35	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色 普	普		口縁片 墨書「富」 体部外面横位
36	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色 弁	普		口縁片 墨書「富」 体部外面

竈の作り替えが行われたものと考えられる。

覆土は色調を基本に14層に分層。床面直上で広範囲に焼土を検出している。人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

#### A058b

遺構 小形の隅丸方形のプランと思われる。床面はロームの床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出した。小穴を1基検出した。P1は出入口施設と判断した。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周すると思われる。竈は検出されなかった。

覆土は色調を基本に7層に分層。床面直上で広範囲に焼土を検出している。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。多量の墨書土器、鉄製品の出土が目される。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の竪穴住居跡の重複と考えられる。a住居跡は、高台付皿形土器を出土する段階、b住居跡はそれ以前の内黒の土師器の段階と考えられる。墨書土器の出土傾向としては、a住居跡が、「田」を多く出土し、b住居跡が「○」を多く出土する。a住居跡が平安時代、b住居跡が奈良～平安時代の竪穴住居跡と判断した。

#### A038

検出地区 D5-10G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A026・A039等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、住居跡中央で赤化範囲を検出した。出入口施設と思われる小穴1基を検出した。また南壁沿いに広く窪んだ地点を検出したが、用途は不明である。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁中央で検出された。両袖とも検出され遺存状況は比較的良好であった。向かって左の袖の内側は若干焼けていたが、右袖は焼けていなかった。燃焼部では明瞭な火床は検出されなかったもののわずかに赤化している範囲も認められた。形態としてはやや掘り込まれていた。天井部は断面にて検出され、自然崩落と考えられる。

覆土は、色調を基本に14層に分層。覆土中層までが人為的な埋め戻しで(14層)、その後は、概ね自然堆積による埋没が想定される。(調査中の手際で一部土説の不備あり。)

遺物 床面直上から覆土中層にかけて多量に出土した。

所見 出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と判断した。多量の墨書土器等の文字資料が出土し、また、鉄製品も多く出土している。(5)の「丈」と(28)の帯金具の出土は注目される。

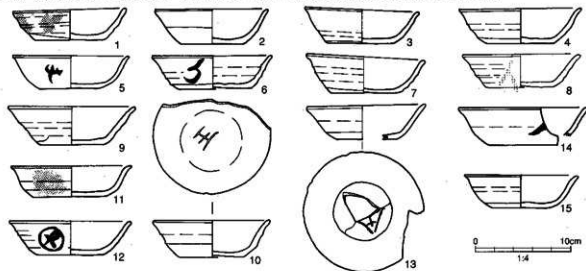


図 2-4-108 A038

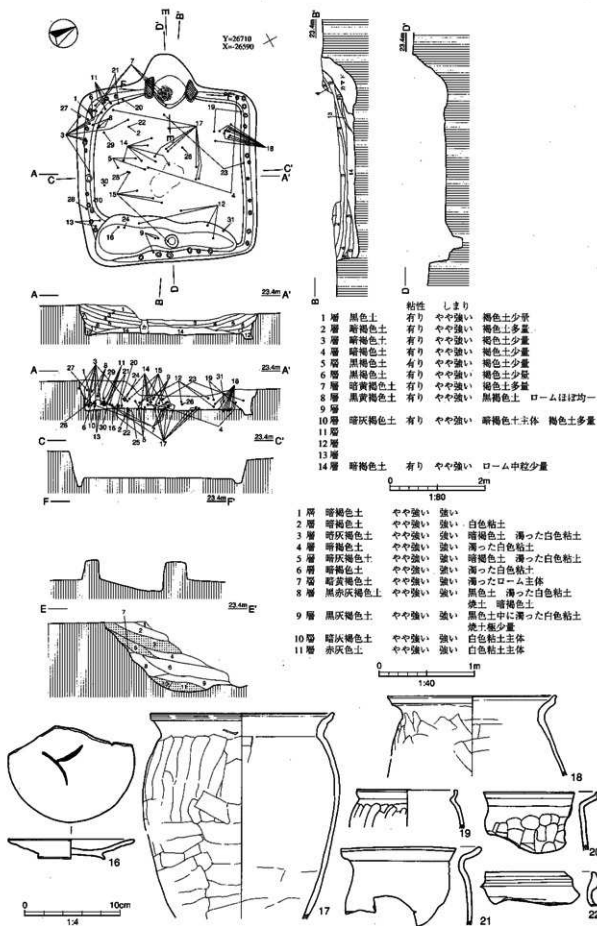


図 2-4-109 A038(2)



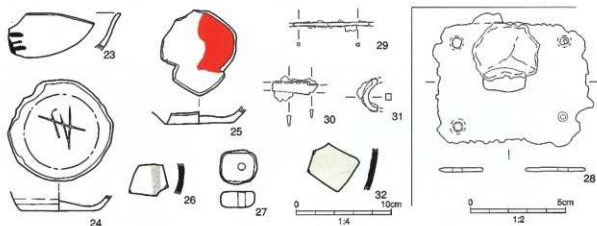


図 2-4-110 A038(3)

表 2-4-62 A038遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 構成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	119×62×31 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	褐色 青	青	完形	体部外面に 一部スス付着
2	土師器 杯	118×66×37 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体ヘラ切り	暗褐色 青	青	完形	
3	土師器 杯	120×68×38 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切り後ヘラケズリ	褐色 青	青	略完形	
4	土師器 杯	128×70×38 全体ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体静止ヘラケズリ	暗褐色 青	青	完形	
5	土師器 杯	122×62×36 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ	褐色 青	青	略完形	墨書「丈」 体部外面横位
6	土師器 杯	127×72×36 ロクロ成形	褐色 青	青	完形	墨書「口」 体部外面
7	土師器 杯	154×68×41 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	暗褐色 青	青	完形	
8	土師器 杯	124×70×35 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	褐色 青	青	略完形	朱書「人」 体部外面正位
9	土師器 杯	(134)×70×41 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	褐色 青	青	1/3	
10	土師器 杯	124×66×37 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 ミガキ	褐色 青	青	1/3	線刻「王」 底部内面
11	土師器 杯	(126)×72×32 ロクロ成形 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラ切り	暗褐色 褐色 青	青	1/2	スス付着 線刻「×」 体部外面
12	土師器 杯	124×70×36 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラ切り	褐色 青	青	1/2	墨書「記号」 体部外面
13	土師器 杯	126×62×38 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラケズリ	褐色 青	青	略完形	墨書「口」 底部外面

14	土師器 坏	(136)×74×40 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切り	褐色 青	青	1/4	墨書「□」 底部外面
15	土師器 坏	118×56×35 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切りのちヘラケズリ	褐色 青	青	1/2	
16	土師器 皿	132×70×25 ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切りのち底縁ヘラケズリ 内面 ミガキ	褐色 青	青	1/3	墨書 釈文「人」 底部内面
17	土師器 甕	(191)×—×(220) 最大径(206)口縁上端つまみ上げられ段上をなす頸部ゆるやかな「L」 の字状 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒雲母	1/3	
18	土師器 甕	(178)×—×(85) 口縁上端つまみ上げられ外反する 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラケズリ 内面 口縁ヨコナデ胴部胴部上半ヘラケズリ	暗褐色 青	砂粒雲母	口縁片	
19	土師器 甕	106×—×(50) 外面 口縁ナデ胴部上半ヘラケズリ	褐色 青	青	口縁片	
20	土師器 甕	ロクロ成形 口縁 口唇のつまみ上げ(常総型) 口縁頸部ナデ 胴部上半縦位の細かいヘラケズリ	橙褐色 青	青	口縁片	
21	土師器 甕	ロクロ成形 外面 口縁頸部ナデ 胴部上半タケキ	橙褐色 青	青	口縁片	
22	土師器 甕	ロクロ成形 外面 口縁頸部ナデ	褐色 青	青	口縁片	
23	土師器 坏	ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ	暗褐色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面
24	土師器 坏	106×80×26 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	褐色 青	青	底部片	繙刻 釈文「□」 底部内面
25	土師器 坏	—×70×26 ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切り後 底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 赤色 青	青	底部片	赤彩 底部内面
26	陶器 壺	ロクロ成形 内面 中位ナデ	緑色 灰色 黄	緻密	胴部片	釉有り
27	石製品 紡錘車	四角形 砥石として転用か				
28	鉄器 革金具	82×77×2 重量44.4g				
29	鉄器 鉄鏝	81×3.5×3 —×3×2.5 重量4.4g				
30	鉄器 刀子	48×11×4 —×8.5×3 重量7.2g				
31	鉄器	34.5×6×6.5 重量6.2g				
32	陶器 甕	ロクロ成形	砂灰色 暗褐色 青	緻密	胴部片	自然釉あり

表 2-4-63 奈良・平安時代竪穴住居跡第 3 群一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模; 長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	施設施設・位置 周溝・備考
A045	E5-63	隅丸方形 2.74×2.56×0.36 N-10°-W	床面 ロームの床で中央部で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北隅で コーナー竈 周溝幅 3/4 周溝幅 -m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土	色調を基本に18層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A046	E5-63	隅丸方形 3.2×3.66×0.38 N-35°-E	床面 ロームの床で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡南東壁中央 周溝 1/2 周溝幅 -m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に20層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A047	E5-72	隅丸方形 3.2×3.0×0.56 N-33°-W	床面 ロームの床で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡南東壁中央 周溝 全周 周溝幅 -m 主柱穴
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に22層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A048	E5-61	隅丸方形 3.16×3.16×0.5 N-39°-E	床面 ロームの床で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北東壁隅で コーナー竈 周溝 全周 周溝幅 -m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に30層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A049	D5-57	隅丸方形 4.04×3.64×-	床面 ロームと少量の暗褐色土の混合土による貼床で中央部で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡西壁ほぼ中央 周溝 全周 周溝幅 -m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて多量出土	色調を基本に9層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A050	D5-29	隅丸方形 3.73×3.58×0.51	床面 ロームの床で中央部で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北壁ほぼ中央 色調 全周 周溝幅 -m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に10層に分層 人為的な埋め戻し後自然堆積による埋没	
A051	D6-39	隅丸方形 -×-×0.17 N-24°-E	床面 ロームの床で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁であるが立ち上がり部分が僅かで詳細不明	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 検出されなかった 周溝幅 -m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて多量出土	色調を基本に7層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A052a	D5-40	隅丸方形 3.87×3.52×0.56 N-49°-W	床面 ロームと暗褐色土の混合土の貼床 中央部で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡西壁ほぼ中央 周溝 全周 周溝幅 -m 主柱穴 不明
		色調を基本に13層に分層 人為的な埋め戻し後自然堆積による埋没		
A052b	D5-40	隅丸方形 -×-×- N-49°-W	床面 ロームと暗褐色土の混合土の貼床 一部で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 検出されなかった 周溝 検出されなかった 周溝幅 -m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて多量出土	色調を基本に1層に分層	
A053	E5-41	隅丸方形 5.13×5.05×0.41 N-62°-W	床面 ロームの床で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 全周 周溝幅 -m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土中層にかけて少量出土	色調を基本に15層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	

A054	ES-21	隅丸方形 4.93×3.73×0.38 N-22 <sup>+</sup> -E	床面 ロームの床ではほぼ平坦 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 一部で検出 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に10層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
A055	ES-33	隅丸方形 5.26×4.98×－ N-61 <sup>+</sup> -E	床面 ロームの床で中央で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡東壁ほぼ中央 周溝 全周 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量出土	色調を基本に12層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
A056	ES-43	隅丸方形 5.00×4.64×－ N-57 <sup>+</sup> -E	床面 ロームの床で中央に硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡西壁ほぼ中央 周溝 全周 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量出土 竈内からの出土多い	色調を基本に12層に分層 人為的な埋め戻し後自然堆積による埋没が想定される	
A057	ES-52	隅丸方形 4.60×3.50×0.52 N-34 <sup>+</sup> -E	床面 ロームの床で中央で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 全周 主柱穴 4本
		床面直上に散点 覆土中～上層にかけて比較的多量出土 全体的に少量	色調を基本に17層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A058a	ES-41	隅丸方形 3.9×3.8×0.74 N-57 <sup>+</sup> -E	床面 ロームの床で中央で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	竈 2基 周溝 全周 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土 墨書土器、鉄製品が多い	色調を基本に14層に分層 人為的な埋め戻しの後自然堆積による埋没が想定される	
A058b	ES-41	隅丸方形 3.86×－×0.32 N-37 <sup>+</sup> -E	床面 ロームの床で中央で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	周溝 全周 主柱穴 検出されず
			色調を基本に14層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
A038	DS-10G	隅丸方形 3.78×3.75×0.62	床面 ロームの床 住居跡中央で水化範囲を検出 壁 ロームの壁 ほぼ垂直に立ち上がる	竈 北壁中央 周溝 全周 周溝幅 0.19m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土中層にかけて多量に出土	色調を基本に14層に分層 人為的な埋め戻し後概ね自然堆積が想定される	

## 2 掘立柱建物跡

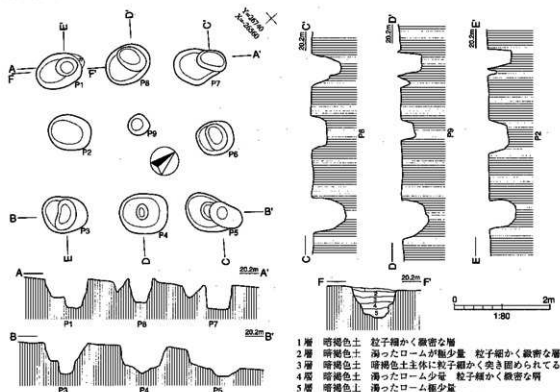


図 2-4-111 B006

### B006

検出地区 D5-37G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B007・B008等がある。隣接する埴堀遺跡と一群を形成する掘立柱建物跡である。

遺 構 桁行2間(3.22m)×梁行2間(3.02m)。桁行の主軸方位はN-48°-Wとなる。総柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は、不整形である。各柱穴ともしっかり掘られている。各柱穴の堀方の観察から側柱から総柱への立て替えが考えられるが、P9の位置が悪く、総柱の掘立柱建物跡として尚検討の余地が残る。

遺 物 遺物は出土しなかった。

所 見 遺物は出土しなかったが、遺構の規模・形態及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

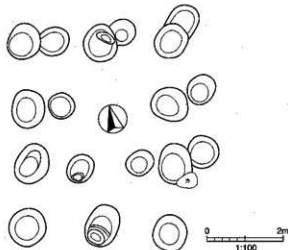


図 2-4-112 B007・B008全体図

### B007

検出地区 D5-38G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B006・B009等がある。B008と重複するが、本掘立柱建物跡の方が古い。

遺 構 桁行2間(3.58m)×梁行2間(3.52m)。桁行の主軸方位はN-6°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は、不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺 物 柱穴堀方から土師器の坏の小破片が1点出土。

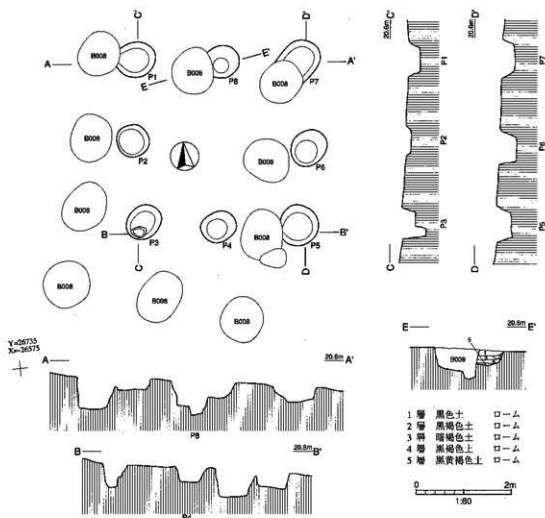


図 2-4-113 B007

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。検出面で柱痕の範囲を確認。(P2.5.6.7) B008との重複を考えると、柱材は上部だけを撤去し、地下部分はそのままだったと考えられる。掘立柱建物跡どうしの重複で、向境遺跡の奈良・平安時代の掘立柱建物跡の展開で少なくとも2基が設定できることが判る例である。

#### B008

検出地区 D5-38G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B006・B009等がある。B007と重複するが、本掘立柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行3間(5.16m)×梁行2間(3.86m)。桁行の主軸方位はN-15°Eとなる。側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は、不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 柱穴堀方から土師器の小破片が数点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。掘立柱建物跡どうしの重複で、向境遺跡の奈良・平安時代の掘立柱建物跡の展開で少なくとも2基が設定できることが判る例である。

#### B009

検出地区 D5-48G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B007・B008・B010等がある。A049と重複するが、本掘立柱建物跡の方が古い。

遺構 桁行2間(4.36m)×梁行2間(3.86m)。桁行の主軸方位はN-55°Wとなる。側柱の掘立柱建物跡で、西側の柱穴列の柱穴数が多い(P8・P9)。出入口用の施設が作られていたものと考えられる。

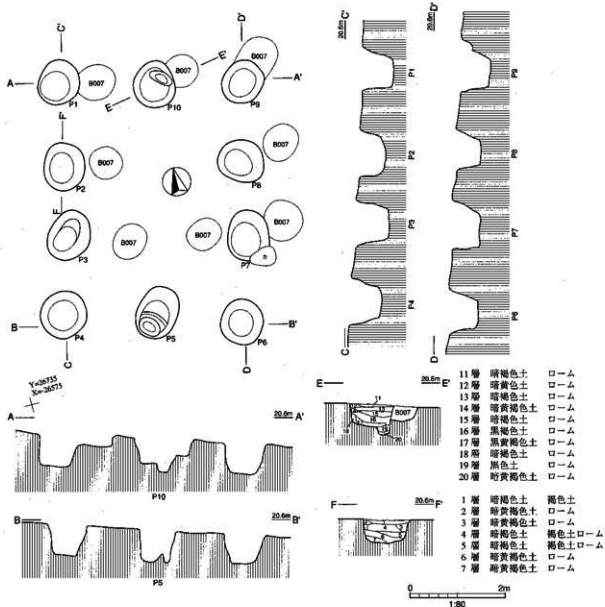


図 2-4-114 B007

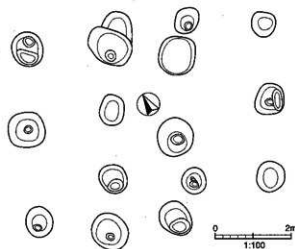


図 2-4-115 B010・B011全体図

各柱穴の堀方の形状は不整の円形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 柱穴堀方から土師器の坏の小破片が出土。墨書土器であるが、破片のため判読不能である。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。重複するA049より古い時期の掘立柱建物跡で、A049の出土遺物との比較検討から、土師器の高台付皿形土器、出現以前の時期に相当すると思われる。B007・B008の掘立柱建物跡の時期差と合わせ、向境の集落展開を考える上で示唆に富む例となろう。

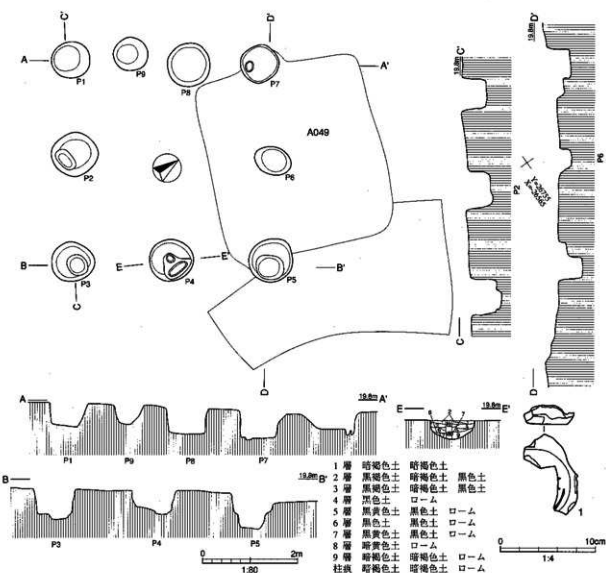


図 2-4-116 B009

表 2-4-64 B009遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	ロクロ成形 -×-×- 胴部下端へラケズリ 底部一回転へラ切り	淡褐色 善	善	体部片 - 底部片	底部外面 墨書 釈文「□」

B010

検出地区 D5-48G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B007・B008・B009等がある。B011と重複するが、本掘立柱建物跡の方が古い。

遺構 桁行2間(4.74m)×梁行2間(3.80m)。桁行の主軸方位はN-32°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 柱穴堀方から土師器及び須恵器の坏が出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。検出面で柱痕の範囲を確認。(P1,2,3,5,6,7,8) B011との重複を考えると、柱材は上部だけを撤去し、地下部分はそのままであったと考えられる。重複するB011より古い時期の掘立柱建物跡で、B007・B008の掘立柱建物跡の時期差と合わせ、向境の集落展開を考える上で示唆に富む例となろう。



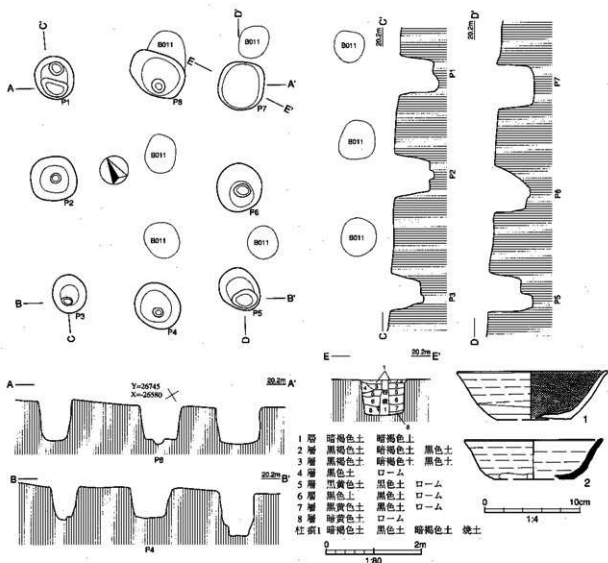


図 2-4-117 B010

表 2-4-65 B010遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	155×77×52 口径外反ロクロ 外面 胴部下端底部中央一屈転ヘラケズリ 内面 口縁一密なヘラミガキ	暗褐色土 良	砂粒 雲母	2/3	内黒
2	須恵器 杯	(148)×(83)×42 ロクロ口縁外反 外面 胴部下端底部中央一手持ちヘラケズリ	暗灰色土 良	砂粒	1/3	

B011

検出地区 D5-48G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B007・B008・B009等がある。B010と重複するが、本掘立柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行2間(4.10m)×梁行2間(3.94m)。桁行の主軸方位はN-32°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の掘方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。検出面、土層断面にて柱痕を検出(P1,3,5,6,8)。覆土は突き固めた土が充填され、柱材の多くは立ち腐れ多ものと考えられる。土層断面図の1～5層及び柱痕1はB010に伴うもので、本掘立柱建物跡に伴うものは11層～18層及び柱痕2である。

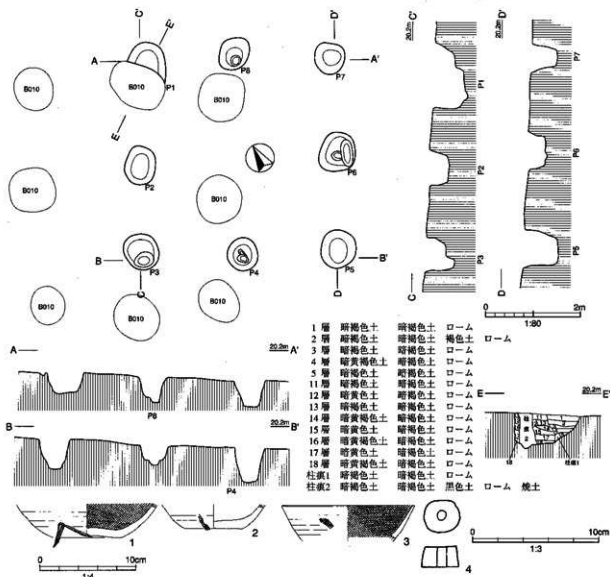


図 2-4-118 B011

表 2-4-66 B011遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	—×70×(36) ロクロ成形 外面 胴部下端底部中央回転ヘラケズリ 内面 胴部下端ヘラミガキ	暗橙褐色 青		1/4	内黒 墨書 体部外面「□」
2	土師器 坏	—×(60)×(26) 外面 胴部下端回転ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒	体部～ 底部片	墨書 体部外面「□」
3	土師器 坏	(138)×—×(38) ロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 内面 口縁ヘラミガキ	暗褐色 黄	砂粒	口縁片	内黒 墨書 体部外面「□」
4	石製品 紡錘車	—×—×— 平面楕円を呈する	灰白色			

遺物 柱穴掘方から土師器の坏が出土。図示したものの他に墨書土器の小破片が比較的多く出土している。重複するB011より古い時期の掘立柱建物跡で、B007・B008の掘立柱建物跡の時期差と合わせ、向境の集落展開を考える上で示唆に富む。

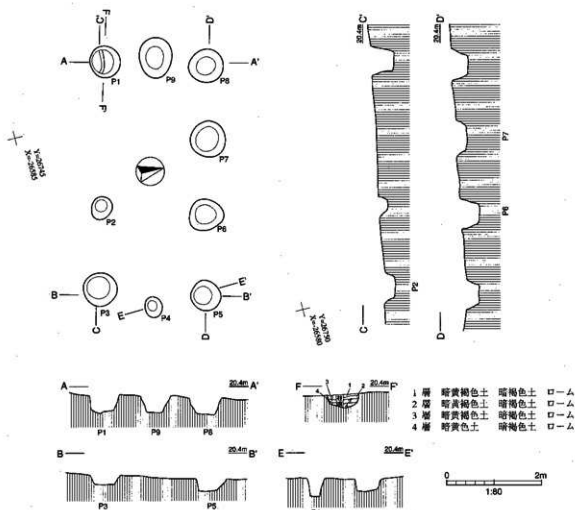


図 2-4-119 B012

**B012**

検出地区 D5-49G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B011・B012・B013等がある。

遺構 検出された遺構は、桁行3間(5.00m)×梁行2間(2.35m)。桁行の主軸方位はN-76°-Wとなり、側柱の掘立柱建物跡となるが、遺構南側で中世以降の溝が走っているため、庇付の2間×2間の側柱、或いは、3間×3間の側柱の掘立柱建物跡だった可能性がある。各柱穴の堀方の形状は不整の円形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 柱穴堀方から土師器の小破片が1点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

**B013**

検出地区 D5-58G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B010・B011・B012・B014等がある。

遺構 桁行3間(5.16m)×梁行2間(4.34m)。桁行の主軸方位はN-60°-Wとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 柱穴堀方から土師器の小破片が4点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

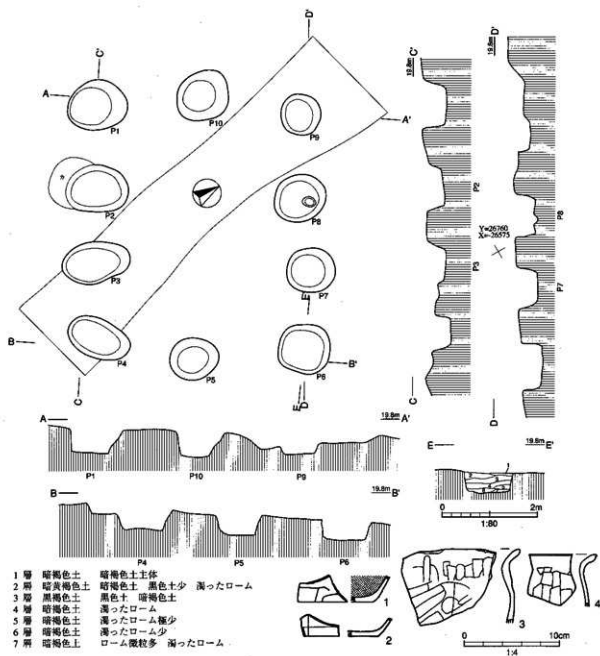


図 2-4-120 B013

表 2-4-67 B013遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	-X-X- ロク口成形 外面 胴部下端-ヘラケズリ底部-回転ヘラ切り 内面 丁寧なミガキを施す	赤褐色 白黒色 青	青	体部片 ~ 底部片	内黒
2	土師器 坏	-X-X- ロク口成形 外面 胴部下端-ヘラケズリ底部-回転糸切り回転ヘラケズリ 内面 ナゲ調整	褐色 青	青	体部~ 底部片	
3	土師器 甕	-X-X- 口縁-ナゲ胴部-縦位のヘラケズリ 胴部上半-斜位のヘラケズリ	赤褐色 青	白色 微量 少量	口縁片 ~ 胴部片	
4	土師器 甕	-X-X- 口縁部に波線一条 胴部 胴部上半-縦位のヘラケズリ	暗褐色 良	青	口縁片	

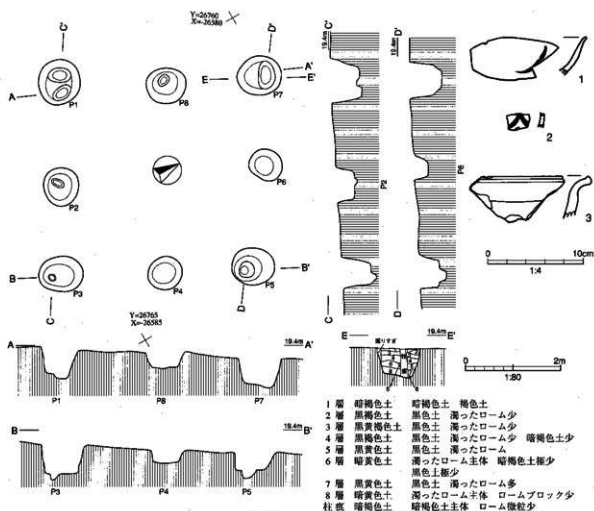


図 2-4-121 B014

表 2-4-68 B014遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 染成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 胴部下端下半ヘラケズリ	褐色 青	青	口縁片	墨書 □ 体部外面
2	土師器	-X-X- ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書 □ 体部外面
3	土師器 甕	-X-X- 胴部と頸部の境に一段接をつくる ロクロ成形 口縁頸部胴上半ヘナア調整	微褐色 青	青	口縁片	

B014

検出地区 D5-59G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B013・B015・B016等がある。B015とは柱穴間での重複はないが、それぞれの建物範囲が重なっているため、それぞれが時期差があると考えられる。

遺構 桁行2間(4.20m)×梁行2間(4.00m)。桁行の主軸方位はN-52°-Wとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の掘方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。各柱穴の検出面にて柱痕を検出した。

遺物 柱穴掘方から土師器の小破片が3点出土。B008出土遺物との接合資料があった。

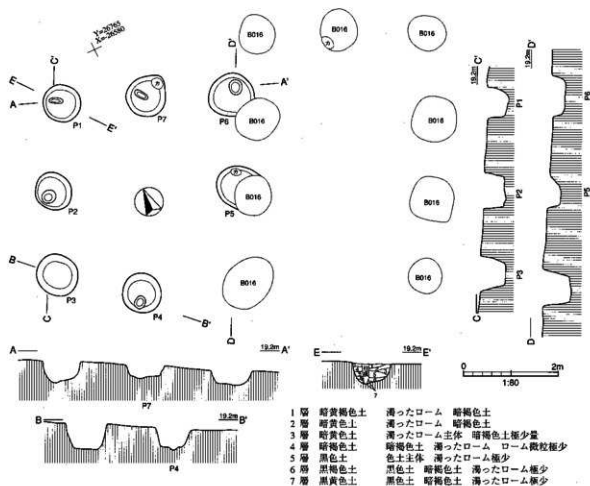


図 2-4-122 B015

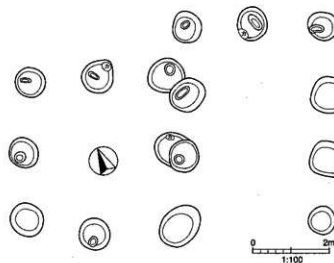


図 2-4-123 B015・B016全体図

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。B008と同時存在の可能性もある。また、各柱穴の検出面にて柱痕を検出していること、後述するB015では、柱痕が全てに検出されているわけではないこと等から本掘立柱建物跡の方が新しい可能性があるが、いずれも、尚、検討の余地があろう。

#### B015

検出地区 D5-69G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B014・B017等がある。B014とは柱穴

間での重複はないが、それぞれの建物範囲が重なっているため、それぞれが時期差があると考えられる。また、B016とは重複関係にあり、本掘立柱建物跡の方が古い。

遺構 桁行2間(4.14m)×梁行2間(3.80m)。桁行の主軸方位はN-46°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の掘方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。南隅の柱穴が検出できなかったが、重複するB016の柱穴に壊されたものと考えられる。

遺物 柱穴掘方から内黒の土師器の小破片が数点出土。

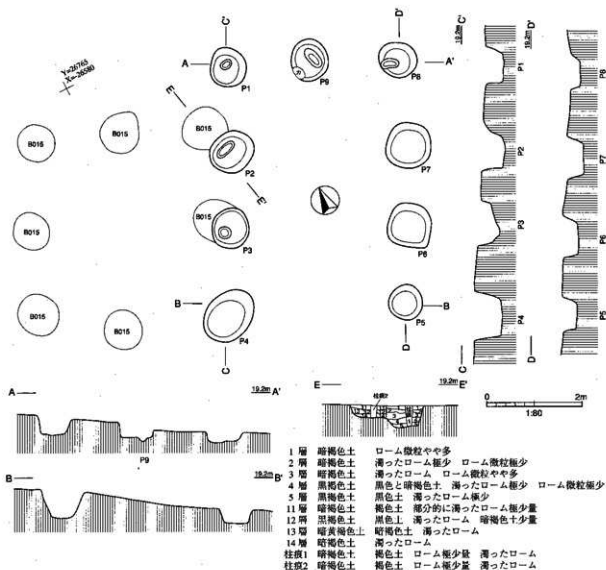


図 2-4-124 B016

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。先述のB014、後述のB016と含め向境の集落展開を考える上で、重要な例となる。

#### B016

検出地区 D5-69G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B014・B017等がある。B015とは重複関係にあり、本掘立柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行3間(5.20m)×梁行2間(3.80m)。桁行の主軸方位はN-27°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡となるが、南側で攪乱の為、柱穴を1基、検出できなかった。各柱穴の掘方の形状は不整の円形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。検出面、土層断面にて柱痕を検出(P1,2,4,5,7,8,9)。

覆土は突き固めた土が充填され、柱材の多くは立ち腐れ多ものと考えられる。土層断面図の1～5層及び柱痕1は本掘立柱建物跡に伴うもので、11層～14層及び柱痕2はB015に伴うものである。

遺物 柱穴掘方から土師器の小破片が数点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。先述のB014・B015と含め向境の集落展開を考える上で重要な例となる。まずB015が建てられ、その後B014とB016が建てられたと考えられる。B014・B016との前後関係は不明であるが、或いは同時存在だったかも知れない。

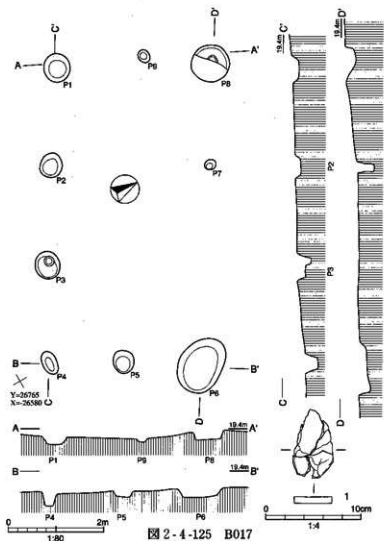


図 2-4-125 B017

**B017**

検出地区 D5-68G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、B013・B014・B015・B016等がある。隣接する境掘遺跡と接する地点であり、それらと一群を形成する位置関係となる。

遺構 桁行3間(6.40m)×梁行2間(3.18m)。桁行の主軸方位はN-60°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡となるが、柱穴の形状、規模等で他の掘立柱建物跡とやや違和感がある。各柱穴の堀方の形状は不整の円形で規模に規格性がない。各柱穴とも浅い凹状のものが多い。

遺物 柱穴堀方から鉄製品が2点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

表 2-4-69 B017遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄器	73×40×7 重量88.9g				

**B018**

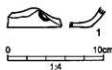


図 2-4-126 B018

検出地区 E5-61G。台地先端の傾斜が始まる地点に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A048・B019等がある。

遺構 桁行2間(3.56m)×梁行2間(3.44m)。桁行の主軸方位はN-46°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 柱穴堀方から土師器小破片が13点出土。

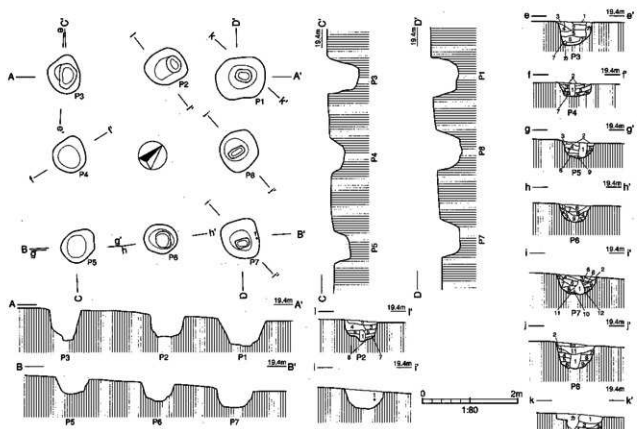
所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

表 2-4-70 B018遺物観察表

(単位mm)

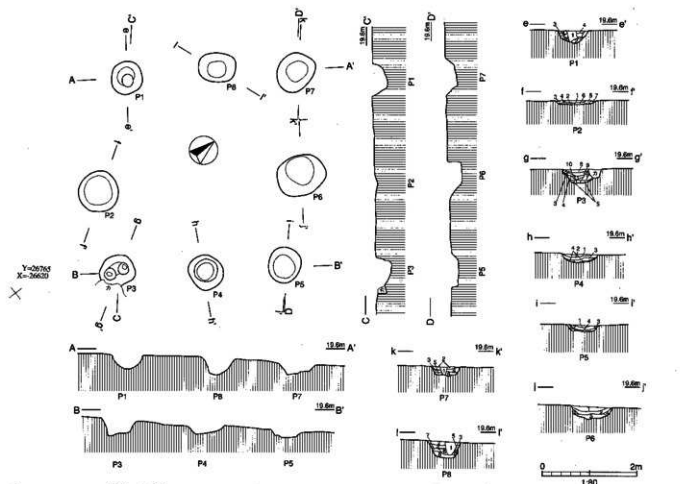
No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り	褐色 青	普	体部片 底部片	罫窓「□」 体部外面





Section	Layer	Material	Strength	Notes
P1	1層	暗褐色土	強い	ローム粒含
	2層	暗褐色土	強い	暗褐色土少 濁ったローム少含
	3層	暗褐色土	強い	濁ったローム主体 暗褐色土少含
	4層	暗褐色土	強い	暗褐色土と濁ったローム均一に混
	5層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量の濁ったロームが混
	6層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量の濁ったロームが混
	7層	暗褐色土	強い	濁ったローム主体 少量の暗褐色土含
P3	1層	暗褐色土	強い	暗褐色土主体
	2層	褐色土	強い	褐色土と少量の暗褐色土が混
	3層	暗褐色土	強い	濁ったロームと暗褐色土が混
	4層	灰色土	強い	漆むように濁ったローム混
	5層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量のロームが混
	6層	暗褐色土	強い	ローム極少
	7層	暗褐色土	強い	褐色土中に極少量の濁ったローム混
	8層	黒色土	強い	ローム粒粒が混
	9層	黒色土	特に強い	ローム主体
P5	1層	暗褐色土	強い	暗褐色土主体
	2層	褐色土	強い	ローム粒粒少
	3層	暗褐色土	強い	暗褐色土中にローム粒粒少含
	4層	暗褐色土	強い	暗褐色土と濁ったロームが混
	5層	暗褐色土	強い	濁ったローム主体
	6層	暗褐色土	強い	濁ったロームと暗褐色土が粗く混
	7層	暗褐色土	強い	漆むように濁ったロームが混
	8層	黒褐色土	強い	ローム粒粒
	9層	黒褐色土	強い	黒褐色土中濁ったローム少含
	10層	黒褐色土	強い	黒色土中漆むように極少量の濁ったロームが混
P6	11層	黄色土	特に強い	ローム主体
	12層	暗褐色土	強い	濁ったローム主体
P7	1層	黒褐色土	やや強い	黒色土と暗褐色土が粗く混
	2層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量の褐色土混
	3層	暗褐色土	強い	ロームと暗褐色土が粗く混
	4層	暗褐色土	強い	黒褐色土中にローム粒多含
	5層	暗褐色土	強い	濁ったローム主体 暗褐色土少
	6層	暗褐色土	強い	ローム粒粒多含
	7層	黒褐色土	強い	黒色土と暗褐色土が混
P2	1層	暗褐色土	強い	暗褐色土と褐色土が混
	2層	暗褐色土	強い	褐色土主体
	3層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量の暗褐色土が混
	4層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量の暗褐色土が混
	5層	暗褐色土	強い	極少量のローム混
	6層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量の濁ったロームが混
	7層	暗褐色土	強い	ロームが主体
	8層	暗褐色土	強い	濁ったロームと少量の暗褐色土が混
P4	1層	暗褐色土	強い	暗褐色土と濁ったロームが混
	2層	暗褐色土	強い	濁ったローム多量と少量の暗褐色土が混
	3層	黒色土	強い	黒色土と少量のロームが混
	4層	暗褐色土	強い	暗褐色土と濁ったロームが粗状に混
	5層	黒褐色土	強い	黒褐色土中に漆むように濁ったロームが混
	6層	暗褐色土	強い	暗褐色土中に濁ったローム度状に混
	7層	黒色土	強い	少し濁ったロームが混
	8層	暗褐色土	強い	黒色土中に少量の濁ったローム
	9層	黒色土	強い	黒色土中に漆むように濁ったローム極少量
	10層	暗褐色土	強い	ロームが主体に少含
	11層	暗褐色土	強い	褐色土主体
P8	1層	暗褐色土	強い	ローム粒粒少含
	2層	暗褐色土	強い	局部的にローム多含
	3層	暗褐色土	強い	ローム粒粒少含
	4層	暗褐色土	強い	濁ったローム主体 暗褐色土少含
	5層	暗褐色土	強い	ローム粒粒少含
	6層	暗褐色土	強い	暗褐色土と少量の濁ったロームが混
	7層	暗褐色土	強い	黒色土と少量の暗褐色土が混
	8層	暗褐色土	強い	濁ったロームと少量の暗褐色土が混

図 2-4-127 B018(2)



P1	粘性	しまり	
1層 暗褐色土	強い	強い	きめ細かい土
2層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と少量のロームが均一に混じる
3層 黒黄色土	やが強い	強い	黒色土とロームが混じる
4層 暗褐色土	強い	強い	黒色土と少量の暗褐色土が混じる
5層 暗褐色土	強い	強い	濡ったロームと暗褐色土が混じる
6層 暗褐色土	強い	強い	黒色土と濡ったロームが均一に混じる
7層 黒褐色土	強い	強い	黒色土主体 暗褐色土が少量混じる
8層 黒色土	強い	強い	濡ったロームが斑状に混じる

P3	粘性	しまり	
1層 褐色土	強い	強い	褐色土主体
2層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と褐色土はほぼ均一に混じる
3層 暗黄色土	特に強い	強い	濡ったローム主体
4層 暗黄色土	特に強い	特に強い	濡ったローム主体
5層			
6層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と少量の黒色土が混じる
7層 暗褐色土	強い	強い	黒色土と暗褐色土が混じる
8層 暗褐色土	強い	強い	ロームが包含
9層 暗褐色土	強い	強い	褐色土が斑状に混じる
10層 黒褐色土	強い	強い	黒色土と少量の暗褐色土が均一に混じる
11層 黒色土	強い	強い	暗褐色土が少量混じる
12層 暗褐色土	強い	強い	濡ったロームが均一に混じる

P6	粘性	しまり	
1層 褐色土	強い	強い	ローム微粒が少量混じる
2層 黒黄色土	強い	強い	黒色土中ロームがやや多く斑状に混じる
3層 暗黄色土	特に強い	強い	黒色土と濡ったロームがほぼ均一に混じる
4層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と少量の濡ったロームがほぼ均一に混じる
5層 黄色土	特に強い	特に強い	ロームが主体 暗褐色土が少量混むように混じる

P7	粘性	しまり	
1層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混じる
2層 褐色土	強い	強い	少量の暗褐色土が混じる
3層 暗褐色土	強い	強い	少量の濡ったロームが混じる
4層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土の純層
5層 暗黄色土	特に強い	強い	暗褐色土とロームが粗く混じる
6層 暗褐色土	強い	強い	極少量の濡ったロームが混じる

P2	粘性	しまり	
1層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土主体
2層 暗褐色土	強い	強い	黒色土と少量のロームが混じる
3層 褐色土	強い	強い	少量のロームが均一に混じる
4層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と少量のロームが混じる
5層 暗褐色土	強い	強い	黒色土中にロームが斑状に混じる
6層 暗黄色土	強い	強い	多量のローム土主体 黒色土が少量混じる
7層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と濡ったロームはほぼ均一に混

P4	粘性	しまり	
1層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土主体
2層 暗褐色土	強い	強い	黒褐色土と少量の褐色土が混じる
3層 紫色土	強い	強い	ローム微粒が少量混
4層 暗黄色土	強い	強い	濡ったロームと暗褐色土が混じる

P5	粘性	しまり	
1層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と少量のロームが混
2層 暗黄色土	強い	強い	濡ったロームと少量の暗褐色土がほぼ均一に混じる
3層 暗黄色土	強い	強い	濡ったローム主体
4層 暗黄色土	強い	強い	濡ったローム主体
5層 暗黄色土	強い	強い	粘と濡らないローム主体

P8	粘性	しまり	
1層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と均一に混
2層 黒褐色土	強い	強い	黒色土と少量の暗褐色土が混じる
3層 暗褐色土	強い	強い	濡ったロームが少量混じる
4層 黒色土	強い	強い	極少量の暗褐色土が均一に混
5層 暗褐色土	強い	強い	暗褐色土と少量のローム混じる
6層 黒色土	強い	強い	ローム微粒が少量混じる
7層 黒色土	強い	強い	極少量のロームが混じる
8層 黒色土	強い	強い	黒色土の純層

図 2-4-128 B019

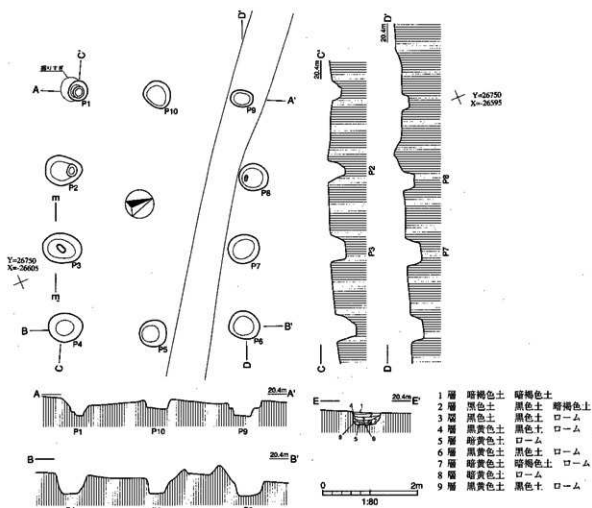


図 2-4-129 B020

**B019**

検出地区 E5-62G。台地先端の傾斜が始まる地点に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A047・B018等がある。

遺構 桁行2間(4.12m)×梁行2間(3.65m)。桁行の主軸方位はN-52°-Wとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴とも比較的しっかりと掘り込まれている。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土しなかったが、遺構の規模、形態及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

**B020**

検出地区 E5-40G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A053・B021等がある。

遺構 桁行3間(4.94m)×梁行2間(3.62m)。桁行の主軸方位はN-67°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれているが、規模が他の掘立柱建物跡と比べやや小規模である。

遺物 柱穴堀方から土師器小破片が少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

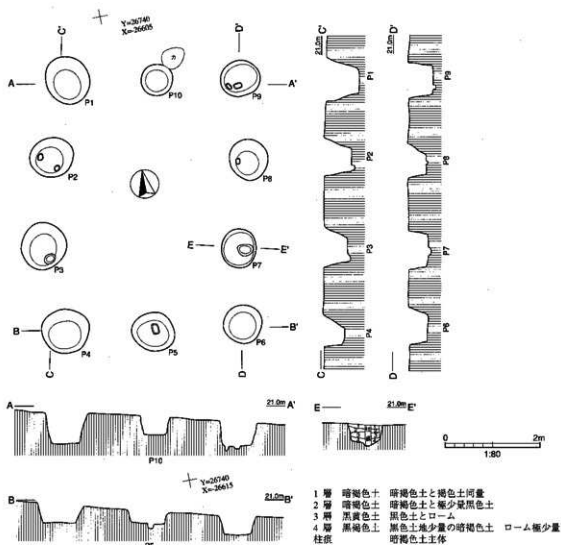


図 2-4-130 B021

**B021**

検出地区 E5-30G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A053・B020・A054・A058ab等がある。

遺 構 桁行3間(5.36m)×梁行2間(3.86m)。桁行の主軸方位はN-11°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺 物 遺物は出土しなかった。

所 見 遺物は出土しなかったが、遺構の規模、形態及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

**B024**

検出地区 D5-40G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A051・A053・B021等がある。A052と重複するが、新旧関係は明らかにし得なかった。

遺 構 桁行3間(5.60m)×梁行2間(4.32m)。桁行の主軸方位はN-28°-Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の堀方の形状は不整形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺 物 柱穴堀方から土師器小破片が少量出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。



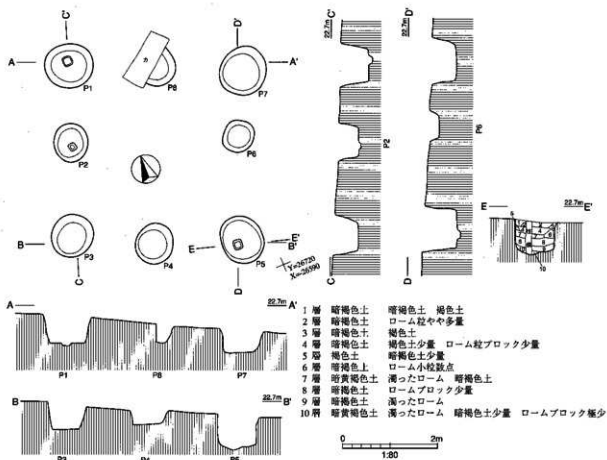


図 2-4-132 B025

B025

検出地区 DS-19G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A038・A050等がある。

遺 構 桁行3間(4.88m)×梁行2間(4.12m)。桁行の主軸方位はN-24°Eとなり、側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の掘方の形状は不整円形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺 物 柱穴掘方から土師器小破片が少量出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

表 2-4-72 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出区	間 数		主軸方位		柱穴規模 (長軸×短軸×深さ)				備 考
		桁 行	梁 行							
B006	D5-37G	2×2	N-48°-W	P1	0.98×0.70×0.64	P6	0.76×0.70×0.42			
		3.22	3.02	P2	0.90×0.76×0.36	P7	0.80×0.78×0.50			
				P3	0.96×0.76×0.74	P8	0.98×0.80×0.52			
				P4	1.00×0.84×0.58	P9	0.42×0.42×0.32			
				P5	1.00×0.76×0.58					
B007	D5-38G	2×2	N-6°-E	P1	0.80×0.78×0.26	P5	0.86×0.84×0.32			
		3.58	3.52	P2	0.68×0.68×0.12	P6	0.82×0.70×0.38			
				P3	0.80×0.68×0.54	P7	0.80×0.00×0.30			
				P4	0.70×0.62×0.36	P8	0.72×0.70×0.36			
B008	D5-38G	3×2	N-15°-E	P1	0.98×0.86×0.66	P6	0.94×0.88×0.62			
		5.16	3.86	P2	1.00×0.86×0.56	P7	1.08×0.76×0.60			
				P3	1.08×0.86×0.72	P8	1.00×0.90×0.52			
				P4	1.00×0.98×0.70	P9	0.94×0.84×0.64			
				P5	1.14×0.84×0.70	P10	1.00×0.89×0.74			
B009	D5-48G	2×2	N-55°-W	P1	0.80×0.78×0.54	P6	0.78×0.60×0.28			
		4.36	3.86	P2	0.92×0.90×0.56	P7	0.80×0.80×0.62			
				P3	0.90×0.86×0.66	P8	0.92×0.90×0.56			
				P4	0.92×0.90×0.52	P9	0.74×0.74×0.42			
				P5	0.94×0.92×0.76					
B010	D5-48G	2×2	N-32°-E	P1	0.90×0.82×0.82	P6	1.00×0.96×0.78			
		4.74	3.80	P2	1.00×0.94×0.84	P7	1.00×0.96×0.80			
				P3	0.80×0.70×0.70	P8	1.20×0.88×0.82			
				P4	1.02×0.88×0.64					
				P5	0.98×0.78×0.96					
B011	D5-48G	2×2	N-32°-E	P1	0.82×0.00×0.48	P6	0.84×0.76×0.30			
		4.10	3.94	P2	0.80×0.64×0.42	P7	0.64×0.62×0.56			
				P3	0.78×0.68×0.62	P8	0.66×0.60×0.54			
				P4	0.68×0.64×0.42					
				P5	0.80×0.74×0.76					
B012	D5-49G	3×2	N-76°-W	P1	0.66×0.64×0.40	P6	0.70×0.66×0.42			
		5.00	2.35	P2	0.50×0.40×0.20	P7	0.76×0.74×0.24			
				P3	0.70×0.70×0.20	P8	0.74×0.70×0.34			
				P4	0.38×0.34×0.38	P9	0.88×0.68×0.34			
				P5	0.64×0.62×0.28					
B013	D5-58G	3×2	N-60°-W	P1	1.26×1.10×0.52	P6	1.08×1.04×0.46			
		5.16	4.34	P2	1.30×1.00×0.38	P7	1.02×0.94×0.46			
				P3	1.44×0.80×0.42	P8	1.12×1.00×0.50			
				P4	1.34×0.82×0.42	P9	0.86×0.86×0.22			
				P5	1.02×0.90×0.42	P10	1.10×1.04×0.54			
B014	D5-59G	2×2	N-52°-W	P1	0.96×0.88×0.70	P6	0.70×0.64×0.30			
		4.20	4.00	P2	0.80×0.74×0.48	P7	0.92×0.82×0.64			
				P3	0.96×0.76×0.76	P8	0.84×0.74×0.36			
				P4	0.76×0.68×0.28					
				P5	0.90×0.80×0.56					
B015	D5-69G	2×2	N-46°-E	P1	0.80×0.76×0.46	P6	0.96×0.94×0.30			
		4.14	3.80	P2	0.80×0.76×0.48	P7	0.84×0.82×0.30			
				P3	0.90×0.84×0.54					
				P4	0.84×0.82×0.48					
				P5	0.90×0.00×0.28					
B016	D5-69	3×2	N-27°-E	P1	0.84×0.76×0.40	P6	0.92×0.90×0.32			
		5.20	3.80	P2	0.90×0.80×0.50	P7	0.96×0.94×0.36			
				P3	0.88×0.78×0.46	P8	0.82×0.74×0.22			
				P4	1.22×0.92×0.58	P9	0.82×0.74×0.22			
				P5	0.72×0.70×0.32					

B017	D5-68	3×2	N-60°-E	P1 0.60×0.56×0.50	P6 1.26×0.92×0.18
		6.40	3.18	P2 0.52×0.46×0.12	P7 0.26×0.20×0.36
				P3 0.58×0.54×0.30	P8 0.80×0.80×0.20
				P5 0.50×0.44×0.12	P9 0.30×0.26×0.08
B018	E5-61	2×2	N-46°-E	P1 1.08×0.98×0.54	P6 0.70×0.62×0.36
		3.56	3.44	P2 0.82×0.72×0.42	P7 0.92×0.86×0.34
				P3 0.82×0.68×0.68	P8 0.82×0.80×0.52
				P4 0.80×0.70×0.30	
				P5 0.76×0.60×0.32	
B019	E5-62	2×2	N-52°-W	P1 0.70×0.64×0.32	P6 1.01×0.86×0.28
		4.12	3.65	P2 0.88×0.84×0.00	P7 0.86×0.70×0.24
				P3 0.70×0.64×0.28	P8 0.78×0.62×0.34
				P4 0.74×0.74×0.20	
				P5 0.78×0.66×0.14	
B020	E5-40	3×2	N-67°-E	P1 0.42×0.40×0.38	P6 0.66×0.60×0.32
		4.94	3.62	P2 0.74×0.62×0.38	P7 0.66×0.62×0.36
				P3 0.82×0.64×0.38	P8 0.62×0.58×0.24
				P4 0.72×0.60×0.46	P9 0.50×0.36×0.34
				P5 0.58×0.56×0.36	P10 0.60×0.54×0.22
B021	E5-30	3×2	N-11°-E	P1 1.02×0.98×0.70	P6 0.78×0.78×0.40
		5.36	3.86	P2 0.92×0.82×0.66	P7 0.82×0.70×0.46
				P3 1.00×0.94×0.58	P8 0.82×0.80×0.42
				P4 1.00×0.94×0.46	P9 0.84×0.78×0.60
				P5 0.90×0.84×0.40	P10 0.68×0.66×0.40
B024	D5-40	3×2	N-28°-E	P1 0.88×0.82×0.38	P6 0.85×0.80×0.40
		5.60	4.32	P2 0.85×0.80×0.00	P7 0.74×0.65×0.25
				P3 0.88×0.83×0.28	P8 0.75×0.63×0.34
				P4 0.92×0.90×0.38	P9 1.00×0.83×0.34
				P5 1.10×0.42×0.00	P10 1.30×1.00×0.25
B025	D5-19	3×2	N-24°-E	P1 1.04×0.95×0.60	P6 0.64×0.67×0.22
		4.88	4.12	P2 0.84×0.72×0.47	P7 1.03×0.95×0.50
				P3 0.91×0.90×0.50	P8 0.87×0.44×0.38
				P4 0.88×0.80×0.28	
				P5 1.04×0.88×0.72	



3 その他の遺構

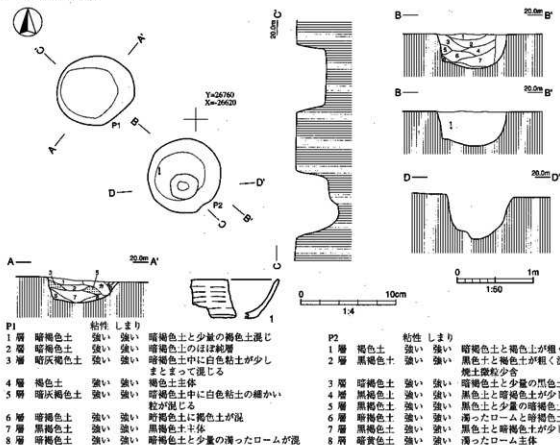


図2-4-133 I010

表2-4-73 I010遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 環	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切り	赤褐色 赤橙褐色	普		

I010

検出地区 E5-52G。台地先端の緩斜面地に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A045・A057・B019等がある。調査時においては、別の土坑として調査したが、同一の遺構として報告する。

遺 構 P1 不整形円のプランで底部はほぼ平坦。斜めに立ち上がる。斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に8層に分層。覆土に粘土を含む層が有る。

P2 不整形円のプランで底部はほぼ平坦。底部に小穴を1基検出した。斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に8層に分層。

遺 物 P1、P2それぞれの覆土から土師器片を中心に少量出土。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の遺構と判断した。用途については、不明な部分が多いが、各土坑の規模、形状が掘立柱建物跡の柱穴の廻方に近似しているため、掘立柱建物跡の一部が検出されたと考えるのが妥当と思われる。

#### (4) 第4群の遺構と遺物

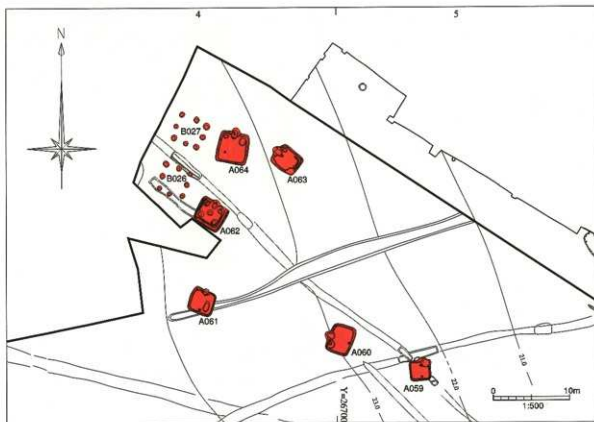


図2-4-134 奈良・平安時代第4群遺構配置図

第4群は、調査区北側に展開する一群で、第3群同様、隣接する境掘遺跡と一帯となる集落である。竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟を検出した。時期的には奈良～平安時代で、平安時代が主体になると思われる。

##### 1 竪穴住居跡

###### A059

検出地区 E5-17G。台地先端に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A060等がある。中世以降の溝と重複関係にある。

遺 構 小形の隅丸方形のプラン。床面は、ロームを踏み固めた床でしっかりとしていた。小穴1基を検出した。出入口施設と考えられる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。一部攪乱を受けているものの、周溝は全周していたと思われる。竈は北壁ほぼ中央に位置する。攪乱と溝の為、大部分が壊され、遺存状況は良くない。袖、天井は検出されず、燃焼部においても火床及び赤化範囲は検出されなかった。

覆土は色調を基本に10層に分層。床面直上に焼土、炭化物を広範囲に検出しており、人為的な埋め戻しが想定される。A～B、a～dは、それぞれ溝の覆土である。

遺 物 床面直上～覆土上層にかけて出土。全体の出土量はそれほど多くない。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

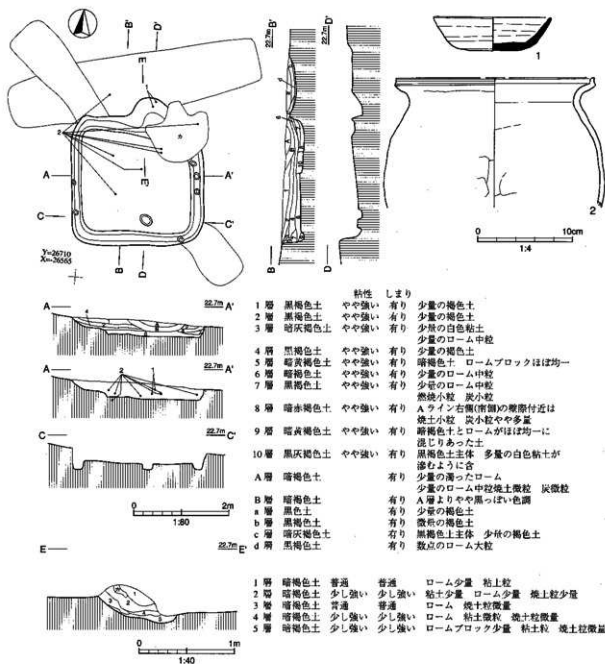


図2-4-135 A059

表2-4-74 A059遺物観察表

(単位mm)

%	種別	法量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	須恵器 坏	123×65×36 ロクロ成形 体部外翻 胴部 下端回転ヘラケズリ 底部中央 回転糸切り接底縁回転ヘラケズリ	暗灰色 青	砂粒	3/4	外面ス付着
2	土師器 甕	(208)×—×(138) 口縁受け口状 上層はつまみ上げられる 外面凹縁状に調整 外面 口縁頸部ココナテ 胴部上半下半ナテヘラケズリ 内面 口縁頸部ココナテ 胴部上半ヘラナテ	橙褐色 青	粗砂流	口縁~ 胴部片	

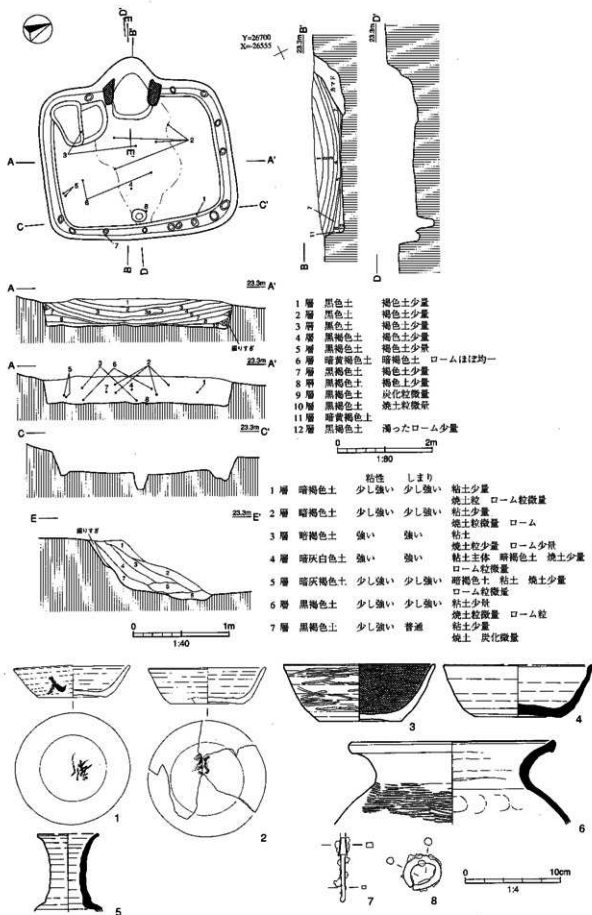


图 2-4-136 A060

表 2-4-75 A060遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	121×70×34 ロクロ成形 体部外傾 胴部下端 回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	完形	墨書 正位「人」 底部外面「新」 口縁内外面ス 付着
2	土師器 杯	122×78×38 ロクロ成形 体部外傾深めの杯 胴部 下選手持ちヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁手持ちヘラケズリ	暗橙褐色 良	砂粒	1/2	墨書「寺」 底部外面
3	土師器 杯	(158)×86×60 ロクロ成形 体部下半やや丸味をもつ 外面 疎らなヘラミガキを全体に加える 内面 密なヘラミガキ 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	2/3	内黒
4	須恵器 杯	(157)×90×55 ロクロ成形 体部下半丸みを持つ 口縁内割ぎ状 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	灰白色 悪	砂粒少	1/2	
5	須恵器 長頸器	(64)×-(R3) ロクロ成形 口縁外反 頸部中央がくびれる	青灰色 良	粗砂流		口縁～ 頸部片
6	須恵器 壺	214×-(R9) 外面 口縁頸部ヨコナア胴部上半タタキ 内面 口縁ヨコナア頸部ヘラナア 胴部上半ナア一部指瀬痕	灰褐色 普	砂粒 小石		口縁～ 胴部片
7	鉄器 鉄線	68×7×5 -×4×3 重量6.9g				
8	鉄器	40×7×7 -×8×8 重量19.2g				

## A060

検出地区 D4-96G。台地先端に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてA059・A061等がある。  
遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面はロームの床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。  
小穴2基を検出した。P1は出入口施設と考えられる。P2は用途不明である。壁はロームの壁で、ほ  
ぼ垂直に立ち上がるが、部分的に斜めに立ち上がる場所もある。周溝は全周する。竈は西壁ほぼ中央に  
位置する。両袖とも残り遺存状況は良好であった。袖の内側が若干焼けていた。燃烧部については若干  
掘り凹められていて、明瞭な火床は検出できないものの、熱を受け、劣化している状況は認められた。  
天井部は断面で明瞭に確認され、竈は自然崩落したと判断した。

覆土は色調を基本に12層に分層（調査中の不手際により一部土説に不備有り）。床面直上に焼土を僅  
かに検出しているが、概ね自然堆積による埋没が想定される

遺物 床面直上～覆土上層にかけて比較的少量に出土。床面直上からの鉄製品の出土が目され  
る。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。

## A061

検出地区 D4-96G。台地先端に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてA060・A062等がある。  
遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面はロームの床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。  
小穴1基を検出した。出入口施設と考えられる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全  
周する。竈は北壁ほぼ中央に位置する。両袖とも残り遺存状況は良好であった。袖の内側が若干焼けて

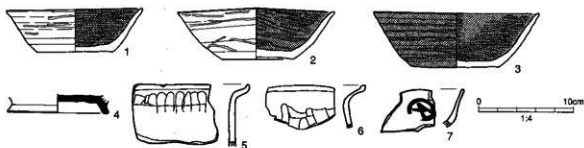
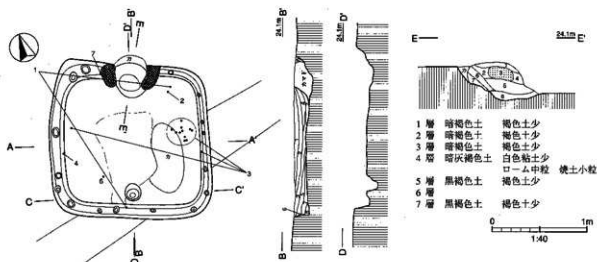


図 2-4-137 A061

表 2-4-76 A061遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	142×80×46 口縁外反体部下半や丸味をもつ口縁口成形 外面 全体疎らにミガキ 胴部下半下端底部中央回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	⑤橙褐色 良	砂粒	略完形	内黒
2	土師器 坏	163×72×55 歪みあり口縁稍円状を呈する 口縁外反口縁口成形体部下半に丸味を持つ 外面 全体体部上半より回転ヘラケズリ後縁らにヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	⑤橙褐色 良	砂粒	4/5	内黒
3	土師器 坏	172×90×60 口縁やや外反口縁口成形 外面 全体疎らにヘラミガキ胴部下端底部回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	黒褐色 良	砂粒	略完形	内黒

4	須恵器 高台付	-×高台部104×残存(19) 高台部「ハ」の字状 底部内面と高台部一部に自然釉	青灰色 良	砂粒	底部片	底部内面高台部 の一部に自然釉
5	土師器 甕	-×-×- 口唇の若干つまみ上げあり ロクロ成形 口縁-ナデ 頸部-擬位のヘラケズリ後ナデ	褐色 普	砂粒を 少量含む	口縁片	
6	土師器 甕	-×-×- 口唇ナデ頸部上半-擬位のヘラケズリ	暗褐色 普	普	口縁片	
7	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 胴部下端-ヘラケズリ	褐色 普	普	口縁片	墨書 契文「□」 体部外面横位

いた。然焼部については若干掘り凹められていて、明瞭な火床は検出できなかった。煙道部は、一部擾乱を受けていた。天井部は断面で確認され、竈は自然崩落したと判断した。

覆土は色調を基本に7層に分層（調査中の不手際により一部土説に不備有り）。概ね自然堆積による埋没が想定される

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。床面直上での内黒の土師器の出土が目立つ。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。

#### A062

検出地区 D4-85G。台地先端に立地する。周辺は奈良・平安時代の遺構として、A063・A064・B026等がある。2軒の住居跡の重複であり、恐らく拡張住居と思われる。新しい住居跡をA062a、古い住居跡をA062bとし、遺構については個々に、遺物、所見についてはまとめて報告する。

#### A062a

遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面はロームと暗褐色土の混合土による貼床で、適度に堅い床で、住居跡中央で硬化面を広い範囲に検出した。出入口施設と考えられる小穴1基を検出したが、b住居跡の周溝と一体化してしまった。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁は中央に位置する。両袖とも残り遺存状況は良好であった。袖の内側が良く焼けていた。然焼部については若干掘り凹められていて、明瞭な火床は検出できなかったが、熱を受けて劣化している状況は認められた。支脚が立ったままの状態出土した。天井部は断面で確認され、竈は自然崩落したと判断した。

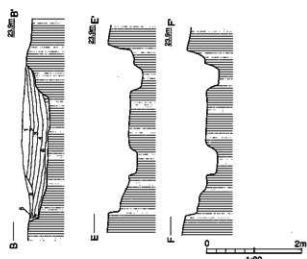
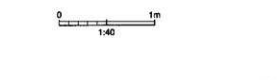
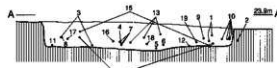
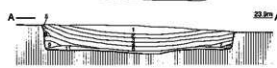
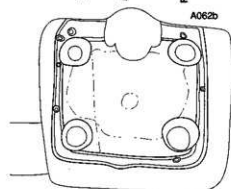
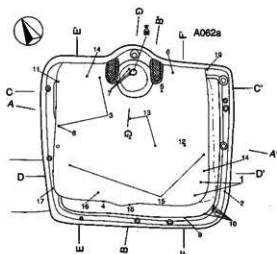
覆土は色調を基本に10層に分層（11層は貼床のセクションである）。概ね自然堆積による埋没が想定される

#### A062b

遺構 小形の隅丸方形のプラン。床面はロームの床で、広い範囲に硬化面を検出した。住居跡中央部の一部で熱を受け赤化している範囲を確認した。小穴4基を検出した。主柱穴と考えられる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は検出されていないが、A062a構築の際に壊されたものと考えられる。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。墨書土器、鉄製品の出土が目目される。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。A062bで検出された赤化範囲は、或いは鍛冶遺構の痕跡か。



層	土質	結核	しまり	土質	土質
1層	黒色土	有り	やや強い	褐色土少量	焼土微粒
2層	暗褐色土	有り	やや強い	ローム小粒少量	炭微粒
3層	暗褐色土	有り	やや強い	褐色土少量	焼土微粒
4層	暗褐色土	有り	やや強い	褐色土少量	炭微粒
5層	暗黄褐色土	有り	やや強い	褐色土少量	焼土微粒
6層	暗褐色土	有り	やや強い	ローム小粒少量	炭微粒
7層	暗黄褐色土	有り	やや強い	褐色土やや多量	炭小粒
8層	暗黄褐色土	有り	やや強い	焼土微粒	ローム中粒やや多量
9層	暗褐色土	有り	やや強い	暗褐色土	ロームほぼ均一
10層	暗黄褐色土	有り	やや強い	濁ったローム少量	
11層	暗黄褐色土	有り	やや強い	焼土微粒	ローム中粒やや多量
a層	褐色土	有り	やや強い	ローム大粒	炭微粒

1層	暗褐色土	やや強い	強い	白色粘土極少量
2層	暗褐色土	やや強い	強い	白色粘土極少量
3層	灰褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 白色粘土
4層	暗赤褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 焼土少量
5層	暗黄褐色土	やや強い	やや強い	白色粘土極少量
6層	暗赤褐色土	やや強い	強い	濁ったローム主体
7層	暗灰褐色土	やや強い	強い	暗褐色土焼土と白色粘土が水化焼土化したものがほぼ均一
8層	暗灰褐色土	やや強い	強い	白色粘土主体 焼土 暗褐色土極少量
9層	暗黄褐色土	やや強い	強い	焼土と白色粘土が赤化 焼土化したものがほぼ均一
10層	暗黄褐色土	やや強い	強い	濁ったローム主体 暗褐色土

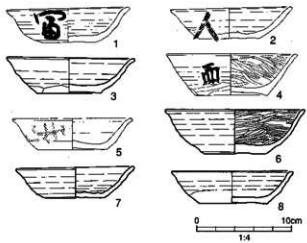


図 2-4-138 A062



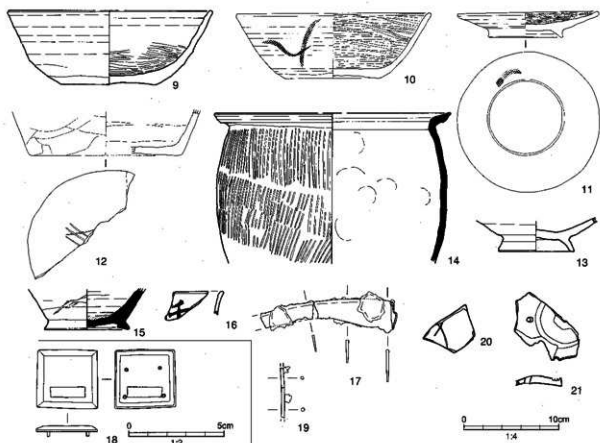


図 2-4-139 A062(2)

表 2-4-77 A062遺物観察表

(単位mm)

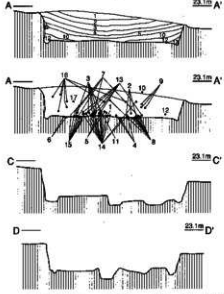
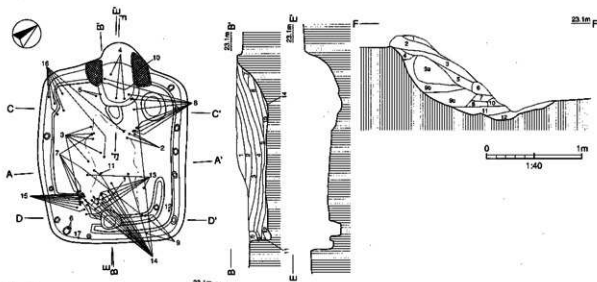
No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	127×56×38 ロクロ口縁外反 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ		橙褐色 良	砂粒 雲母	3/4	墨書「富」 体部外面
2	土師器 坏	126×64×34 口縁外反直みを持つ 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後無調整		橙褐色 普	砂粒 雲母	略定形	墨書「人」 体部外面
3	土師器 坏	133×67×39 ロクロ口縁外反 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ		暗橙褐色 良	砂粒 雲母	略定形	
4	土師器 坏	135×77×44 ロクロ口縁外反直みを持つ 外面 胴部下半手持ち下端ヘラケズリ底部中央ヘラケズリ底縁ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ		暗橙褐色 良	砂粒 雲母	3/4	墨書「西」 体部外面
5	土師器 坏	(124)×(71)×34 口縁外反ロクロ成形 外面 全体器面磨削胴部下端回転ヘラケズリ 底縁回転糸切り後回転ヘラケズリ		黄褐色 悪	砂粒 雲母	1/2	墨書 体部外面横位 「口」
6	土師器 坏	(146)×66×47 口縁外反体部中央に丸みを持つロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ底部中央回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ		暗褐色 普	砂粒 雲母	1/2	底部内面 ケール状付着物
7	土師器 坏	123×62×33 口縁外反ロクロ成形 外面 胴部下端底縁回転ヘラケズリ		橙褐色 普	砂粒 雲母	3/4	

8	土師器 坏	127×74×34 口縁外反底部大きく浅いロクロ成形 外面 胴部下端底部下端ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 雲母	略完形	
9	土師器 鉢	(214)×101×80 ロクロ成形 外面 胴部下端底部回転ヘラケズリ	暗茶褐色 普	砂粒多 雲母	1/2	
10	土師器 鉢	(203)×100×69 ロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ底部中央回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 普	砂粒 雲母	2/3	墨書「□」 体部外面側位
11	土師器 高台付皿	146×79×28 高台中央括れ下端でやや外反 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒 雲母	完形	墨書「一」 底部外面
12	須恵系 土師器 壺	—×(162)×(49) 外面 胴部下端ヘラケズリ 内面 胴部下端ナデ	砂黒褐色 ◎暗褐色 普	砂粒 小石	底部片	墨書「□」 底部外面
13	土師器 高台付坏	—×80×(36) 高台部接合部との境に段を持つ断面「ハ」の字状ロクロ成形 外面 底部中央回転ヘラケズリか?	橙褐色 悪	砂粒 雲母	1/2	
14	須恵系 土師器 壺	(248)×—×(161) 口縁外反折り返し 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半タタキ目 内面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半ヘラナデ及び一部指頭圧痕あり	暗灰色 普	砂粒 小石	口縁～ 胴部片	
15	須恵系 高台付坏	—×(90)×(43) 高台部「ハ」の字状 ロクロ成形 外面 胴部下端底部回転ヘラケズリ	灰白色 良	砂粒 小石	底部片	内面自然軸
16	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 内面 丁寧なミガキを施す	褐色 普		口縁片	墨書「□」 体部外面
17	鉄器 鎌	143×17.5×2 —×24.5×3 —×34×3 重量43.4g				
18	青銅器 返方	32×31×5 重量7.0g				
19	鉄器 紡錘車 志輪?	52.5×3×2.5 —×3×3.5 重量2.7g				
20	土師器 壺	—×—×—	黒褐色	普	胴部片	墨書「□」 胴部内面?
21	土師器 甕	—×—×— 中央及び周辺2ヶ所に焼成前の穿孔あり ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ	褐色 普	普	1/5	

#### A063

検出地区 D4-94G。台地先端に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構としてA063・A064等がある。  
遺 構 小形の隅丸長方形のプラン。床面はロームの床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。小穴2基を検出した。P1は出入口施設と考えられる。P2は用途不明である。住居跡南側で、凹んでいる地点を検出。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は西壁ほぼ中央に位置する。両袖も残り遺存状況は良好であった。袖の内側が若干焼けていた。燃焼部については若干掘り凹められていて、明瞭な火床は検出できなかった。明確な天井部は検出できず、竈は壊されたものと考えられる。

覆土は色調を基本に14層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。



	粘性	しまり
1層 暗灰褐色土	普通	強い
2層 暗灰褐色土	普通	強い
3層 暗灰褐色土	普通	強い
4層 暗黄灰褐色土	やや強い	強い
5層 暗灰褐色土	やや強い	強い
6層 灰褐色土	やや強い	強い
7層 暗褐色土	やや強い	強い
8層 暗褐色土	やや強い	強い
9a層 灰褐色土	やや強い	強い
9b層 暗灰褐色土	普通	やや強い
9c層 灰赤褐色土	普通	やや強い
10層 灰褐色土	やや強い	強い
11層 暗褐色土	やや強い	強い
12層 暗褐色土	やや強い	強い

暗褐色土 濁った白色粘土  
 暗褐色土 濁った白色粘土  
 暗褐色土 濁った白色粘土少量  
 濁ったローム 濁った白色粘土少量  
 暗褐色土 濁った白色粘土少量  
 暗褐色土 濁った白色粘土  
 暗褐色土 白色粘土少量  
 暗褐色土 白色粘土少量  
 暗褐色土 白色粘土  
 暗褐色土少量 濁った白色粘土  
 暗褐色土少量 濁った白色粘土  
 暗褐色土少量 赤色粘土化した  
 暗褐色土少量 濁った白色粘土  
 暗褐色土 白色粘土少量  
 ローム大粒  
 暗褐色土 濁った白色粘土少量

- 1層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量
- 2層 黒褐色土 やや強い 有り 褐色土少量
- 3層 黒褐色土 やや強い 有り 褐色土少量
- 4層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量
- 5層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量
- 6層 黒黄褐色土 やや強い 有り 黒褐色土とロームほぼ均一
- 7層 黒褐色土 やや強い 有り 濁ったローム
- 8層 暗灰褐色土 やや強い 有り 濁ったローム少量
- 9層 暗黄褐色土 やや強い 有り 暗褐色土主体
- 10層 暗褐色土 やや強い 有り 褐色土少量
- 11層 暗褐色土 やや強い 有り 暗褐色土とロームブロックほぼ均一
- 12層 黒褐色土 やや強い 有り 褐色土少量
- 13層 黒黄褐色土 やや強い 有り 黒褐色土と少量のロームほぼ均一
- 14層 黒黄褐色土 強い 有り 白色粘土少量

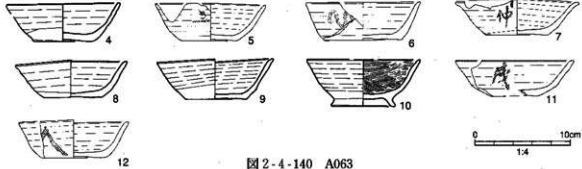
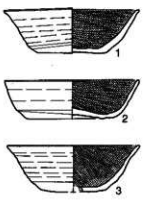


図2-4-140 A063

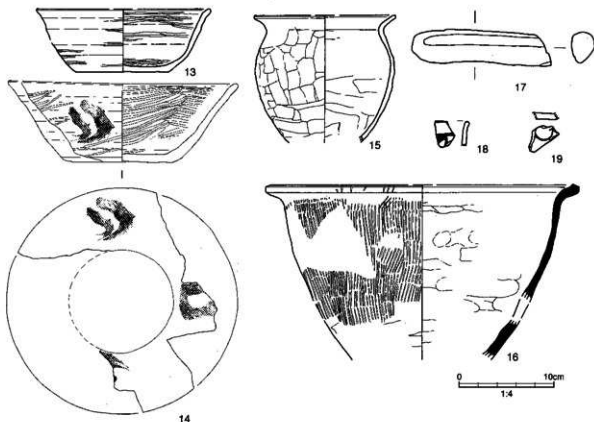


図 2-4-141 A063(2)

表 2-4-78 A063遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	142×72×46 口縁外反体部下半に丸みを持つロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色 黒	砂粒	略完形	内黒
2	土師器 坏	141×90×41 断面台形状底部「上げ底」ロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 黄	砂粒	4/5	内黒
3	土師器 坏	(138)×(70)×50 口縁外反体部上半くびれるロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央不明底縁回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	⑤暗褐色 黄	砂粒	1/2	内黒
4	土師器 坏	118×62×40 口縁内湾ロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	暗褐色 黄	砂粒 金雲母多	3/4	
5	土師器 坏	115×58×40 体部外傾断面下半にや丸みを持つ ロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	暗褐色 黄	砂粒 金雲母	4/5	墨書「□」 体部外面
6	土師器 坏	(118)×80×40 体部外傾断面台形状ロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	1/3	墨書「□」
7	土師器 坏	127×65×39 口縁外反丸みを持つロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底部回転ヘラケズリ	橙褐色 黄	砂粒 金雲母	4/5	墨書「□」 体部外面
8	土師器 坏	116×60×40 口縁外反丸みを持つロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 黄	砂粒 金雲母	略完形	

9	土師器 坏	123×64×43 体部外傾ロクロ成形 外面 胴部下端～底部ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 金雲母	変形	
10	土師器 高台付坏	(118)×高台径67×50 高台部「ハ」の字状 体部外傾 ロクロ成形 内面 細かなヘラミガキ 一部爪で引っ掻いた様な跡あり	橙褐色 青	砂粒 金雲母	1/3	
11	土師器 坏	(123)×(50)×38 体部外傾下半に膨らみを持つロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底縁ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 金雲母	口縁～ 底部片	墨書「□」 体部外面
12	土師器 坏	114×66×40 口縁外反やや外反 ロクロ成形 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	3/4	墨書「□」 体部外面
13	土師器 坏	(182)×96×67 口縁外反ロクロ成形内外ともヘラミガキが加えられる 外面 胴部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	1/2	
14	土師器 鉢	(236)×114×87 口縁外反 大型の坏 ロクロ成形 外面 胴部下半回転ヘラケズリ底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 全体遽らにヘラミガキ加えられる 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 青	砂粒多 雲母	1/2	墨書「□」 体部外面3ヶ所 「□□□」
15	土師器 小型壺	(147)×—×(135) 頸部「く」の字状胴上半に膨らみを持つ 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半タテヘラケズリ下半ヨコヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半下半ヘラナデ	暗赤褐色 青	砂粒	1/2	
16	須恵器 壺	(318)×—×(187) 口縁外反内側に折り返し 輪槽み 外面 口縁頸部ヨコナデ胴部上半下半タテヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナデ胴部ヘラナデ及びナデ 一部指痕圧痕あり	灰色 青	砂粒 小石	口縁～ 胴部片	
17	石器					
18	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書 体部外面「□」
19	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形底部回転ヘラ切り	褐色 青	青	底部片	墨書 体部外面「□」

遺物 床面直上～覆土中層にかけて多量に出土。墨書土器、内黒の土師器の出土が目立つ。  
所見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。周溝の配置から、拡張住居と考えられる。

A064

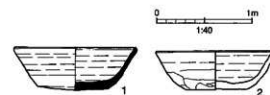
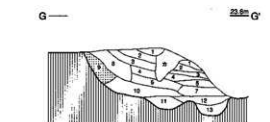
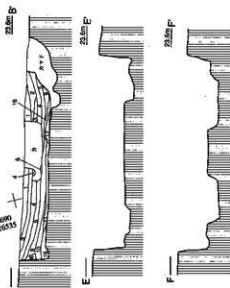
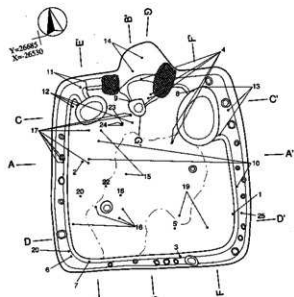
検出地区 D4-84G。台地先端に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A063・B025・B026等がある。

遺構 中形の隅丸方形のプラン。床面はロームの床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。小穴3基を検出した。用途は不明である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は北壁ほぼ中央に位置する。両袖とも残り遺存状況は良好であった。袖の内側が若干焼けていた。燃焼部については若干掘り凹められていて、明瞭な火床は検出できなかった。断面にて明確な天井部は検出した。竈は自然崩落したものと考えられる。

覆土は色調を基本に17層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。墨書土器、内黒の土師器の出土し、鉄製品も多く出土している。

所見 出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と判断した。



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	黒褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 ローム小粒多量 焼土微粒 炭微粒 白色粘土やや多量
2層	暗灰褐色土	強い	有り	ローム小粒やや多量 焼土微粒 褐色土少量
3層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム大、中、小粒 焼土微粒 褐色土少量
4層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 ローム中粒やや多量 ローム大粒散点 焼土微粒 炭微粒
5層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土やや多量 ローム中粒少量 焼土小粒 炭微粒
6層	黄褐色土	やや強い	有り	少量のロームほぼ均一
7層	暗黄褐色土	やや強い	有り	褐色土とロームがほぼ均一
8層	黒褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 ローム中粒 焼土微粒
9層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 ローム中、大粒 焼土小粒散点 炭小粒
10層	黒褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 ローム中粒 焼土微粒散点 炭微粒散点
11層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム少量 ローム中粒 焼土小粒散点
12層	黄褐色土	やや強い	有り	ロームブロック主体 褐色土少量
13層	黒褐色土	やや強い	有り	ローム少量
14層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土とロームがほぼ均一
15層	黒褐色土	やや強い	有り	褐色土やや多量 ローム大粒散点
16層	暗灰褐色土	強い	有り	暗褐色土主体 白色粘土少量 ローム中粒 焼土小粒 炭微粒
17層	暗灰褐色土	強い	有り	暗褐色土主体 白色粘土多量 焼土小粒 炭小粒 ローム中粒

層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗灰褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 濡った白色粘土少量がほぼ均一
2層	暗灰褐色土	強い	強い	暗褐色土 白色粘土がほぼ均一 ほぼ均一
3層	暗灰褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 濡った白色粘土が少量ほぼ均一
4層	暗褐色土	やや強い	強い	白色粘土極少
5層	暗褐色土	強い	強い	暗褐色土 褐色土 白色粘土極少
6層	暗赤褐色土	やや強い	強い	暗褐色土主体 焼土、焼土粒やや多
7層	黒褐色土	やや強い	強い	黒土 暗褐色土 焼土微粒散点
8層	灰褐色土	やや強い	強い	濡った白色粘土 白色粘土 白色粘土ブロック 暗褐色土極少
9層	暗赤灰色土	やや強い	強い	白色粘土主体
10層	赤灰色土	やや強い	強い	白色粘土
11層	暗黄褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 濡ったローム 白色粘土極少
12層	暗褐色土	やや強い	強い	黒色土少許 白色粘土極少
13層	暗褐色土	やや強い	強い	濡ったローム 白色粘土少量

図 2-4-142 A064

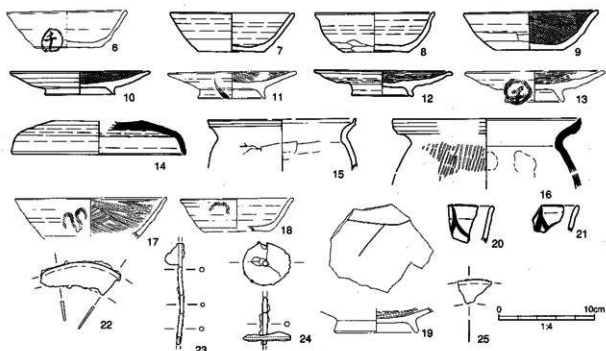


図 2-4-143 A064(2)

表 2-4-79 A064遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	128×74×45 口縁やや内湾ロクロ 胴部下端～底部～回転ヘラケズリヘラ切り後ヘラケズリ?	暗灰褐色 青	砂粒 雲母	完形	
2	土師器 坏	124×64×41 歪みを持つ口縁やや外反ロクロ体部下半やや丸味をもつ口縁内面に少量 のケル状付着物 胴部下端～ヘラケズリ 底部～回転糸切り後手持ちヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	完形	
3	土師器 坏	(121)×60×46 歪みを持つ口縁やや外反体部丸みを持つロクロ 胴部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転ヘラケズリ	暗橙褐色 青	砂粒	2/3	墨書 体部外面「□」
4	土師器 坏	125×70×38 口縁やや外反ロクロ 胴部下端～ヘラケズリ 底部～回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐色 青	砂粒	略完形	
5	土師器 坏	116×63×36 歪みを持つロクロ 胴部下端～回転ヘラケズリ 底部～ヘラ切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 雲母	完形	
6	土師器 坏	125×68×40 体部外傾ロクロ 胴部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 雲母	3/4	墨書 体部外面「㊦」
7	土師器 坏	129×70×42 口縁内湾ロクロ 胴部下端～回転ヘラケズリ 底部～回転ヘラケズリ	暗赤褐色 悪	砂粒多	完形	
8	土師器 坏	124×66×42 口縁外反体部丸みを持つ(鉢か碗のような形状) 底部～回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	略完形	
9	土師器 坏	138×71×42 口縁外反ロクロ胴部下半下端底部～回転ヘラケズリ 内面は密なヘラミガキ	暗橙褐色 良	砂粒 雲母	3/4	内照

10	土師器 高台付皿	147×高台径74×25 ロクロ高台部ゆるやかな「ハ」の字状 内面は密なヘラミガキ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	砂粒	雲母	1/2	内黒
11	土師器 高台付皿	134×高台径71×29 高台部ゆるやかな「ハ」の字状 底部中央一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ 底部外面墨? タール? 付着	暗褐色 良	砂粒 雲母	略光形	墨書「□」 体部外面
12	土師器 高台付皿	143×高台径64×27 高台部下端で外反ロクロ 胴部下端一回転ヘラケズリ(失敗した?) 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 雲母	2/3	
13	土師器 高台付皿	(142)×(63)×33 高台部「ハ」の字状ロクロ 胴部ト端底部一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	1/2	墨書「㊦」 体部外面
14	須恵器 蓋	蓋径(182)××(36) 蓋口縁ゆるやかに開くロクロ 蓋体頂部回転ヘラケズリ	灰茶褐色 良	砂粒多	1/4	
15	土師器 小形壺	(154)××(55) 口縁やや外反上端つまみ上げられる 外面凹線状の調整 外面 口縁頸部-ヨコナデ胴部上半ヘラケズリ 内面 口縁頸部-ヨコナデ胴部上半ヘラケズリ	暗赤褐色 暗褐色 良	砂粒 小石	口縁片	
16	須恵器 壺	(198)××(75) 口縁受け口状 上端はつまみ上げられる 外面 口縁頸部-ヨコナデ胴部上半-タタキ 内面 口縁頸部-ヨコナデナデ一部指頭圧痕	灰茶褐色 善	砂粒 小石	口縁片	
17	土師器 坏	(158)××(43) 口縁外反ロクロ 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	褐色 良	砂粒	口縁片 体部片	墨書「□」 体部外面
18	土師器 坏	(117)×(70)×35 口縁外反ロクロ胴部下端ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色 橙褐色 悪	砂粒	1/3	墨書「□」 体部外面
19	土師器 高台付坏	××高台径86×(26) 高台部「ハ」の字状ロクロ 底部中央一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒 金雲母	底部片	線刻「□」 底部内面
20	土師器 坏	×××× ロクロ成形	淡褐色 善	善	口縁片	墨書 体部外面正位 「人」
21	土師器 坏	×××× ロクロ成形	赤褐色 善	善	口縁片	墨書 体部外面正位 「人」
22	鉄器 鎌	84×20.5×3 ×28×2 重量21.1g				
23	鉄器 紡錘車 志軸?	107×5×4.5 ×3.5×3.5 ×4.5×4.5 重量8.2g				
24	鉄器 紡錘車	50.5×5×5 重量20.7g				
25	鉄器 鎌	36×24×1 重量3.7g				



表 2-4-80 奈良・平安時代竪穴住居跡第4群一覽表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況	築城施設・位 周溝・備考
A059	E5-17G	隅丸方形 2.8×2.7×0.32 N-5°-W 床面直上～覆土上層にかけて出土 それほど多くない	床面 ロームを踏み固めた床でしっかりと している 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本として10層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 全周 周幅 0.22m 主柱穴 検出されなかった
A060	D4-96G	隅丸方形 4.0×3.36×0.6 N-64°-W 床面直上～覆土上層にかけて比較的 多量に出土	床面 ロームの床で住居跡中央で硬化面を 広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に12層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	竈 住居跡西壁ほぼ中央 周溝 全周 周幅 0.18m 主柱穴 検出されなかった
A061	D4-96G	隅丸方形 3.4×3.2×0.3 N-21°-E 床面直上～覆土上層にかけて多量に 出土	床面 ロームの床で住居跡中央で硬化面を 広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に7層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 全周 周幅 0.24m 主柱穴 検出されなかった
A062 a,b	D4-85G	隅丸方形 4.00×3.56×0.52 N-29°-E 床面直上～覆土上層にかけて多量に 出土	床面 ロームと暗褐色土の混合土による粘 床で過度に堅い 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に10層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 全周 周幅 0.16m (a) 主柱穴 4本 (b) 拡張住居
A063	D4-94G	隅丸長方形 4.00×3.10×0.60 N-51°-W 床面直上～覆土上層にかけて多量に 出土	床面 ロームの床で住居跡中央で硬化面を 広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に14層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	竈 住居跡西壁ほぼ中央 周溝 全周 周幅 0.16m 主柱穴 検出されなかった 拡張住居
A064	D4-84	隅丸方形 4.14×4.13×0.60 N-14°-E 床面直上～覆土上層にかけて多量に 出土	床面 ロームの床で住居跡中央で硬化面を 広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に17層に分層概ね自然堆積に よる埋没が想定される	竈 住居跡北壁ほぼ中央 周溝 全周 周幅 0.22m 主柱穴 不明

## 2 掘立柱建物跡

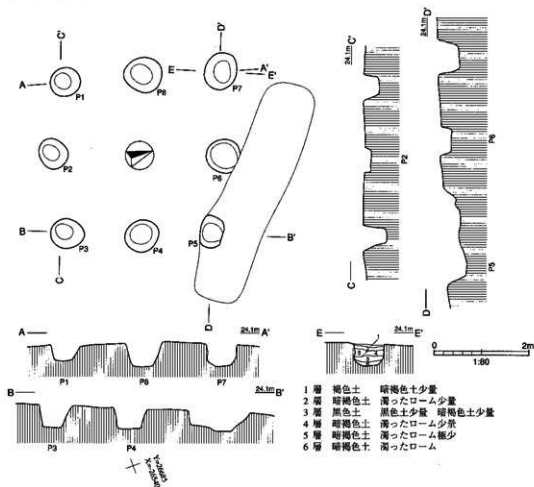


図 2-4-144 B026

### B026

検出地区 D4-73G。台地先端に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A062・A064・B027等がある。

遺構 桁行2間(3.45m)×梁行2間(3.38m)桁行の主軸方位はN-70°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の形状は不整の円形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土しなかったが、遺構の規模、形状及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

### B027

検出地区 D4-73G。台地先端に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A062・A064・B026等がある。

遺構 桁行2間(3.50m)×梁行2間(3.34m)桁行の主軸方位はN-65°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡で、各柱穴の形状は不整の円形である。各柱穴ともしっかりと掘り込まれている。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土しなかったが、遺構の規模、形状及び覆土の観察等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。B026と規模、主軸方位等類似点が多い。

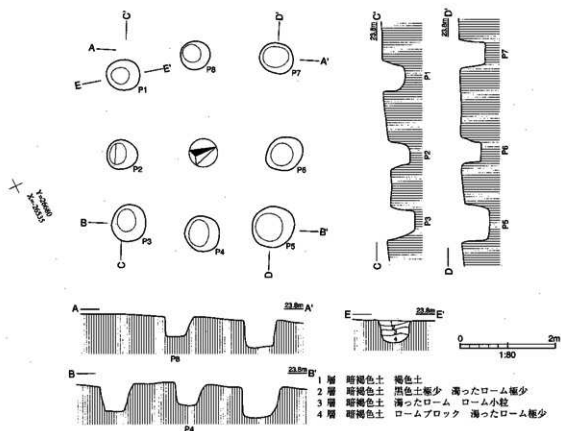


図 2-4-145 B027

表 2-4-81 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出区	間 数		主軸方位	柱穴規模 (長軸×短軸×深さ)	備 考
		桁 行	梁 行			
B026	D4-73	2×2	3.45	N-70°-E	P1 0.63×0.60×0.30	P6 0.70×0.68×0.22
		3.45			3.38	P2 0.66×0.60×0.14
					P3 0.70×0.64×0.50	P8 0.77×0.72×0.50
					P4 0.74×0.64×0.42	
					P5 0.68×0.48×0.32	
B027	D4-73	2×2	3.50	N-65°-E	P1 0.68×0.66×0.50	P6 0.82×0.70×0.42
		3.50			3.34	P2 0.64×0.60×0.44
					P3 0.78×0.74×0.56	P8 0.64×0.60×0.40
					P4 0.74×0.74×0.50	
					P5 0.96×0.84×0.64	

## (5) 遺構外出土遺物

## 1 土器



図 2-4-146 遺構外出土遺物

表 2-4-82 遺構外出土遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	116×62×34 ロクロ成形		褐色 青	青		スス付着
2	土師器 坏	122×72×38 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ		褐色 青	青		
3	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形		褐色 青	緻密	口縁片	墨書「口」 体部外面
4	土師器 坏	(67)×40×27 ロクロ成形 外面 胴部上半～下半ヘラケズリ		褐色 青	青	1/4	

5	土師器 坏	—×—×(38) ロクロ成形 外面 底部底縁回転糸切り 体部下端ヘラケズリ	橙褐色 普	普	口縁片 ~ 底部片	
6	土師器 甕	(194)×—×(142) ロクロ成形 外面 口縁~頸部ナデ 胴部上半 腹位のヘラケズリ	赤褐色 赤灰褐色 普	普	口縁片	宮総型?
7	土師器 坏	138×74×47 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ 内面 丁寧なミガキを施す	赤褐色 赤黒色 普	普	1/3	墨書「人」 体部外面正位 スス付着 内黒
8	須恵器 甕	ロクロ成形	灰色 良	緻密	口縁片	
9	土師器 坏	120×62×38 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転ヘラ切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 普	并	1/4	
10	土師器 高台付坏	(124)×82×55 ロクロ成形 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切り	赤褐色 赤黒褐色 普	普	体部片 ~ 底部片	
11	土師器 坏	80×50×24 ロクロ成形 外面 底部全体回転糸切り	褐色 普	普	完形	口縁内外面に スス付着 灯明皿として 使用
12	土師器 坏	(127)×60×34 ロクロ成形 外面 底部回転ヘラケズリ 体部下端ヘラケズリ	暗褐色 普	普	口縁片 ~ 底部片	墨書「口」
13	土師器 高台付甕	—×—×(30) ロクロ成形 外面 底部回転糸切り 体部下端ヘラケズリ 内面 丁寧なヘラミガキ	褐色 普	普	体部片 ~ 底部片	
14	土師器 坏	114×60×37 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラケズリ	褐色 普	普	1/4	
15	緑釉陶器	—×98×20 ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	灰褐色 ~ 緑 并	良	底部片	成形時の 失敗か? 全体的に 歪んでいる
16	土師器 坏	—×90×— ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体静止糸切り後底縁ヘラケズリ調整	赤褐色 良	普	底部片	墨書「寺」 底部外面 赤彩
17	土師器 鉢	ロクロ成形 外面 口縁ヘラナデ 胴部上半腹位のヘラケズリ 下半ヘラケズリ	赤褐色 赤褐色 普	普	口縁 ~ 体部片	
18	土師器 高台付甕	(136)×72×32 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	褐色 普	普	1/4	
19	須恵器 坏	—×80×16 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラ切り	赤褐色 赤黒褐色 普	普	底部片	ヘラ書 戳文 「×」底部外面



図 2-4-147 遺構外出土遺物 墨書・刻書

表 2-4-83 遺構外出土遺物観察表(墨書・刻書)

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
20	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面
21	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面
22	土師器 坏	ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	暗褐色 青	青	体部片 ~ 底部片	墨書「井」 体部外面
23	土師器 坏	ロクロ成形 外面 底部中央回転糸切り後底縁ヘラケズリ	褐色 青	青	底部片	線刻「□」 体部外面
24	土師器 坏	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ	砂橙褐色 砂淡褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部内面
25	土師器 坏	ロクロ成形	砂橙褐色 砂淡褐色 青	青	体部片	墨書「記号」 体部外面
26	土師器 坏	外面 胴部下端ヘラケズリ 底部底縁ヘラケズリ	褐色 青	青	底部片	墨書「□」 体部外面
27	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面

28	土師器 坏	ロクロ成形	暗褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面
29	土師器 坏	ロクロ成形	暗褐色 青	青	体部片	墨書「人」 体部外面
30	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面
31	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「冨」 体部内面
32	土師器 坏	ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切り	橙褐色 青	青	底部片	墨書「田？」 体部内面
33	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「冨」 体部外面
34	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「×」 体部外面正位
35	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面
36	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面
37	土師器 坏	ロクロ成形	橙褐色 青	青	口縁片	墨書「冨」 または「冨」 体部外面正位
38	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書 体部外面
39	土師器 坏	ロクロ成形 外面 底部全体回転ヘラ切り	褐色 青	青	底部片	墨書 底部内面
40	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面
41	土師器 坏	ロクロ成形 内面 丁寧なミガキ	やや褐色 ◎黒色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面 内黒
42	土師器 坏	ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面
43	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「□□？」 体部外面
44	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面
45	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面

2 土製品 石製品

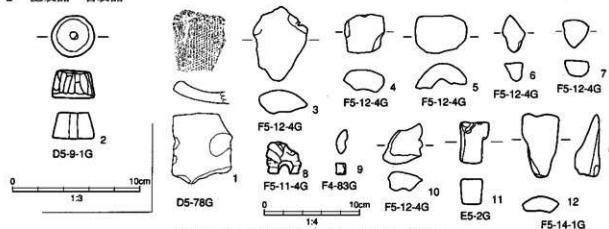


図2-4-148 遺構外出土遺物 土製品・石製品

表2-4-84 遺構外出土遺物観察表(土製品・石製品)

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	瓦	(70)×-×-	赤灰褐色 赤橙褐色 青	青	破片	
2	土製品 紡錘車	全体 ヘラケズリ調整を施す	褐色 青	青	完形	
3	土製品 輪	羽口先端部 先端部に鉄分の吸着有り 全体 手捏ね	赤褐～ 暗褐 赤灰褐～ 橙褐色 黒	粗	破片	
4	土製品 輪	全体 手捏ね	赤灰褐色 赤橙褐色 黒	粗	破片	
5	土製品 輪	全体 手捏ね	褐色 黒	粗	破片	
6	土製品 輪	全体 手捏ね	赤灰褐色 赤橙褐色 黒	粗 砂粒 多く含む	破片	
7	土製品 輪	全体 手捏ね	赤灰褐色 赤橙褐色 黒	粗 砂粒 多く含む	破片	
8	石製品 紡錘車		青灰色		破片	
9	土製品 紡錘車	上下2方向から穿孔	褐色 青	青	破片	
10	土製品 輪	全体 手捏ね	赤灰褐色 赤橙褐色 黒	粗	破片	
11	石製品 砥石	(44)×(19)×(26)	灰白色			
12	土製品 輪	全体 手捏ね	赤灰褐色 ～ 赤褐色 赤橙褐色 黒	粗		



### 3 鉄製品

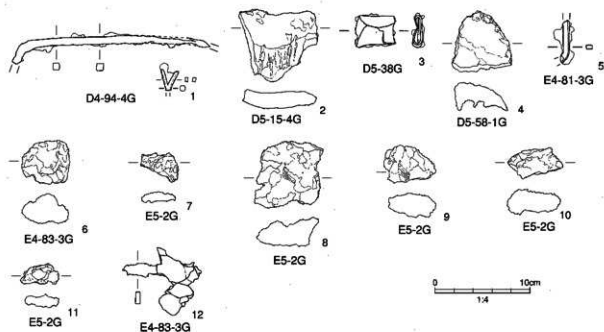


図2-4-149 遺構外出土遺物 鉄製品

表2-4-85 遺構外出土遺物観察表(鉄製品) (単位mm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄器 鉄+鉄鍍	209×7×7 209×7.5×7 重量 51.8g 22×12×55 22×4.5×5.5 重量 4.1g				D4-94 -4G
2	鉄製品 鉄滓	80×72×20 重量 290.7g 大きめの木炭痕を有する				D5-15 -4G
3	鉄器 不明	43.5×33.5×10 重量 18.0g				D5-38G
4	鉄製品 鉄滓	64×64×30 重量 158.9g 木炭及び木炭痕を有する 炉壁付着				D5-58 -1G
5	鉄器 不明	46×6×4 重量 8g				E4-81 -3G
6	鉄製品 鉄滓	50×45×32 重量 86.9g 少量の木炭及び木炭痕を有する				E4-83 -3G
7	鉄製品 鉄滓	40×29×12 重量 16.1g 裏面に木炭痕				E5-2G
8	鉄製品 鉄滓	67×67×31 重量210.5g 木炭痕を有する 砂鉄鉄鍍付着				E5-2G
9	鉄製品 不明	53×39×26 重量 70.6g 木炭痕あり 鉄鍍付着				E5-2G

10	鉄製品 鉄滓	51×30×27 重量 46.8g 鉄踏付着				E 5-2 G
11	鉄製品 鉄滓	39×20×14 重量13.3g 木炭痕を有する				E 5-2 G
12	鉄器 不明	89×13×5.5 重量 46.5g				E 4-8 3 -3 G

表 2-4-86 奈良・平安時代土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考
D002	F4-72G	隅丸方形 2.10×1.10×0.72 N-57'-W	色調基本に8層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	土坑墓
		底部はほぼ平坦で二段構成 壁はほぼ 垂直に立ち上がる一部オーバーハング	覆土中から小破片 2点出土	
D003	F5-12G	不整形形 0.36×0.32× N-*	色調を基本に3層に分層	鍛冶工房
		両陥形状の粘土をめぐらし赤化してい る 底部は狭くほぼ平坦	輪の羽口出土	
D004	E5-67G	楕円形 1.84×0.80 N-45'-W	色調を基本に3層に分層 覆土最上層から焼上検出	鍛冶関連遺構 あるいは土師器焼成坑
		底部はほぼ平坦 壁はなだらかに立ち 上がる	覆土中から少量出土	
D005	E5-67G	楕円形 4.14×0.30 N-50'-E	色調を基本に7層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	鍛冶関連遺構
		底部はほぼ平坦 壁はなだらかに立ち 上がる	覆土中から少量出土 輪の羽口 2点出土	
D006	E5-59G	隅丸方形 2.96×2.30×0.46 N-50'-E	色調を基本に9層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	鍛冶関連遺構 あるいは土師器焼成坑
		底部はほぼ平坦 壁はなだらかに立ち 上がる	床面直上から土師器の坏出土 その他覆土中から少量出土	
D007	E5-67G	不整形形 0.48×0.16 N-0'-	色調を基本に2層に分層	用途不明
		底部はほぼ平坦壁はなだらかに出土	遺物は出土していない	
D008	E5-48G	不整形形 1.10×0.94×0.19 N-57'-W	色調を基本に3層に分層 劣化物を多く含む	炭焼窯か?
		底部はほぼ平坦 壁は斜めに直線的に 立ち上がる	遺物は出土していない	
D009	E5-37G	不整形形 1.14×1.20×0.20 N-42'-W	色調を基本に3層に分層 劣化物を多く含む	炭焼窯か?
		底部はほぼ平坦 壁は斜めに直線的に 立ち上がる	覆土中から小破片 1点出土	
D010	E5-47G	不整形形 1.00×1.04×0.08 N-43'-W	色調を基本に2層に分層	炭焼窯か?
		底部はほぼ平坦 壁は斜めに直線的に 立ち上がる	遺物は出土していない	

D011	E4-74G	不整形 5.07×4.18×0.66 —	色調を基本に11層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	廃棄土坑 2基の重複か？ 第2群
		しっかりとした掘込みを持ち底部はほぼ平坦	底面直上～覆土上層にかけて多量に出土 仏教関連の墨書土器 鉄製品出土	
D012	E4-73G	隅丸方形 0.92×0.86×0.16 N-54°-W	人為的な埋め戻しが想定される	廃棄土坑
		浅い凹み状の土坑 底部はほぼ平坦 斜めに立ち上る	底面直上～覆土上層にかけてぎっしりと詰まった状況で出土	
D013	E4-94G	楕円形 4.14×2.86×0.86 N-34°-E	色調を基本に15層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	廃棄土坑
		しっかりとした掘込みを持ち底部はほぼ平坦 壁は斜めに立ち上る	底面直上～覆土上層にかけて多量に出土 仏教関係の墨書土器出土	
D014	E4-84G	楕円形 2.43×2.03×0.47 N-1°-W	色調を基本に7層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	廃棄土坑 覆土上層で粘土を検出
		しっかりとした掘込みを持ち底部はほぼ平坦 壁は斜めに立ち上る	覆土下層～覆土上層にかけて比較的少量に出土 仏教関連	
I011 P1	E5-52G	不整形 1.00×0.90×0.20 N-90°-E	色調を基本に8層に分層 覆土中に粘土を含む	掘立柱建物跡の一部か？ 第3群
		しっかりとした掘込みを持ち底部はほぼ平坦 壁は斜めに立ち上がる	覆土中から少量出土	
I011 P2	E5-53G	不整形 0.98×0.92×0.44 N-89°-E	色調を基本に8層に分層	掘立柱建物跡の一部か？ 第3群
		しっかりとした掘込みを持ち底部はほぼ平坦 小穴1基有り斜めに立ち上る	覆土中から少量出土	

## 第3章 考察

向境遺跡の整理を終え、以下、時代を追って成果と課題を中心に、全体のまとめとして若干の考察を行いたい。

### 第1節 縄文時代

向境遺跡の縄文時代の遺構としては、早期の炉穴11基、その他の遺構9基、早期を中心とした遺物包含層1ヶ所が調査された。

#### 第1項 早期

炉穴について 調査された炉穴については、遺物が出土した炉穴が無いため確証を欠くが、早期の遺物包含層調査区域と重なって検出され条痕文期の遺物が少なからず出土していること、これまでの周辺遺跡の調査、整理の成果から条痕文期、野島式期～縄ヶ島台式期の所産と思われる(註1)。立地としては台地先端部及び幾分傾斜が始まった地点に立地している。このことは、隣接する役山東遺跡でも見受けられる傾向であった。形状としては、浅い凹み上のもので、しっかりと掘り込まれているものとの二者が有り、このことも周辺遺跡である栗谷遺跡、役山東遺跡との成果とほぼ一致する(註2)。相違点として上げられるのは、栗谷遺跡では、野島式期の遺物が多かったのに対して、向境遺跡では縄ヶ島台式期の遺物が多かったことである。両遺跡は一つの谷津を挟んでそれぞれ対岸に位置する遺跡であるが、時期による占地の違いを見ることができる。栗谷遺跡では、形状の違う二者について時期差の可能性を示唆したが、このことは今回の成果においても、遺物による確証を得ることができなかった。

早期の出土遺物について 燃糸文系土器 今回の向境遺跡の縄文時代早期の調査で注目すべきは、燃糸文期及びそれに平行あるいは後続するとされる無文期の遺物がまとめて出土したことである。燃糸文期の遺物は、所謂、第5様式とされる花輪台期の遺物が中心を占めた。以下、花輪台期の遺物を中心に若干述べていきたい(註3)。向境遺跡では、花輪台式土器が出土の中心となるものの、花輪台式に併行あるいは若干、先行する稲荷原式段階の遺物が少量出土している。特徴的な遺物を再度掲載するが、花輪台式土器は、口縁部下端の文様区画の手法として原体押圧を行うが、今回、向境遺跡で出土した遺物の中で、原体の押圧と沈線区画の両方を併用している土器が出土した。恐らく、花輪台式と稲荷原式の折衷したタイプと捉えることができるだろう。花輪台式土器、稲荷原式土器、双方の分布域の問題、それぞれの型式変遷等を含めて検討すべき問題となると思われるが、現段階では、それ以上の考察に及ぶことができず、事例の報告に留めておきたい。さらに特徴的な遺物が図3-1-1に示した遺物であるが、L R縄文、R L縄文による羽状縄文と、燃糸による帯状施文を施した土器である。縄文の羽状構成の手法も花輪台式土器と異なり更に燃糸を併用している点、純粋な花輪台式とは、違和感を否めない。また、他型式の土器と考えた場合、管見では相当する土器型式が見つからない。筆者自身は、稲荷原式土器の影響を強く受けた、花輪台式の古い段階、あるいは更に若干古い段階の土器で、異種原体併用施文の土器ではないかと考えているが、現段階で確証は無い。類例を重ね研鑽を続けると共に、諸氏のご教示願えれば幸いである。

1さて、今回、燃糸文土器の主体を占める花輪台式土器についてであるが、向境遺跡出土の花輪台式土器の特徴を挙げると次のようになる。

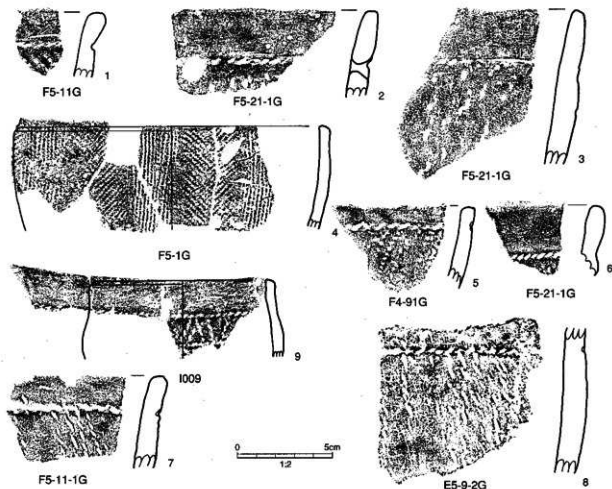
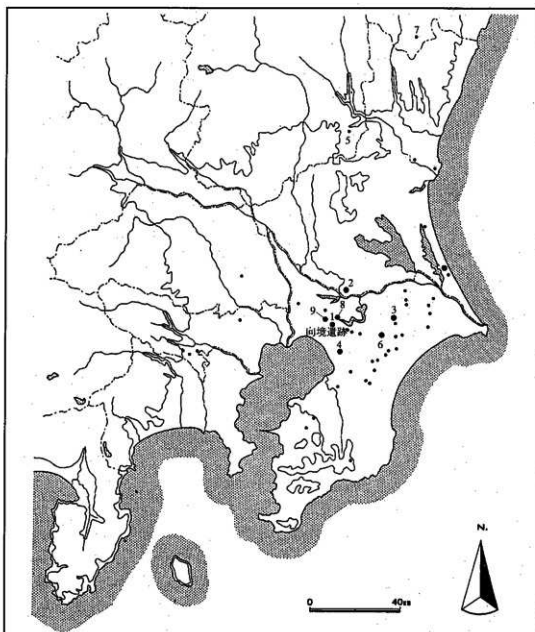


図3-1-1 向境遺跡出土擦糸文土器

- 1 口縁部無紋帯の幅が20mm程度の広いものと、それ以下の狭いものがある。
- 2 縄文施文（所謂Jタイプ）、擦糸施文（所謂Yタイプ）に付いては、Yタイプが少なからず出土し、比率は均衡している。
- 3 花輪台式土器にしばしば見られる文様構成に豊かなバリエーションを持つ土器は殆ど見ることが無く、Jタイプ、Yタイプで構成される純粋な土器様相を示していた。

1については、向境遺跡出土の花輪台式土器の中にも若干の時期差を考慮することができる。2に付いては東関東の擦糸文土器としては、やや珍しい傾向にあると言えるだろう。また、3については、花輪台式土器の中でも文様豊かな土器を持たない、純粋な段階の土器様相を呈していると言えよう。そうした中、I009では、原体の押圧によりモチーフを描く土器が出土しており向境遺跡における花輪台式土器の様相を難しくしている。但し、全体的な傾向としては、花輪台式期でも純粋で古い段階の様相を呈していると言えるだろう。

また、漠然とした全体のイメージとしての比較となってしまうが、千葉県で花輪台式土器を出土した研究史上著名な遺跡として千葉市東寺山石神遺跡、成田市木の根遺跡等が挙げられるが、両遺跡出土遺物と比較しても、胎土、焼成、施文の深さ等、微妙な違いが感じられた（註4）。管見において、向境遺跡出土の花輪台式土器に最も印象の近い土器は、タイプサイトである花輪台貝塚出土の土器であった。



1.向境遺跡 2.花輪台貝塚 3.木の樫遺跡 4.東寺山石神遺跡 5.天矢場遺跡 6.金堀遺跡 7.竹之内遺跡  
8.新井堀遺跡 9.間見穴遺跡  
原田昌幸論文(1968)より筆者加筆の上転載。

図 3-1-2 花輪台式土器の分布図

向境遺跡と花輪台貝塚の位置関係を考えれば当然の帰結かもしれないが、土器の様相としても、Yタイプ、Jタイプの純粋な構成をしている点も類似している点も注目されるだろう。花輪台貝塚との相違点は、石器、石製品の出土が無かったことである。このことは、花輪台貝塚出土の遺物が、住居跡出土のものであるのに対して、向境遺跡の場合は、包含層出土の遺物による為と思われる。花輪台式土器は、茨城県南部、千葉県北部に集中して出土し東関東に強い分布圏を持つ土器型式であるが、そうした状況の中、花輪台貝塚、向境遺跡は、その分布圏の西端に位置していることは興味深い。花輪台式土器でも古い段階土器を出土する両遺跡が分布圏の西端に位置し、向境遺跡では、稲荷原式との折衷型の土器が出土していること等を踏まえると、花輪台式土器、稲荷原式土器両者の間で、単なる併行関係にあるのではなく、盛んな交流があったと思われる。何れにしても、花輪台式土器成立期の状況をかきま見ることができよう。

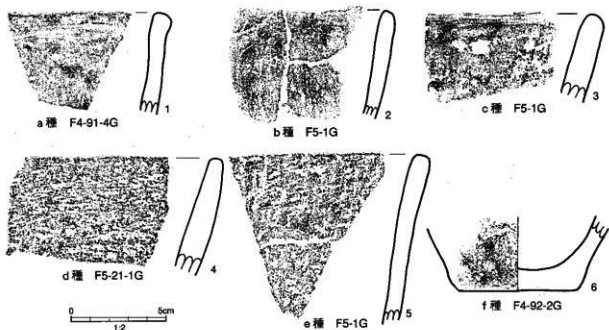


図3-1-3 向境遺跡出土無文・擦痕文土器

早期無紋土器・擦痕土器について 向境遺跡出土の早期の遺物として花輪台式土器と並び触れなければならないのが、早期の無紋土器の存在である。従来、平板式、或いは近年、天矢場式（註5）と呼ばれている土器群で、燃糸文土器終末期に併行、或いは後続するとされる一群である（註6）。

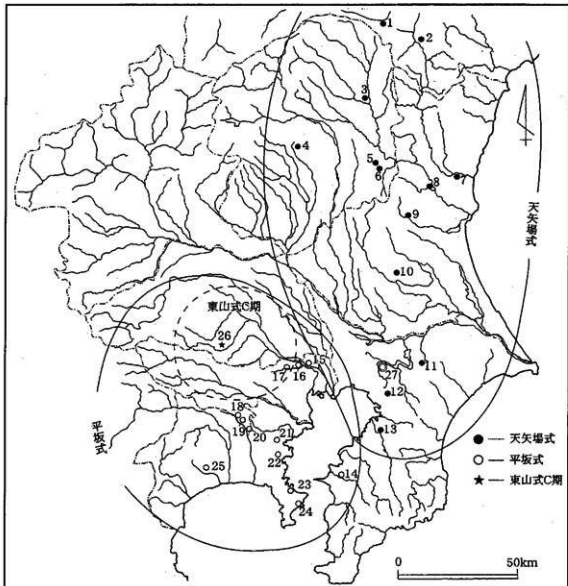
まず、向境遺跡出土の無文・擦痕土器の分類であるが、2章1節でも既に述べているが、改めて挙げると以下の6種に分類した。

- a種 擦痕が顕著ではなく、口縁直下に凹線が廻るもの。
- b種 擦痕が顕著ではなく、口縁直下に凹線が廻らないもの。
- c種 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しく、口唇が円頭状のもの。
- d種 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しく、口唇が角頭或いは角頭気味のもの。
- e種 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しく、口唇が角頭状で口縁が外反するもの。
- f種 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しく、c～e種の胴部及び底部にあたるもの。

この6種を大きく分けると、擦痕の程度によりa・b種の第1類とc～f種の第2類に類別することが可能かと思われる。第1類を無文土器、第2類を擦痕土器として分けて考えたい。全体の出土量は、数量的なデータを取った訳ではないが、第2類の出土が主体を占め、第1類については客体的な出土であった。主体を占める第2類土器は、口縁部の削りの方向が横位で、胴部については縦位の削りを行い、内面を丁寧に磨き上げる共通の特徴を見いだすことができる。また、底部に付いては、半平底の形態を示すようである。向境遺跡出土遺物の類例として、第1類は学史上著名な横須賀市平板貝塚出土の無文土器である平板式土器が相当し、第2類は成田市取香和田戸遺跡、栃木県茂木町天矢場遺跡出土の擦痕土器が相当する。

これら無文・擦痕土器をめぐる問題を挙げると次のようになる。無文土器が燃糸文期終末においてどのような編年の位置づけになるか、つまりは、花輪台式土器と併行関係にあるのか、後続する土器型として位置づけられるかである。次には、燃糸文期に後続する沈線文系土器、押型文系土器と編年の位置づけがどうなるかである。そして、無文・擦痕文という分類基準が果たして妥当な区分であるかどうかである。これらの問題を向境遺跡出土の無文・擦痕文土器の成果から考えてみたい。

まず、これらの遺物の出土状況からの検討を試みる。全体的な印象としては、花輪台式土器と無紋・



- |               |                    |                |                |
|---------------|--------------------|----------------|----------------|
| 1. 福島県 一里段A遺跡 | 8. ◇ 十方原遺跡         | 15. 東京都 栗原遺跡   | 21. 神奈川県 麻屋敷遺跡 |
| 2. ◇ 中丸遺跡     | 9. ◇ 五平遺跡          | 16. ◇ 柳野田向遺跡   | 22. ◇ 赤穂原遺跡    |
| 3. 栃木県 品川台遺跡  | 10. ◇ 原田北遺跡        | 17. ◇ 尾崎遺跡     | 23. ◇ 平坂貝塚     |
| 4. ◇ 山崎北遺跡    | 11. 千葉県 取香和田戸遺跡L地点 | 18. ◇ 藤田寺南遺跡   | 24. ◇ 平根山遺跡    |
| 5. ◇ 懸込遺跡     | 12. ◇ 上野遺跡         | 19. ◇ 本町田上の山遺跡 | 25. ◇ 東田原八幡遺跡  |
| 6. ◇ 天矢場遺跡    | 13. ◇ 土字遺跡         | 20. ◇ 成瀬西遺跡    | 26. 埼玉県 向山遺跡   |
| 7. 茨城県 西墳遺跡   | 14. ◇ 苗見作遺跡        | 21. 神奈川県 麻屋敷遺跡 | 27. 千葉県 向境遺跡   |

中村信博論文(2003)より  
筆者加筆の上転載。

図3-1-4 向境遺跡無文・擦痕文土器分布図

擦痕土器は、ゆるやかに出土する分布域を異にしている。向境遺跡におけるこうした出土状況は、両者の共時性については否定的な結果となる。少なくとも、向境遺跡出土の早期、無文・擦痕土器は、花輪台式土器と共存する可能性よりも時期差を持ち、後続する可能性が高いと言える。

次に、沈線文土器、押形文土器との関係であるが、通常、この種の擦痕文土器と、沈線文土器が共存する事がしばしばある。これに対して、向境遺跡出土の無文・擦痕文土器はこうした沈線文・押形文土器を共存せず、純粋に無文・擦痕文土器が出土している。つまりは、花輪台式土器とも緩やかに分布域を異にし、沈線文・押形文土器を共存せず純粋に無文・擦痕文土器が出土している状況が窺える。層位的な検証は欠くものの、間接的には、花輪台式期、沈線文・押形文土器の時期とも違う、両者の中間の時期として純粋に無文・擦痕文土器が出土する時期を示しているのではないだろうか。



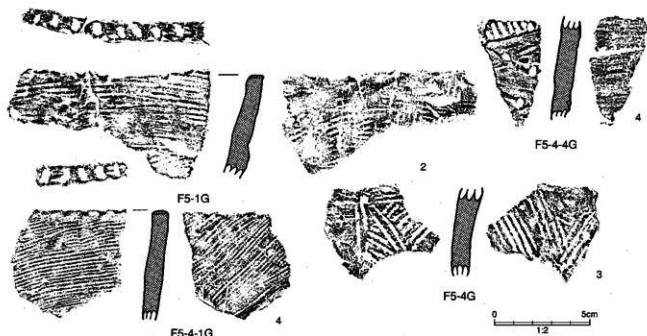


図3-1-5 向境遺跡条痕文土器

次に無文・捺痕文土器の分類の妥当性の問題であるが、既に野内秀明氏や中村信博氏の研究があり（野内1984 中村2002,2003）、無文土器と捺痕文土器を区別して考える趨勢にある。向境遺跡第2類における分類は、原田昌幸氏の平坂式土器の分類基準が「下敷きになっているが（原田1986）、原田氏の平坂a～cの分類に対応するのが向境遺跡ではc～eとなる。また、向境遺跡第1類においては、原田分類をきれいに対応させることができなかった。また、この整理期間中に平坂貝塚出土の無文土器を実見する機会を得たが、平坂貝塚においては、向境遺跡で言うところの無文土器の占める割合が高く、捺痕土器は極少量であった。無文土器と捺痕土器の間には、別系統の動きがあるように思われる。両者を地域差として捉え、捺痕文土器を福島県竹之内遺跡に見られる初期沈線文の母胎となつてゆくという中村氏の論考は大方で是認される所だと思われる。

以上をまとめると、論点は、平坂貝塚出土の平坂式土器をどう捉えるかにあるかと思われる。捺痕の有無をあえて問題とせず、燃糸文土器終末の様相としての無文化の状況と大きく捉えるか、次代の沈線文土器群の母胎として区別して捉えるかの問題と思われる。そうした中、向境遺跡の様相は、第2類である捺痕土器が多く出土し、沈線文を共伴しない沈線文系土器出現直前の状況を示していると言えるだろう。

条痕文系土器について 向境遺跡では、沈線文系土器の出土を見ていないが、沈線文期の断絶を経て、条痕文系土器が比較的まともに出てきている。口唇に刻みを有し、口縁部に横位の条痕を施し、胴部上半に半截竹管による押し引きと刺突による意匠を施すことを特徴としている。縄倉島台期の遺物が主体を占めると思われる。こうした状況に対して向境遺跡の対岸に位置する栗谷遺跡においては、前代の野鳥期の遺物が主体を占め、両遺跡の間で時期による占地の違いが明瞭である。今回、それ以上の考察には至らなかったが、周辺遺跡を含めて、引き続き検討していきたい課題である。

#### 註

- (1) 条痕文期の遺物については、(財)千葉県文化財センターの小笠原永隆氏にご教示を賜った。以下、今回の整理作業を進める上で、多くの方々に御指導、御教示を賜った。諸氏の意図するところを充分にくみ取れない、あるいは誤解している部分も多々あるかと思われる。これらは全て浅学

である筆者の責に帰する所であり、ご寛容願えれば幸いである。

- (2) 『栗谷遺跡-第3分冊-』 2004 八千代市遺跡調査会
- (3) 燃糸文土器及び無文土器については、文化庁の原田昌幸氏並びに松戸市教育委員会の峰村篤氏に多くのご指導を賜った。また、以下の文献を参考とした。
- 吉田 格 1948 「茨城県花輪台貝塚概報」 『日本考古学』1-1 日本考古学研究所
- 三友国五郎・安岡路洋 1966 「稲荷原」 大宮市教育委員会
- 桑原 護 1974 「生谷埴遺跡」 『飯重』 佐倉市教育委員会
- 鈴木道之助 1977 「東寺山遺跡の燃糸文系土器について」  
『東寺山石神遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 篠原 正 1977 「金堀遺跡発掘調査概報」 富里村史編纂委員会
- 宮 重行・池田大助 1981 『木の根』(財)千葉県文化財センター
- 宮崎朝雄 1982 「燃糸文土器」 『縄文文化の研究3』
- 杉山典子 1983 「花輪台貝塚の土器-南山大学所蔵資料の再検討-」 『南山考古』2
- 原田昌幸 1988 「花輪台式土器論」 『考古学雑誌』74-1
- 原田昌幸 1991 『燃糸文系土器様式』
- 大内千年 2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3-八千代市間見穴遺跡』  
(財)千葉県文化財センター
- 吉野健一 2004 『印西市新井堀Ⅱ遺跡』(財)千葉県文化財センター
- (4) 今回、千葉県立房総風土記の丘資料館の田形孝一氏、大塚達朗氏をはじめとする南山大学人類学博物館の諸氏に実見の便宜を計って頂いた。記して厚く感謝する次第である。
- (5) 『天矢場』 2002 茂木町教育委員会
- (6) 無文。埴垣土器についても燃糸文土器同様、原田氏、峰村氏にご教示頂くとともに、明治大学の阿部芳郎氏にご指導頂いた。また、資料の実見にあたっては、風土記の丘資料館の田形氏、(財)千葉県文化財センターの菊地慎太郎氏、小久貫隆史氏、明治大学博物館の島田和高氏に便宜を計って頂いた。尚、参考文献は以下のとおりであるが、前掲のものは割愛した。
- 赤星直忠・岡本勇・村越潔 1958 「横須賀市平根山遺跡」 『横須賀市博物館研究報告』2
- 岡本 勇 1975 「相模平坂貝塚」 『駿台考古学論集』1
- 中村紀男ほか 1972 「天矢場遺跡」 栃木県教育委員会
- 馬目順一ほか 1982 『竹之内遺跡』 いわき市教育委員会
- 野内秀明 1984 「三浦半島における無文土器群の様相」 『横須賀市博物館研究紀要』28
- 原田昌幸 1986 『燃糸文系土器終末期の諸問題-無文土器「東山式」の設定-』 『物質文化』46
- 原田昌幸 1987 『燃糸文系土器終末期の諸問題-(2)「平坂式」の再検討-』 『物質文化』48
- 阿部芳郎 1992 『堀込遺跡発掘調査報告書』 堀込遺跡調査団
- 宮 重行ほか 2000 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書8-取香和田戸遺跡-』  
(財)千葉県文化財センター
- 中村信博 2002 「天矢場遺跡」 茂木町教育委員会
- 守屋豊人 2003 「平坂貝塚出土土器の再検討」 明治大学考古学博物館館報
- 中村信博 2003 「燃糸文最後の土器群」 『利根川』24・25
- 峰村 篤 2003 「東葛地域における燃糸文土器終末期の一樣相」 『なわ』41

## 第2項 前期

遺構について I005、I006、I008が該当する。いずれも「屋外炉」、あるいは「炉跡を伴う簡易な居住施設」と考えられる。八千代市内では、前期前葉～中葉を中心とした集落遺跡の調査例は、ヲイノ作遺跡をはじめとして比較的多く、資料は蓄積されてきている。従来では少なかった前期後葉～末葉の集落も、近年の新林遺跡の調査により、次第にその様相が明らかとなってきた。調査成果によると、堅穴住居跡のプランは

- 1 不整形円形・不整形長方形及び小判形を呈する
- 2 ロームへの掘込みは浅い
- 3 ほとんど赤化していない炉跡を有する
- 4 比較的多くの柱穴を伴う、

というものである。これは恒常的ではないにせよ、ある程度の期間の滞在を想定しうる居住施設と考えられる。換言すれば、ヲイノ作遺跡等は「ホーム・ベース」的性格を持つ集落遺跡といえる。対して、本遺跡のようなあり方は、より短期間の滞在と解釈され、生業活動に伴う「ワーク・キャンプの性格」を色濃く持つ。しかしながら、後述するように土器で見る限り、前期後葉～中期初頭、あるいは枠を広げて中期前葉までの間、幾度となく向境の地を訪れては、短期間の滞在生活をした集団が存在したことは確実である。

I006のP1は新旧の火床部が重複した炉跡と考えられる。これを積極的に評価するならば、いわゆる「反復型住居」の証明となりうるものである。調査例が稀少な時期だけに、今後とも注意を払っていきたい。

前期の出土土器について 今回の遺構外出土土器は、未掲載のものを含めると、前期中葉の黒炭式がやや目立つ。ただし、多くは縄文を施文した胴部片であるため、型式学的属性を比較的示すところの口縁部片を中心に挿図を組んだ。図2-1-37-1は、口縁部文様帯として「米粒状の刺突列」を2列施したもので、新井和之氏の編年による第Ⅱ段階に相当する。同図2は「歯状工具による波状文」を施文したもので、かつての「植房式土器」の代表的な属性の一つである。この属性は今日では複数の段階にまたがるため、古手の資料とは即断できなくなっている。しかし、1及び3等と共に存在すると見るならば、第Ⅱ段階相当にならう。同図4～7は第Ⅱ段階か、あるいはより古手の可能性を有する。8～9はこれらの胴部片。10は附加条縄文を羽状施文する胴部片で、新井編年の第Ⅳ段階に相当。

前期後葉も見べきものがあつた。図2-1-37-11は浮島Ⅰ式で、唯一古手の資料。同図12～34は浮島Ⅲ式～興津Ⅱ式に相当し、主体的な資料である。これらの区分は、「三角文」や「波状貝殻文」を施文するもの等、難しいものが少なくない。今回は松田光太郎氏の区分を参考にし、準拠している。もしも誤りがあれば、筆者の認識不足によるものである。同図18～20は同一個体で、「磨消貝殻文」を施した興津Ⅱ式のティピカルな資料。おそらく器形的には、所謂「金魚鉢形深鉢」になるものと思われる。

注目すべきは同図29で、頸部に施した平行沈線による鋸歯状の意匠は、大木5式の頸部に見られる「連続山形文」の影響によるものである。本例は胴部に「波状貝殻文」を施した興津式であるが、このことによって大木5式との併行関係が確認されるのである。向境遺跡としては、図2-1-37-36に見るように、諸磯c式(古)が出土しており、興津式(Ⅱ式)―大木5式―諸磯c式(古)の併行を間接的に証明する例とならう。ちなみに図2-1-38-1は諸磯c式(新)に相当する。

### 第3項 前期末葉～中期初頭

出土土器について 西関東の諸磯c式(新)以降、五領ヶ台式までの間、即ち東北での大木6式～7a式までの資料は、市内の遺跡を見ると、先述の新林遺跡及び芝山遺跡にまとまりが見られる程度であった。しかも、前期末葉の場合、その資料のほとんどが在地系伝統土器群の、「飾られない土器」ばかりである。例外は川崎山遺跡で、十三菩提式の後半の資料(踊場系)が出土している。

前期末葉土器群の研究は、十三菩提式では今村啓爾氏による、東京都登計原遺跡以来の30年に及ぶ継続的研究及びその成果をはじめ、小林謙一氏による精力的な研究等、大いに成果があがってきている。新林遺跡報文中でも、松浦史浩氏による考察(註1)が詳細を究めている。図2-1-37-35は口縁部に1段Rの側面圧痕による山形文を施文するもので、1段の原体を使用していること等から大木6式併行期の資料である。今回の資料は、市内の該期における空白の階梯の幾つかを埋めることとなった。

図2-1-38-2は、口縁部文様帯に「ソーマン状浮線文」を小さくジグザグに貼付したもので、今村編年の十三菩提式(新段階)前半(登計原での第3段階)、小林編年での前期末葉3期(古和台台式)に相当する。近隣では、上下端を浮線文で画してから施文する点、小さくジグザグに貼付した浮線文等、茨城県竜ヶ崎市沖餅遺跡例が近似している。図2-1-38-2～3は「ソーマン状浮線文」で意匠を描くもので、口縁部文様帯が狭小になるところ等から見て、今村編年の十三菩提式(新段階)後半(登計原での第4段階)に相当し、前期最終末となろう。これらは少ないながらも十三菩提式の十三菩提式であって、横浜市等を中心とした関東南西部の資料と同様であり、搬入品として解釈されよう。

これに続く中期の幕開けを告げるのが、図2-1-38-5・7・8(同一個体)である。これは今村啓爾氏の五領ヶ台Ia式、小林編年のCMⅠ段階のMB群(細線紋系)に相当する。施文順序は意匠の描出→細線文であって、小林氏の「モチーフ先施文」である。同図6は施文順序が逆となり、今村編年の五領ヶ台Ib式、小林氏の「細線紋先施文(=CMⅡ段階)」となる。いずれもティビカルな資料である。本遺跡では、これに続く段階から同図9・10～12に見られるような、A群東関東系(小林氏の「八辺式」)に取って代わる。9・10・11が八辺Ⅱ期、12は八辺Ⅲ期、12～15・17が八辺Ⅳ期に相当しよう。図2-4-55-12は、上下に接続した「2個1組の刺切状の刺突列」を充填するもので、神奈川県横浜市東方第7遺跡(小林氏のCSIa-B)にも見られ、A群東関東系とB群西関東系の相互が影響を及ぼしている状況が窺われる。12は「複合鋸歯文」のかなり崩れたもので、こうした類型も必ずといってよい程に出土する。栗谷遺跡からは数点であるが、「八辺系(Ⅱ期ないしⅢ期)」が出土している。

また、本遺跡からは「集合沈線文系」は確認されておらず、八辺Ⅰ期も同様に出土していない。上谷遺跡からは最初頭ないしそれに後続する段階の「集合沈線文系」・「細線文系」土器が出土している。同遺跡では堅穴住居跡3軒(おそらく同時存在ではない)及び土坑墓からなる、小林謙一氏のいう所謂SO型(Single Occupation)集落が検出された。芝山遺跡でも「集合沈線文系」と「細線文系」土器が出土した。しかしながら、他方で近隣の印西市高根北遺跡のように、「細線文系」と「八辺系(1式)」が共に出土した例もあるので、最初頭期の様相は単純ではない。前期末葉以来の「人」・「物」の流れはかなり複雑であって、そのことは盛んな地域間交流を証明している。

### 註

- (1) 松浦史浩 2003 「第3章第3節 縄文時代前期末葉の土器について」『黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

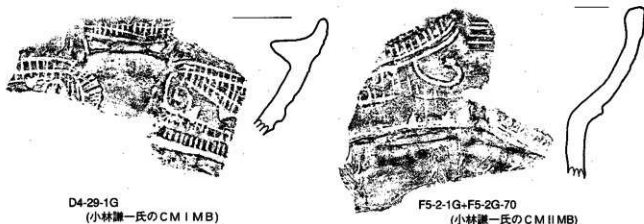


図 3-1-6 向境遺跡の中期の幕開けを告げる土器

#### 第4項 中期

**中期前葉～中葉の土器** 阿玉台Ⅰa式にまとまりが見られた。本遺跡と谷頭一つ隔てた境掘遺跡では一部阿玉台Ⅰa式を含むⅠb式のまとまりがある。市内では阿玉台式の前半期の資料は比較的充実しており、壹田遺跡群のヲサル山遺跡ではⅠb～2式期、坊山遺跡ではⅠa式期の集落が検出された。先述した新林遺跡でもⅠb式期の土坑群が検出されている。今回、図2-1-38-20を「阿玉台直前型式」として捉えた。これは口縁直下からL字状の隆帯を垂下させるもので、隆帯に沿って1条の沈線を引くものである。いまだ杓状区画を形成しない等、Ⅰa式よりも古いものと解釈した。Ⅰa式期では胎土的に見て大まかに二種類が存在した。一つは砂が目立ち、長石類（石英等も含めたもの）及び赤色スコリア細粒を含むもので、これを「非雲母混入型」と呼び、もう一つは雲母粒子を混入するもので、「雲母混入型」と呼ぶ。正確な統計的数値を出したわけではないが、Ⅰa式期の場合、そのほとんどが「非雲母混入型」であった。純然としたⅠb式期は2点図示したが、これはいずれも「雲母混入型」である。

**中期後葉～末葉の土器** 本遺跡では、阿玉台Ⅰb式を最後に、加曾利EⅡ式までの間は土器が出土していない。栗谷遺跡においては、加曾利EⅢ式期の堅穴住居跡3軒及び土坑1基が検出されている。図2-1-39-1・2は加曾利EⅡ式で、同一個体。地文として3段LRLを施文し、「磨消懸垂文」を垂下する。山内清男博士の定義に伴うならば、「加曾利E式の新しい部分」となるが、本書におけるスタンスでは「EⅡ式」とする。「加曾利E式土器」は設定以来70年の歴史があり、約半世紀近くの論争史が存在するが、今回はメインではないため、あえて触れないことにしたい。

図2-1-39-3～6は地文縄文を施し、口縁下に微隆起線を貼付した資料で、加曾利EⅣ式。使用原体は3のみが2段LRで、4～6では1段Lを用いる。関東地方全般の傾向として、中期末葉になると使用原体が2段RLから2段LRへ転換する。本例は1段Lを多用する例として注意する必要がある。

ちなみに、先述の栗谷遺跡においても中期末葉の資料が1点報告されている。これは口縁が直立気味に立ち上がり、胴部が長胴化する深鉢形土器の口頸部で、器形的には次の後期初頭に継承されてゆくものである。この土器の使用原体は2段LRであった。次回報告の境掘遺跡においても中期末葉の堅穴住居跡1軒が検出されており、検討資料は確実に増加してきている。

## 第5項 後期

遺構について 1002・1003・1004・1006が該当する。1003は称名寺式（新）期の屋内埋室で、1004は加曾利B3式期の屋外埋室、1006は称名寺式（新）期の屋外炉または住居跡である。称名寺式期の遺構は、栗谷遺跡において土坑3基及び埋室2基が検出されており、土坑1基が堀之内1式期で、他は称名寺式（新）期の所産であった。これらから鑑みて、1003は屋外埋室の可能性もあるが住居跡としておく。1006はごく粗末な住居跡の炉跡と捉えて良いかも知れない。いずれにせよ市内では称名寺式期の遺構の検出例は少なく、近年の調査例では、黒沢池上遺跡において（中）段階の竪穴住居跡2軒が検出された他は、ごく少数であるため、貴重な例となろう。

同様にして加曾利B3式期の屋外埋室もまた、加曾利B式期の遺構が新東原遺跡a地点の土坑群（註1）等、今のところごく限られているため、重要である。

後期の土器 図2-1-39-7～21は称名寺式（新）段階に相当し、ある程度のまとまりを持つ。栗谷遺跡では（新）段階を中心として、一部（中）段階の土器が見られた。7～10は意匠内に列点を充填するもので、「文様描線の不交叉」「交互充填施文」の原則を遵守しており、（新）段階ではあるが、7段階細分の6段階にとどまっていよう。7は波頂部下にC字状貼付を施したもので、南東北の綱取系土器の影響がある。11・12は口縁が直上し、長胴化する深鉢で、13とあわせ、綱取系の強い影響を受けた土器である。15～19は「格子目文系」の粗製土器であるが、これも綱取系の胴部に施された網目状撫糸文との脈絡が辿れる。称名寺式土器の終末には地域差が存在し、本遺跡を含めた北総地域では、次期の堀之内1式土器の成立もからめ、南東北の綱取系土器の影響が強くなる傾向にある。今回の資料は少数ながら、まさしくその状況を雄弁に物語っていよう。

堀之内1式は量的には少なく、比較的縄文系粗製土器及び前代以来の条線文系粗製土器が目立った。栗谷遺跡においては、堀之内1式の古い部分の土器がややまとまっていた。図2-1-40-1・2は同一個体で、波頂部下に8字状貼付を施しており、綱取系の影響がある。9～12は口縁下に首孔列を施したもので、堀之内1式（古）ないし（中）に伴うもの。18は文様描線に太細2本1組の工具を用いるもので、意匠及び器形的に称名寺式の遺制が認められよう。この他では堀之内2式の把手片が1点抽出できたが、今回は図化しなかった。

後期中業は加曾利B2式及びB3式にややまとまりが見られた。所謂精製土器から見てゆくと、加曾利B2式では二手式の釣手土器が出土した。加曾利B3式では口縁部文様帯が単段連刻、頸部文様帯が帯縄文となる波状5山の深鉢（図2-1-41-1）が好資料である。同様の土器は栗谷遺跡でも出土している。5は「遠部第四類土器」の系譜を引く格子文系深鉢で同じく加曾利B3式期に位置づけられる。紐線文系粗製土器は、安行2式期にかけての資料が得られた。図2-1-41-7は堀之内2式ないしは加曾利B1式で、今回唯一の古手の資料。8～12は加曾利B2式、13～15はB3式。器形の復元できた16は、口縁直下と胴中に低平な紐帯を貼付し、指の腹を用いた間隔の密な連続押捺を施している。地文縄文施文後に条線を引き、その後紐帯を貼付しており、条線の方は頸部ではヨコ方向に近く、胴部は右下がりである。こうした属性から、本例は曾谷式に比定される可能性が高い。

19～21は安行1式及び2式の（隆起）帯縄文系精製土器で、いずれも口縁は内湾気味に立ち上がり、球胴状の胴上半に最大径を持ち、その下はすまりながら底部へ至るという深鉢と思われる。19・20は注口付土器の可能性があり、22～24は紐線文系粗製土器で、22は安行1式、23・24は安行2式に比定されよう。

## 註

(1) 常松成人 2004 「新東原遺跡a地点発掘調査報告書」 八千代市遺跡調査会

## 第6項 晩期

**晩期の土器** 図2-1-41-26は、今回唯一抽出した晩期の土器資料。底部の境に平行沈線を廻らし、キザミに近い刺突を充填する。安行3c式の皿形土器である。本例は1点のみとはいえ、遺跡に残された縄文時代最後の足跡としての意義を持つ。

## 第7項 石器

**剥片石器について** 今回は旧石器時代の有髄尖頭器・尖頭器及びナイフ形石器を除く4点を図示した。図2-1-42-7の有茎（有舌）尖頭器は草創期前半の所産で、唯一大枠での時期が判明するものである。法量的には、長さが5cmを越えるということで、「小形品」の類には属さない。本例は単独出土であることや、遺跡内より同時期の土器及び他の石器が出土しないことから、狩猟時の未回収品としての可能性がある。要するに、縄文時代草創期前半における本遺跡の土地利用のあり方は、「ホーム・ベース」あるいは「ワーク・キャンプ」というよりも、むしろ「生業エリア」、即ち「狩猟場」そのものであったと捉えておきたい。

他3点は石鏃で、いずれも「無茎凹基式」である。この他図示しなかったものとして、剥片類があり、この中には使用の痕跡を示すものを含む。

**礫石器について** 今回は9点を図示した。内訳は打製石斧3点・磨製石斧2点・磨石類2点・ハンマー1点・石皿1点である。このうち、4・10・11・12は所謂「礫斧」及びそれに類したものと思われ、時代的には早期前半（草創期後半～早期初頭）の花輪台式土器及び無文土器・捺痕文土器の使用期の所産の可能性が高い。磨製石斧は2点とも小形かつ片刃形式であり、「縦斧」としての使用が想定される。

図2-1-42-5は楔形の打製石斧で中期の所産か。その他では分銅形も1点出土している。分銅形の打製石斧は中期後半より増加する傾向がある。特に下総及び上総東部では、後期初頭～前半に属する打製石斧のほとんどが分銅形となる。これらから鑑れば住居跡の検出された後半初頭称名寺式（新）期ないし、比較的出土量の多い堀之内1式期の所産となる可能性が高い（註1）。

1点図示した石皿は、裏面を凹石としても使用しており、製作当初の1/6程の欠損品であるが、欠損自体廃棄の理由ではなく、リサイクルの形跡が認められる。集めたことはないが、県内出土の石皿には1/4～1/8程に欠損後もしサイクルしている例が少なからず見られる。これら「手のひら大」クラスの欠損品でも使用可能であったわけで、こうしたいわば「ポータブル・サイズ」が好まれたといえよう。そして、こうした道具が、本遺跡のような恒常的な居住施設があまり検出されなかった遺跡から出土するというのもまた、興味深い。換言すれば、ある程度シーズナリティーな背景（一例として「縄文カレンダー」のようなもの）があるとはいえ、ノーマディックなライフスタイルを持つ集団であったからこそ、「ポータブル・サイズ」な道具が好まれたということになろう。いずれにせよ、今後ともこうした「欠損した石皿類」には注意を払ってゆく必要がある、ということ述べて、この項の結びにかえたい。

## 註

- (1) 中野修秀 2000 「沓掛貝塚遺跡—金谷郡遺跡群Ⅲ—」財団法人 山武郡市文化財センター

参 考 文 献 (脚註で使用したもの以外)

- 朝比奈竹男 1996 「八千代市の縄文時代遺跡の分布」 【貝塚博物館紀要】 23  
千葉市加曽貝塚博物館
- 新井和之 1981 「黒浜式土器」 【縄文文化の研究3 -縄文土器I-】 雄山閣出版
- 今村啓爾 1974 「とけっぱら遺跡」 登計原遺跡調査会
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」 【東京大学文学部考古学研究室研究紀要】 第4号  
東京大学文学部考古学研究室
- 今村啓爾 2001 「十三菩提寺前半期の系統関係」 【土曜考古】 第25号 土曜考古研究会
- 大野康男 1993 「八千代市坊山遺跡」 財団法人千葉県文化財センター
- 大村 裕 1987 「所謂「五領ヶ台直後型式」研究の現状について」 【下総考古学】 9  
下総考古学研究会
- 小林謙一 1989 「千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について -東関東地方縄文時代中期初頭段階の土器様相-」 【史学】 第58巻第2号 三田史学会
- 小林謙一 1992 「千葉県大原内貝塚出土土器の研究 -東関東地方縄文前期末~中期初頭の土器様相-」 【民族考古】 第1号
- 小林謙一 1995 「南関東地方の五領ヶ台式土器群」 【第8回縄文セミナー 中期初頭の諸問題】 縄文セミナーの会
- 小林謙一 1997 「茨城県宮平貝塚出土土器について(1)」 【民族考古】 第4号  
慶応義塾大学文学部民俗学考古学研究所「民族考古」編集委員会
- 菅谷通保 1991 「茂原市石神貝塚の加曽利B式土器(2)」 【年報】 NO.5  
財団法人長生郡市文化財センター
- 鈴木道之助 1981 「図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文」 柏書房
- 西村正衛 1972 「阿玉台式土器編年の研究の概要 -利根川下流域を中心として-」  
【早稲田大学大学院文学研究科研究紀要】 第十八集
- 藤岡学司 1986 「八千代市ヲサル山遺跡」 財団法人千葉県文化財センター
- 松田光太郎 1996 「興津式土器の分類とその変遷(下)」 【神奈川考古】 第32号  
神奈川考古同人会
- 馬目順一ほか 1967 「網取貝塚C地点」 【小名浜】 いわき市教育委員会
- 森 竜哉ほか 1996 「千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書」  
八千代市教育委員会
- 山内清男 1940 「日本先史土器図譜 9集 加曽利E式」 先史考古学会(1967合冊再販)



## 第2節 弥生時代

向境遺跡の弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡住居跡が1軒検出され、遺物としては住居跡出土の遺物の他に、遺構外出土遺物として、グリッド一括遺物が少量出土したのみであった。本項では、向境遺跡の弥生土器を中心に、隣接する役山東遺跡、栗谷遺跡等と若干の比較検討を行ってみたい。

**栗谷遺跡、役山東遺跡等との比較検討** まず、比較対象とする遺跡は、役山東遺跡、栗谷遺跡、上谷遺跡の一部、江原台遺跡の一部とする(註1)。向境遺跡の弥生土器は、弥生時代後期に比定されるもので、輪積痕を残すタイプの土器である。筆者はかつて、『栗谷遺跡-第3分冊-』において印旛沼南岸における弥生時代後期土器について甕形土器を中心に分類と若干の考察を試みた。その要点をまとめると以下のとおりである。

(1) 印旛沼南岸の弥生時代後期土器については2つの系統が有り、

A類 複合口縁を作り、S字状結節文とは結びつかない系統。

A-1類 頸部有文(櫛描)のもの。

A-2類 頸部無文のもの。

B類 輪積痕を有し、しばしばS字状結節文と結びつく系統。

B-1類 胴部有文のもの。

B-2類 胴部無文のもの。

(2) 2系統、4類の土器が、それぞれに2~3段階程度の変遷をしている。

(3) A類については、北関東櫛描文系土器の影響が、B類については南関東、白井南式の影響を受けている。

(4) 印旛沼南岸域における、櫛描文系土器の出土頻度は、栗谷遺跡周辺で変わり、八千代市内中央を流れる新川西岸区域では減少する。

以上のことを踏まえ、向境遺跡出土の弥生土器を見てみると、S字状結節文とは結びついていないが、栗谷遺跡分類におけるB-1類に符号する。全く同じ類例は栗谷遺跡には無いが、周辺遺跡における類例として、佐倉市江原台遺跡123号住居址出土の土器が挙げられるかと思われる。また、向境遺跡に隣接する役山東遺跡出土の弥生土器については、A-2類に相当すると思われる。同様に上谷遺跡A081出土土器もA-2類に相当すると思われる。

さて、次に問題になるのが、これらの土器の編年的位置である。役山東遺跡A002出土例、上谷遺跡A081出土例はともにA-2類に相当するが、各文様帯の施文方法に捺糸文を使用していることから、A-2類でも古めの様相を呈している。役山東A001出土例もA-2類に相当するが、輪積痕系土器(B類)の多段の輪積痕を残す土器と伴しているため、その段階のものと考えられる。多段の輪積痕を残す土器は、向境遺跡出土の土器もそれに符号していくわけであるから、役山東A001出土例と向境遺跡出土例はほぼ同時期と認定される。栗谷遺跡において提示した土器変遷図に今回の成果を加え、以上をまとめたものが表3-2-1となる。

少しばかり強引な比較検討を行い、以前作成した土器変遷図に押し込んだ感もあるが、向境遺跡の弥生時代の竪穴住居跡は、役山東遺跡とほぼ同時期で互いが隣接する遺跡である為、弥生時代後期にあっては同じ集落であった可能性がある。また、対岸の栗谷遺跡との比較検討から、弥生時代後期でも多段の輪積痕が残る比較的早い段階の集落と言えるのではないだろうか。向境遺跡の北側に隣接する境堀遺跡(註2)においても弥生時代の竪穴住居跡が調査されており、南に隣接する、役山東遺跡、対岸の栗谷遺跡のみならず、境堀遺跡を含めて今後とも検討していきたい課題である。


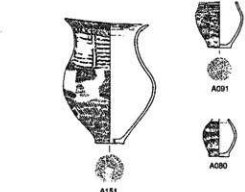



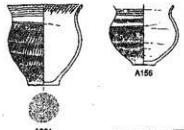

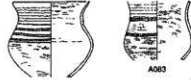


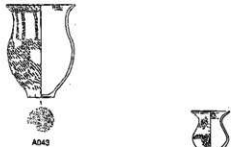
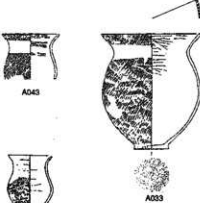

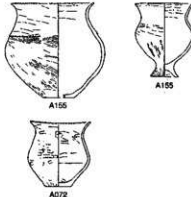


A-1類	A-2類	B-1類	B-2類
 <p>A057</p> <p>A066</p>			
 <p>A151</p> <p>A060</p>  <p>A081</p>	 <p>佐山A002</p> <p>A091</p>  <p>佐山A001</p> <p>上唇 A081</p>	 <p>A156</p> <p>A064</p>  <p>佐野台123号住</p> <p>佐山 A001</p>	 <p>A080</p> <p>A083</p>  <p>A089</p>  <p>A013</p>
 <p>A040</p> <p>A072</p>	 <p>A043</p> <p>A033</p> <p>A056</p> <p>A072</p> <p>A154</p>	 <p>A081</p>	 <p>A155</p> <p>A072</p>
	 <p>A142</p>	 <p>A142</p>	

図 3-2-1 向境遺跡周辺の弥生後期土器変遷図

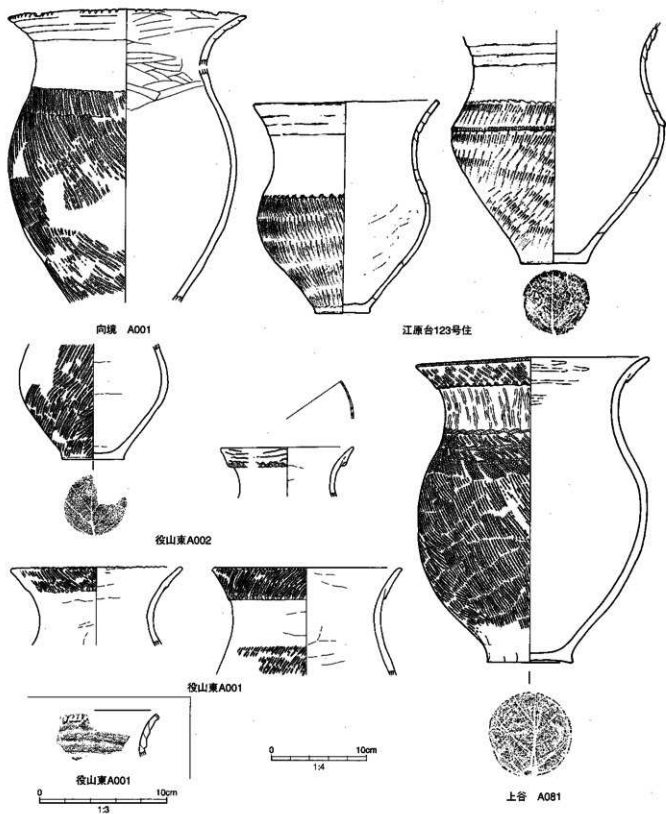


图 3-2-2 向境・江原台123号住・役山東・上谷出土遺物図

- (1) 「栗谷遺跡-第3分冊-」 2004 八千代市遺跡調査会  
 「上谷遺跡-第2分冊-」 2003 八千代市遺跡調査会  
 「江原台」 1979 江原台第1遺跡調査団
- (2) 現在整理中

### 第3節 古墳時代

向境遺跡の古墳時代の遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑1基が検出された。時期は、古墳時代中期～後期に至る住居跡となる。以下若干の考察を行いたい。

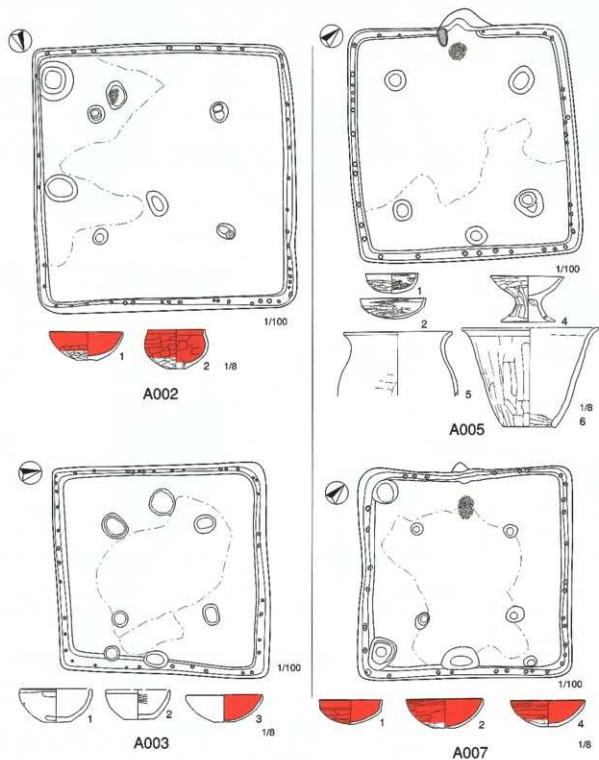


図3-3-1 古墳時代の遺構と遺物の変遷図

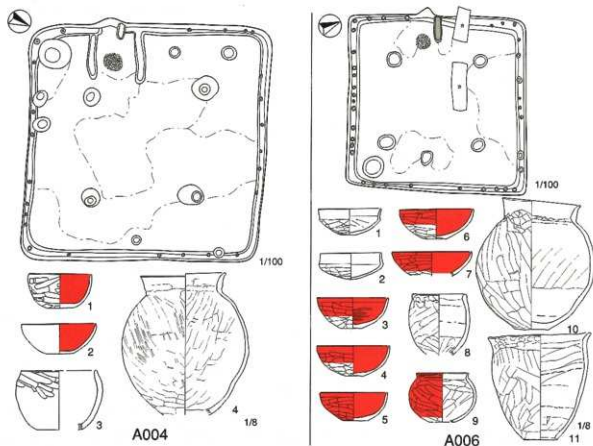


図3-3-2 古墳時代の遺構と遺物の変遷図(2)

**向境遺跡における古墳時代の諸問題** 向境遺跡の古墳時代の住居跡は、6軒検出された訳であるが、2軒が一組となり、3組の竪穴住居跡群が検出された。A002とA005・A003とA007・A004とA006の3組である。住居跡の形態との関係に着目すれば、A002・A003・A004については、竈導入以前の状況を反映し、壁に極めて近寄った炉、或いは初期竈とでも言うべき変則的な燃焼施設を持っている。一方、A004・A005・A006については、竈を持ち、所謂、鬼高期の様相を呈している。A002・A003・A004についての出土遺物は、古墳時代中期に見られる遺物を中心に出土している(註1)。一方、A004・A005・A006については、須恵器の模倣坏、大型の甔等を中心に出土している。

古墳時代中期から後期にかけての土器編年は、住居跡における竈の導入時の様相と併せて、盛んに議論されてきたテーマであるが、向境遺跡における古墳時代中期から後期にかけての変遷はまさにこの6軒に集約されている。つまり、竈を持たない古墳時代中期の住居跡からは、埴形土器を中心に出土し、竈を持つ古墳時代後期的な住居跡からは、須恵器の模倣坏や大型の甔を出土する。竈導入の以前と以後とで土器の様相の変化する状況が見て取れる。向境遺跡の古墳時代集落は、竈導入前後の時期に該当し、導入直前の1期、導入後の2期に分けることができる。

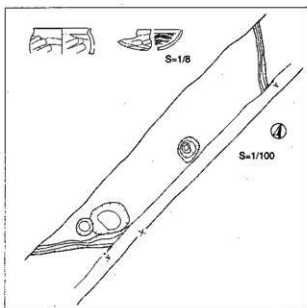


図 3-3-3 (財) 千葉県文化財センター「向境遺跡」から筆者加筆の上転載

向境の古墳時代集落の時期が竈導入前後の時期に該当すること共に、注目されるのは、1期の住居、2期の住居が1軒づつセットになって検出されていることである。同時存在の住居跡が3軒あり、次に移り、近隣に竈を作る住居へ建て替えたかと思われるような状況を映し出している。また、通常、鬼高期の集落は、大規模な集落を構成する傾向があるが、向境遺跡では、そうした傾向が見られず、集落は、住居跡が散見する状態で検出されている。(財) 千葉県文化財センター調査の向境遺跡においても古墳時代の住居跡が1軒検出されている。出土遺物の検討からは、向境1期に比定される時期のものと考えられる。調査面積が狭いため、確証に欠くが、

こうした事例も向境遺跡の古墳時代集落のあり方を反映していると思われる。何れにしても、他の鬼高期の集落との比較の材料として興味深い一例となるだろう。近隣の遺跡である栗谷遺跡では、鬼高期～奈良時代の住居跡は僅かで9世紀代に大きく展開するのに対し、向境では、鬼高期の集落が検出され、引き続き、奈良時代の集落が検出されている。この2者の検討も隣接す遺跡間での集落展開の差として興味深い。

古墳時代の考察と言うよりも、問題点の抽出となってしまったが、以上で本節を終わりたい。

#### 註

(1) 古墳時代中期、後期の遺跡及び遺物の編年観等は、下記、文献を参考とした。

- |            |      |                                   |                |
|------------|------|-----------------------------------|----------------|
| 村山好文       | 1983 | 「房総における和泉市期土器編年試案」                | 【日本考古学研究所集報】5  |
| 村山好文       | 1988 | 「平賀遺跡群における古墳時代後期土器の再検討」           | 【日本考古学研究所集報】10 |
| 長谷川厚       | 1998 | 「古墳時代中期土器分析への一視点-神奈川県内の出土例の検討から-」 | 【神奈川考古】34      |
| 【東寺山石神遺跡】  | 1977 | (財) 千葉県文化財センター                    |                |
| 【平賀】       | 1985 | 平賀遺跡群発掘調査会                        |                |
| 【権現後遺跡】    | 1984 | (財) 千葉県文化財センター                    |                |
| 【八千代市内込遺跡】 | 2001 | 八千代市遺跡調査会                         |                |

## 第4節 奈良・平安時代

向境遺跡の奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡63軒、掘立柱建物跡27棟、土坑・その他の遺構14基が検出され、遺構外の出土遺物としても、多量の墨書土器、鉄製品が出土した。これまでの記述にも述べてきたように、集落は、景観的に4つの小群に分けることができ、ある程度性格の差も捉えることのできたと思われる。整理作業の都合で、各遺構番号が、順を追って掲載されていなかったの、まず、各小群の遺構一覧を掲載し、以下、簡単であるが順を追って総括してみたい。

表3-4-1 奈良・平安時代遺構構成一覧表

	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑・その他の遺構
第1群	A008, A009, A010, A011, A012, A013 A014a, A014b, A015, A016, A017, A018 A019, A021, A022, A023 計 17軒	無し	D002, D003, D004 D005, D006, D007 D008, D009, D010 計 9基
第2群	A024a, A024b, A025, A026, A027, A028 A029, A030a, A030b, A030c, A031, A032 A033, A034, A035, A036, A037, A039 A040, A041, A042, A043, A044 計 23軒	B001, B002, B003, B004, B005 B022, B023 計 7棟	D011, D012, D013, D014 計 4基
第3群	A045, A046, A047, A048, A049, A050 A051, A052a, A052b, A053, A054, A055 A056, A057, A058a, A058b, A038 計 17軒	B006, B007, B008, B008, B010 B011, B012, B013, B014, B015 B016, B017, B018, B019, B020 B021, B024, B025 計 18棟	I010 計 1基
第4群	A059, A060, A061, A062, A063, A064 計 6軒	B026, B027 計 2棟	無し
合計	63軒	27棟	14基

### 第1項 第1群の遺構と遺物

第1群の遺構は、調査区南側の緩斜面地を中心に立地する遺構群で、竪穴住居跡17軒（A008～A023）、土坑・その他の遺構9基が検出された。竪穴住居跡の17軒の内、2軒（A016、A023）は、竈が検出されていないため、住居跡としては、尚、検討の余地が残るため、実質的には、15軒の竪穴住居跡と言えるかもしれない。第1群のみならず、向境遺跡の奈良・平安時代の集落で、特徴的な住居跡として、A009やA022に代表される隅丸長方形の住居跡を挙げることができる。15軒の内、該当する住居跡が5軒検出された。コーナーに竈を作る傾向が有り、住居構築における強い規格性を感じる。遺物は概ね8世紀後半のものが主体的に出土している（註1）。

このタイプの住居跡は、向境遺跡奈良・平安時代集落第2群でも、少なからず検出され、向境遺跡における奈良・平安時代の集落の特殊性を物語っている。

出土遺物の時期としては、A009のように底径、口径比の小さな土師器の坏を出土する住居跡がある。所謂、箱形のロクロ土師器の時期である。また、A022に見られるような、底径、口径比の大きな土師器の坏を出土する住居跡がある。体部削り調整の坏形土師器の出土は無く、高台付の皿形土師器を出土する住居跡も無い。これらのことから、第1群の存在していた時期として、箱形のロクロ土師器の時期から高台付の皿形土師器の出現以前、つまりは、8世紀後半～9世紀初頭と言う時期を押さえることができると思われる。

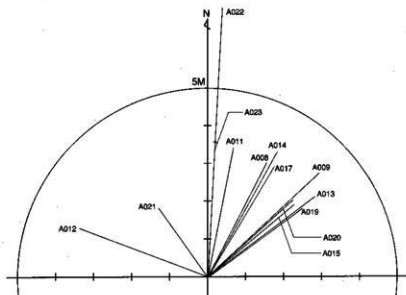
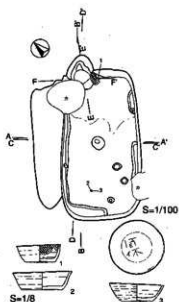


図 3-4-2

奈良・平安時代 竪穴住居跡主軸方位と規模 第1群

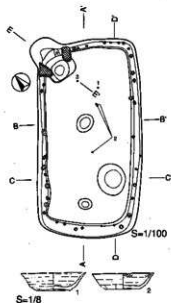


図 3-4-1

第1群の住居跡と出土遺物

注目すべき特殊な遺物として、輪の羽口、鉄滓などの鍛冶関連の遺物が出土している。D003は、鍛冶炉の一部と考えられ、隅丸長方形の住居跡の性格として鍛冶工房跡を想定できる。第1群の地区内に炭焼き窯と思われる土坑の検出も見ている。鍛冶工房跡を想定することにより、遺構間の有機的な関連が、浮かび上がってくる。向境遺跡の性格を検討するときに必要な視点と思われる。

註

- (1) 以下、奈良・平安時代の土器の年代観については、  
 藤岡孝司 1992 「八千代市壺田遺跡群の歴史時代土器」 『研究連絡誌』30 (財)千葉県文化財センター を参考にした。



第2項 第2群の遺構と遺物

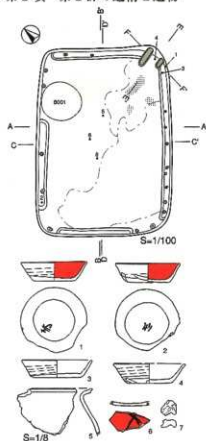


図 3-4-3

第2群住居跡と出土遺物

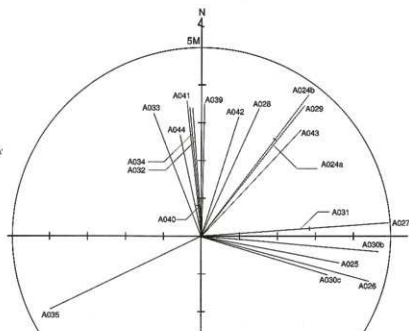


図 3-4-4

奈良・平安時代 竪穴住居跡主軸方位と規模 第2群

第2群の遺構は、調査区中央の台地平坦面に立地する遺構群で、重複を含め、竪穴住居跡23軒（A024～A044）、掘立柱建物7棟、土坑4基が検出された。

時期的な検討を若干してみたい。第2群の時期的展開を考える上で重要になるのが、A030の重複関係である。第2章第4節のA030の部分でも触れたが、A030bの出土遺物は、須恵器の坏が主体を占め、それらに伴い、所謂ロクロ成形の箱形坏が出土する時期と思われる、後続するA030aは、高台付の皿形土器が出土する時期と捉えられる。また、このことから、A030bに先行するA030aは、体部削り調整の坏の時期と考えられる。この3軒の重複した住居跡出土の遺物を中心に考えられる向境遺跡、奈良・平安時代の土器の変遷が、図3-4-5になる。1期は、体部削り調整の坏が出土する時期、2期は、ロクロ成形の箱形坏が出土する時期、3期は、内黒の土師器及び皿形土器を出土する時期、4期は、高台付の皿形土器の出現する時期のおよそ4期区分が可能かと思われる。基本的な部分では、藤岡氏の萱田編年とは変わらない。以上のことから、第2群の住居跡群の始まりを8世紀後半の土器様相に求めることができ、集落の終焉については、高台付の皿形土器の出現する時期に求められることができ、9世紀中ば～後半期に相当するかと思われる。

第2群の住居跡で特徴的な住居は第1群同様、隅丸長方形のコーナー一室の住居跡である。重複しているため住居形態が不明な物もあるが、可能性のある住居跡までを含めると、23軒中、10軒に及ぶ。第1群で見られた状況が更に強まっていると言える。第2群におけるこれらの住居跡の出土遺物は更に特徴的である。かなりの比率で鑄の羽口、鉄滓等の鍛冶関連遺物を出土し

表 3-4-2 奈良・平安時代第 2 群の遺構と出土遺物

遺構番号	形態	遺の位置	仏教的遺物	鍛冶工房的遺物	鉄製品	その他の遺物	備考
A024a	隅丸長方形	コーナー		鑄羽口	○	灯明皿	
A024b	隅丸長方形	(コーナー)					
A025	隅丸長方形	コーナー	三宝		○	灯明皿	
A026	隅丸長方形	コーナー					
A027	隅丸長方形	コーナー	寺	鑄羽口		赤色塗彩	
A028	隅丸長方形	コーナー				赤色塗彩	
A029	隅丸長方形	コーナー	寺	鑄羽口		灯明皿	
A030a	隅丸長方形	(コーナー)	寺	椀形鉄滓	○		
A030b	隅丸長方形	コーナー			○		
A030c	隅丸長方形	コーナー	獣脚				
A031	隅丸方形	壁中央			○		
A032	隅丸方形	壁中央	寺・拓	椀形鉄滓		赤色塗彩・(灯明皿)	対象遺物は覆上土層出土
A033	隅丸方形	壁中央		鑄羽口	○		
A034	隅丸方形	壁中央				赤色塗彩	
A035	隅丸方形	壁中央					ロクロビット
A036	隅丸方形	壁中央	寺				
A037	隅丸方形	壁中央					
A039	隅丸方形	壁中央					ロクロビット？
A040	隅丸方形	壁中央					
A041	隅丸方形	壁中央	寺			灯明皿	
A042	隅丸方形	壁中央		鑄羽口			
A043	隅丸方形	壁中央				赤色塗彩	
A044	隅丸方形	壁中央					
B001	4 間×3 間						
B002	3 間×2 間						
B003	3 間×2 間						
B004	3 間×2 間						
B005	3 間×2 間						
B022	3 間×2 間		獣脚				
B023	3 間×2 間						
D011	楕円形		寺・三宝	鑄羽口・椀形鉄滓			廃棄土坑
D012	楕円形		寺	鑄羽口・椀形鉄滓			廃棄土坑
D013	楕円形		寺				廃棄土坑
D014	楕円形		三宝？				廃棄土坑
A009	隅丸長方形	コーナー					第 1 群
A010	隅丸長方形	コーナー					第 1 群
A011	隅丸長方形	コーナー		椀形鉄滓			第 1 群
A015	隅丸長方形	コーナー					第 1 群
A022	隅丸長方形	コーナー					第 1 群

	坏	皿	須恵器	
I	A024 	A024 	A024 	
	A044 		A044 	
II	A032 (A030c) 	A032 		B022 B023
	A029 A027 			
II	A033 A030b 	A030b 	A033 	B001 B002
	A037 			
III	A013 		A013 	B003
	A056 		A056 	
IV	A038 	A038 	A038 	
	A030a 	A030a 	A030a 	
	A042 	A042 	A042 	

図 3-4-5 土器変遷と集落展開

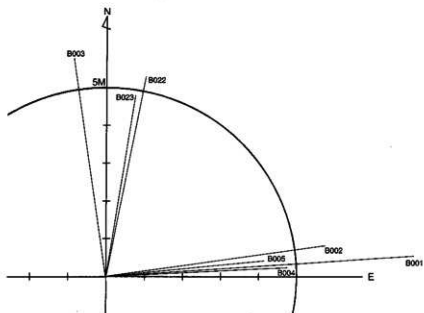


図3-4-6 奈良・平安時代 掘立柱建物跡主軸方位と規模 第2群

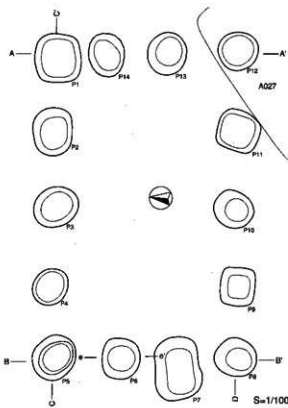


図3-4-7 第2群掘立柱建物跡

A030cの時期にA030c、B022、B023が同時期として捉えられる。また、住居跡と重複する掘立柱建物跡は、全て住居跡よりも新しい。B001は箱形坏を出土するA027(2期)より新しい時期(2期後半)、B002は須恵器主体のA033(2期)より新しい時期(2期後半)、B003は内黒土師器出現期のA037(3期)より新しい時期(3期後半)にそれぞれ位置づけられ、B001～B003が若干の時期差を持ち次々と建てられた状況が窺える。主軸方位からの検討からもそれぞれ併行する住居跡の主軸とほぼ平行か直行的関係にある。B004、B005がどの時期に該当するかは、遺物、重複関係からの所見が無いため、断定できないが、規模、主軸方向からの検討では、B001～B003の時期に併行(2期・3期)する蓋然性が高いと思われる。

ている。第2群の最も大きな特徴として、盛んに小鍛冶が行われていた特殊な集落という姿が挙げられる。更に特徴的なことは、これらの住居跡から「寺」、「三宝」等の仏教関連の墨書土器及び赤色塗彩の土師器の坏が出土していることである。通常、赤色塗彩の土師器の坏は、8世紀前半～中ばに盛行する器種で、国が成立期と軌を一にしているとされている(註1)。こうした土器が仏教関連の墨書土器と結びつき、更には小鍛冶

を盛んに行われたとなれば、何か特殊な事情を考慮しなければならないだろう。住居の平面形態も他の住居跡と形態を異にしていることをに着目すれば、一般の集落とは景観的にも異なっていたことだろう。

次に掘立柱建物跡であるが、4間×3間のものが1棟、他は3間×2間タイプのものであった。各柱穴間の距離、個々の柱穴の形状など強い規格性はみられなかったが、主軸方向については、桁側を南面して建てられている一群と、東面にしている一群の2グループが存在する。住居跡群と掘立柱建物跡との関係で注目されるのがA030cとB023の関係である。両遺構からは共に獣脚が出土している。稀少遺物が住居跡と掘立柱建物跡から出土していることから、両遺構の同時性が窺える。A030cとB023の長軸がほぼ90°に位置することも示唆に富む。また、長軸方向の視点で掘立柱建物跡を見れば、B022とB023の長軸方向、規模がほぼ一致し、両者が同時性の高さが窺える。第2群の中で古い時期に位置づけられる

また、第2群からは土坑が4基検出されているが、これらの土坑出土遺物が特徴的であり、出土傾向が類似している。何れの土坑も、碗型鉄滓等の鍛冶遺構を想定させる遺物と、「三宝」などの仏教的色彩の濃い墨書土器を出土している。第2群の特徴的な隅丸長方形のコーナーカマドの住居跡のことにについてこれまで述べてきたわけであるが、第2群の土坑出土の遺物は、これらの住居跡から出土する遺物と組成が一致している。恐らくは、これらの住居跡と密接な関係があると思われる。恐らくは、これらの住居跡の廃棄土坑と考えるのが現時点では妥当かと思われる。注目されることは、これらの土坑が、箱形の土師器を出土する段階（D011）、内黒土師器を出土する段階（D014）、高台付皿形土器を出土する段階（D012）と時期変遷を追っていることであり、奇しくも住居跡の変遷観と一致している。A030cとB023とに共通した獣脚が出土したことはすでに述べてきたが、両者のほぼ等距離の地点にD013が位置している。「寺」の墨書のある赤色塗彩の坏が出土し、さらに須恵器が主体的に出土していることからA030cあるいはA030bに平行する時期と考えられる。堀立柱建物跡と住居跡だけでなく土坑の3者間で同時性を捉えることができる。恐らく他の住居跡、堀立柱建物跡、土坑間でも同様な同時性を捉えることができると思われるが、今回の分析では、そこまで至らなかった、今後の課題としたい。

以上推論を重ねた部分が多いが、第2群の集落変遷としては、4期区分が可能で、1期においては、仏教に帰依した集団による鍛冶工房的色彩が強い集落が出現し、その後の集落の性格を規定していったようである。また、23軒の堅穴住居跡と7棟の掘立柱建物が4期に区分されるのであれば、1期あたり5～6軒の堅穴住居跡に対して、1～2棟の掘立柱建物と1基の土坑が同時存在していたことになろうかと思われる。そしてこの集落展開の中で一貫している原理が、仏教に帰依した集団による鍛冶工房的色彩の強さと、赤色塗彩の野土の多さから、国が等の公権力の影響力の強さを挙げるができるのでは無いただろうか。また、第1群との関係を目を向けるのであれば、第2群は、第1群よりも、やや古い様相を呈し、こうした集落の中心であり、第1群が、やや後発的な周辺の集落と位置づけることも可能かと思われる。

最後にA030、D012出土の獣脚、三彩陶器に付いて若干触れておきたい、A030出土の獣脚は香炉或いは火舎の脚部と思われ、千葉県内でも珍しい例として挙げる事ができる。また、A030では、火舎獣脚とともに、三彩或いは二彩の小壺片が出土している。向境遺跡で集落を展開した集団を仏教に帰依した人々の姿をだぶらせることができるが、こうした出土遺物から仏教に帰依した集団のみならず、中央と何らかの関係を持った人間の姿を想定することができる。こうした三彩陶器を将来した人々をどのように位置づけるか等（註2）、多くの問題が未解決であるが、今回そこまでの考察には至らなかった。参考までに、獣脚の出土例と三彩陶器の千葉県内の主だった出土例を挙げ、第2群の考察を終わりとす。

表 3-4-3 三彩陶器等出土遺物

	器種	遺跡名	所在地		器種	遺跡名	所在地
三彩	火舎獸脚	丹波国分寺	亀岡市	二彩	小壺	下総国分尼寺	市川市
三彩	火舎獸脚	安倍寺	板井市	三彩	壺	東上牧遺跡	鴨川市
三彩	火舎獸脚	安房国分寺	館山市	三彩	小壺	宮脇遺跡	君津市
須恵器	火舎獸脚	高岡遺跡	佐倉市	三彩	火舎	東野遺跡	佐原市
三彩	火舎獸脚	向境遺跡	八千代市	三彩	小壺	上総国分寺	市原市
二彩	小壺片	向境遺跡	八千代市	三彩	小壺	上総国分尼寺	市原市
二彩	小壺片	向境遺跡	八千代市	三彩	小壺	坊作遺跡	市原市
三彩	小壺	井戸向遺跡	八千代市	二彩	鉢	寛久遺跡	市原市
三彩	小壺	井戸向遺跡	八千代市	三彩	破片	寛久遺跡	市原市
三彩	托	井戸向遺跡	八千代市	二彩	不明	上総国分尼寺	市原市
三彩	小壺	白幡前遺跡	八千代市	三彩	小壺	妙見堂遺跡	小見川町
三彩	托	白井屋敷跡遺跡	佐倉市	三彩	破片	久我台遺跡	東金市
三彩	托	高岡遺跡	佐倉市	三彩	小壺・壺	種ヶ谷遺跡	千葉市
二彩	皿	花前1遺跡	柏市	三彩	小壺	芳賀遺跡	千葉市
三彩	小壺	宿ノ後遺跡	柏市	三彩	小壺	丸山遺跡	千葉市
三彩	小壺	大井東山遺跡	沼南町	二彩	不明	鐘つき堂遺跡	千葉市
三彩	小壺	江地山遺跡	成田市	三彩	小壺	大桶第2遺跡	千葉市
二彩	托	飯仲金掘遺跡	成田市	二彩	不明	鐘つき堂遺跡	千葉市
二彩	破片	円妙寺遺跡	成田市	二彩	小壺・壺	文六第6遺跡	千葉市
二彩	壺	長田舟久保遺跡	成田市	二彩	破片	砂田中台遺跡	大網白里町
三彩	小壺	麻生天福遺跡	栄町	二彩	破片	南麦台遺跡	大網白里町
三彩	陶枕	向台遺跡	栄町	三彩	小壺	飯倉鈴歌遺跡	八日市場市

## 註

- (1) 鶴間正昭 1990 「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」 『古学学究』123
- (2) 亀井明德 2003 「日本出土唐代鉛釉陶の研究」 『日本考古学』16 日本考古学協会  
 亀井氏には向境遺跡出土の獸脚について実見していただき御教示頂いた。  
 また、安房国分寺出土の火舎獸脚については、館山市立博物館、町田達彦氏に実見の便宜を図って頂いた。

## 参考文献（脚注でを使用したもの以外）

- 石田広美 他 1985 『主要地方道成田安食線道路改良工事地内埋文化財発掘調査報告書』  
 財）千葉県文化財センター
- 林 勝則 他 1992 『飯倉鈴歌遺跡』 飯倉遺跡発掘調査会
- 阿部寿彦 他 1993 『高岡遺跡群』 印旛郡市文化財センター
- 大野康晶 他 1993 『房総考古学ライブラリー-歴史時代(1)』 財）千葉県文化財センター
- 井上文男 1998 『宿ノ後遺跡』 柏市遺跡調査会

第3項 第3群の遺構と遺物

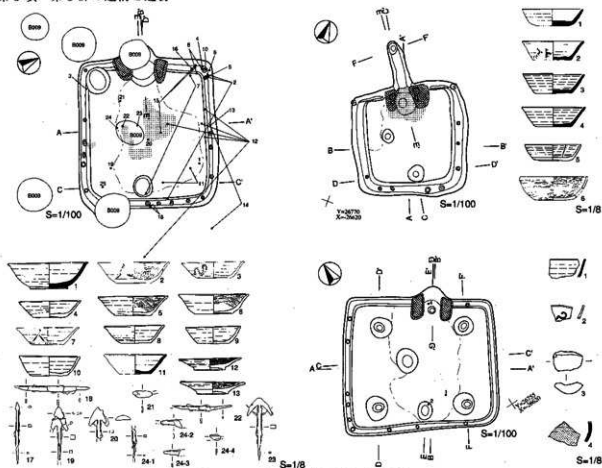


図3-4-8 第3群の住居跡と出土遺物

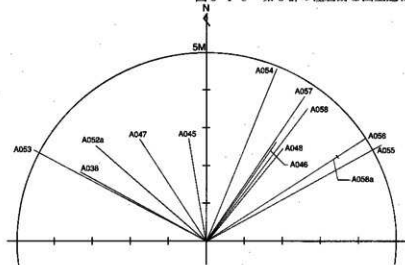


図3-4-9

奈良・平安時代 竪穴住居跡主軸方位と規模 第3群

第3群の遺構は、調査区北東部に展開する一群で、調査区北方に入り込む小支谷に展開する一群を中心とする。向境遺跡の奈良・平安時代の中核をなす集落で、谷を取り巻く緩斜面に立地し隣接する境掘遺跡と同一の遺跡であったと考えられる。重複を含め、竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡18棟、その他の遺構が1基検出された。集落としては、第2群と同様の展開をみせる。

但し、第1群、第2群の集落の初源として現れた、供膳形態として須恵器が中心で土師器としては体部へら削り或いは箱形タイプのものが出土する時期（第1期）の住居跡については、第1群、第2群出特徴的だった隅丸長方形の住居跡は姿を消す。必然的に「寺」、「三宝」等の仏教的墨書土器、鍛冶工房的遺物の出土量も激減し、赤色塗彩の土師器は出土しなくなる。また、鍛冶工房的な住居跡も検出されているが、4本柱の中央に鍛冶炉と思わせるピットを検出するA057・A058aのようなタイプであり、1、

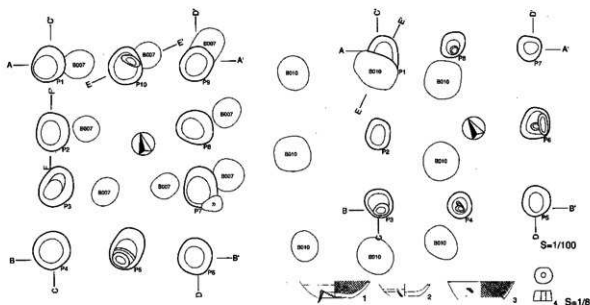


図 3-4-10 第 3 群の掘立柱建物跡と出土遺物

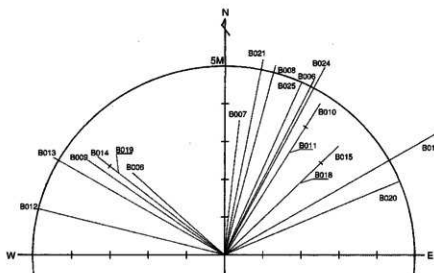


図 3-4-11

奈良・平安時代 掘立柱建物跡主軸方位と規模 第 3 群

2 群とは形態的に明らかな差異を感じる。全体的には皿形土器を多く出土していることから、集落が大きく展開していた時期がその時期に該当すると思われる。更に注目すべきは、「鉄製品」の豊富さである。現時点で証明する手だてを持ち合わせていないが、1・2 群と 3 群との間に需要と供給の関係があったのではないだろうか。このように、集落の初源期から第 3 群は 1 群、2 群との間に鮮明な性格の差が浮き彫りとなる。

住居跡の形態として、4 本柱で中型の隅丸方形の住居跡が比較的多く検出されている。他の住居跡は、竈の位置、形状にバリエーションはあるものの、多くは出入口施設の小穴のみ、或いは、小穴が検出されないタイプのものである。前者はある一時期に集中していると思われ、後者は各期を通じて作られているようである。

また、掘立柱建物跡であるが、3 間×2 間のタイプと 2 間×2 間のタイプとが検出された。重複する掘立柱建物跡はすべて堅穴住居跡が先行して、掘立柱建物跡が後発的に出現する。また、2 間×2 間のものからは、内黒の土師器が出土する傾向が窺え、第 2 群で分析した 2 期に相当すると思われる。第 3 群の特徴として、堅穴住居跡を上回る掘立柱建物跡が検出されていることが挙げられ、それらが方位、規模等において緩やかな規格性を感じることである。これらの関係は今後、隣接して展開する埴輪遺跡の成果を踏まえて合わせて検討していきたい。



第4項 第4群の遺構と遺物

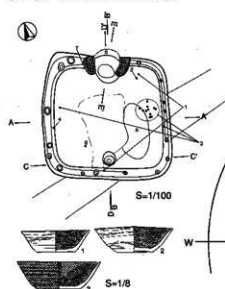


図3-4-12 第4群の住居跡と出土遺物

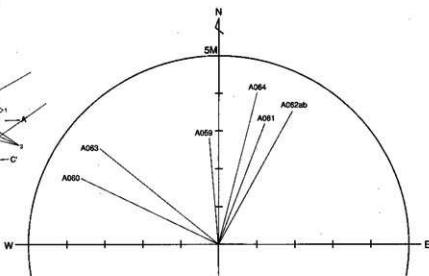


図3-4-13

奈良・平安時代 竪穴住居跡主軸方位と規模 第4群

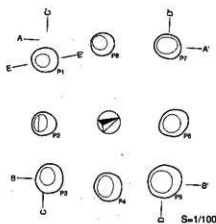


図3-4-14 第4群の掘立柱建物跡

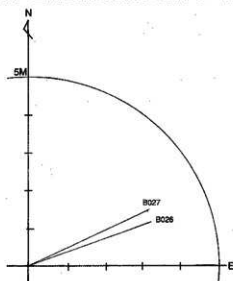


図3-4-15

奈良・平安時代 掘立柱建物跡主軸方位と規模 第4群

第4群の遺構は、調査区北側に展開する一群で、竪穴住居跡住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟が検出された。集落は調査区外にも広がり隣接する境掘遺跡にまで展開していると思われる。

住居跡の形態としては、小型の隅丸方形の平面形で、出入口施設の小穴が検出されるのみで、無柱穴のタイプのものが検出されている。時期的には、内黒の土師器の時期（3期）～高台付皿形土器の時期（4期）が中心となっている。掘立柱建物跡については2間×2間のものが2棟検出された。出土遺物が無いので、時期の特定はできないが、竪穴住居跡とはほぼ、併行する時期と思われる。

集落の一部を調査したに過ぎないため、多くは依然不明のままであるが、向境第1群にみられたような特徴ある遺物を出土する傾向も無く、第2群のような掘立柱建物跡の棟数が突出した状況も無い。恐らくは、中核となる、第2群に対する周辺の集落として、展開していたものと考えられる。

最後に1～4群を通して出土した奈良・平安時代の墨書土器・線刻文字等について若干触れたい。総量で、240点、うち、判読可能のものが101点出土した。一覧表を見ていただければ一目瞭然であるが、第

2群を中心に「寺」、「三宝」等の仏教系の文字が多く出土している。その他では、「人」、「富」等の文字が多く出土した。注目されることは、「文」の墨書土器である。通常、「文」の文字から連想されるのは「丈部氏」の存在である。近隣の上古遺跡（註1）では多く出土していることに対して対照的で、向境遺跡では「文」の墨書土器の出土が1点のみである（註2）。向境遺跡と上古遺跡とで丈部氏の集落の関わり方あるいは関与の仕方の違いが現れている。また、向境遺跡出土の「文」の墨書土器は奈良・平安時代集落、第3期に相当する時期と思われるが、或いは、遺跡間での違いではなく、時期による違いかも知れない。上古遺跡の検討を待って改めて検討したい課題の一つである。

問題点の羅列に過ぎなかった感否めないが、以上で第4節及び奈良・平安時代の考察を終わりたい。

註

- (1) 【上古遺跡-第2分冊-】 2003 八千代市遺跡調査会  
 (2) 上古遺跡と向境遺跡の中間に位置する栗谷遺跡においては「文」の墨書土器は出土していない。  
 【栗谷遺跡-第1分冊-】 2001 八千代市遺跡調査会  
 【栗谷遺跡-第2分冊-】 2003 八千代市遺跡調査会  
 【栗谷遺跡-第3分冊-】 2004 八千代市遺跡調査会

表3-4-4 出土文字遺物一覧表

群	遺構・遺物番号	種別	釈文	器種	部位	方向	備考
第1群	A009-3	線刻	□ □	土師器 坏	底部内面		
	A010-4	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A010-5	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A010-7	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A011-5	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A012-10	線刻	□	土師器 坏	底部内面		
	A012-15	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A012-25	墨書	「至」□	土師器 坏	体部外面	正位	
	A012-26	墨書	「大」	土師器 坏	体部外面		
	A012-27	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A012-27	朱書	□三女	土師器 坏	体部外面		
	A013-1	墨書	「得」	土師器 坏	体部外面	横位	
	A013-9	線刻	□	土師器 坏	底部外面		
	A013-10	線刻	□	土師器 皿	底部外面		
	A013-19	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A013-21	墨書	「神」	土師器 坏	体部外面		
	A013-22	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A013-23	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
	A014-4	線刻	□	土師器 坏	底部外面		
	A014-14	墨書	「生」	土師器 蓋	天蓋部外面		
A014-22	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
A015-1	ヘラ書	□	土師器 皿	体部～底部外面			
A015-2	墨書	□	土師器 坏	底部外面			

23		A017-5	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
24		A017-6	墨書	「光召代」	土師器 甕	底部外面		
25		A024b-2	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
26		A024b-6	線刻	□	土師器 坏	底部外面		
27		A024b-15	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
28		A024b-16	墨書	「千」	土師器 甕	底部外面		
29		A025-4	墨書	「三宝」	土師器 坏	底部外面		
30		A025-5	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
31		A025-10	墨書	千 三宝	土師器 坏	底部外面		
32		A026-2	墨書	至	土師器 坏	底部外面	正位	
33		A026-5	墨書	富	土師器 坏	底部外面		
34		A026-10	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
35		A027-1	墨書	寺	土師器 坏	底部外面		
36		A027-2	墨書	位	土師器 坏	底部外面		
37		A027-6	墨書	園	土師器 坏	底部外面		
38		A029-1	墨書	寺	土師器 坏	底部外面	正位	
39		A030a-2	墨書	千	土師器 坏	底部外面	横位	
40		A030a-9	墨書	「大□」	土師器 坏	底部外面		
41		A030a-10	墨書	富	土師器 坏	底部外面	正位	
42		A030a-12	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
43		A030a-19	墨書	寺	土師器 坏	底部外面	正位	
44		A030a-20	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
45		A030a-21	墨書	□	土製品 紡錘車			
46		A030b-45	墨書	田	土師器 坏	底部外面		
47		A030b-46	墨書	田	土師器 坏	底部外面		
48		A031-1	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
49		A032-1	墨書	□□□	土師器 坏	底部外面		
		A032-1	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
50		A032-2	墨書	寺	土師器 坏	底部外面		
51		A032-3	墨書	寺	土師器 坏	底部外面		
52		A032-5	刻書	□	土師器 坏	底部外面		
53		A033-1	銘書	×	須惠器高台付坏	底部外面		
54		A034-1	銘書	×	土師器 坏	底部外面		
55		A036-2	墨書	寺、人	土師器 坏	底部外面	正位	
56		A037-1	墨書	人	土師器 坏	底部外面	正位	
57		A037-2	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
58		A039-2	墨書	丁	須惠器 甕	底部外面		
59		A041-4	墨書	寺	土師器 坏	底部外面	正位	
60		A041-6	墨書	大	土師器 坏	底部外面		
61		A041-7	墨書	大	土師器 坏	底部外面		

62		A041-8	刻書	「×」	土師器 坏	底部外面		
63		A041-13	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
64		A042-4	墨書	冨	土師器 坏	体部外面	正位	
65		A042-6	墨書	人	土師器 坏	体部外面	正位	
66		A042-7	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
67		B002-1	墨書	小黑	土師器 坏	体部外面		
68		D011-2	墨書	寺	土師器 坏	体部外面	正位	
69		D011-4	墨書	万	土師器 坏	体部外面	正位	
70		D011-10	墨書	三宝	土師器高台付坏	底部外面		
		D011-10	墨書	千	土師器高台付坏	底部外面		
71	第2群	D012-5	墨書	寺	土師器 坏	体部外面	正位	
72		D012-6	墨書	人	土師器 坏	体部外面	正位	
73		D012-12	墨書	冨	土師器高台付皿	底部外面		
74		D012-13	墨書	冨	土師器 杯	体部外面	正位	
75		D012-4	墨書	田	土師器 坏	体部外面	正位	
76		D012-15	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
77		D013-8	墨書	寺	土師器 坏	底部外面		
78		D013-10	墨書	寺	土師器 坏	体部外面	横位	
79		D014-1	墨書	三宝	土師器 坏	体部外面	正位	
80		D014-2	墨書	千	土師器 坏	体部外面		
81	第3群	A045-4	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
82		A045-5	線刻	□	土師器 坏	体部外面		
83		A046-4	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
84		A046-5	線刻	□	土師器 坏	体部外面		
85		A047-1	朱書	×	須惠器 坏	底部外面		
86		A047-2	墨書	山人	須惠器 坏	体部外面	横位	
87		A048-1	朱書	×	須惠器 坏	底部外面		
88		A048-2	墨書	□、人	須惠器 坏	体部外面	横位	
89		A048-6	墨書	□□□	土師器 坏	体部内面~底部内面		
90		A050-2	墨書	人	土師器 坏	体部外面		
91		A050-3	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
92		A050-7	墨書	人	土師器 坏	体部外面		
93		A050-11	朱書	人	須惠器 坏	体部外面		
94		A050-26	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
95		A051-2	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
96		A051-6	墨書	人	土師器 坏	体部外面	逆位	
97		A051-7	墨書	□	土師器 皿	体部外面		
98		A052-2	墨書	大	土師器 坏	体部外面		
99	A052-3	墨書	大	土師器 坏	体部外面			
100	A052-4	墨書	大	土師器 皿	底部外面			

101		A052-5	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
102		A052ab-4	墨香	冪	土師器 坏	体部外面	正位	
103		A052ab-5	墨香	冪	土師器 坏	体部外面	正位	
104		A052ab-7	墨香	冪	土師器 坏	体部外面	正位	
105		A052ab-8	刻香	冪	土師器 鉢	体部外面	正位	
		A052ab-8	刻香	冪	土師器 鉢	底部内面		
106		A052ab-11	墨香	□	土師器 皿	体部内面		
107		A052ab-14	線刻	「×」	土師器 皿	体部内面		
108		A052ab-15	墨香	大	土師器 皿	底部外面		
109		A052ab-16	線刻	大	土師器 皿	底部外面		
110		A052ab-24	線刻	冪	土師器 鉢	体部内面		
111		A052ab-25	墨香	□	土師器 鉢	体部内面		
112		A052ab-26	墨香	□	土師器 鉢	体部内面		
113		A052ab-27	墨香	才	土師器 坏	体部内面		
114		A052ab-28	墨香	□	土師器 坏	体部内面		
115		A052ab-29	墨香	□	土師器 坏	底部内面		
116		A052ab-30	墨香	□	土師器 坏	体部		
117		A052ab-31	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
118		A054-3	墨香	寺	土師器 坏	底部外面		
119	第3群	A054-4	墨香	三宝	土師器 坏	底部外面		
120		A054-6	墨香	□	土師器 坏	底部外面		
121		A054-8	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
122		A054-9	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
123		A055-1	墨香	人	土師器 坏	体部外面	正位	
124		A055-2	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
125		A055-3	墨香	人	土師器 坏	体部外面	正位	
126		A055-8	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
127		A055-13	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
128		A056-1	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
		A056-1	線刻	×	土師器 坏	底部外面		
129		A056-2	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
130		A056-3	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
131		A056-4	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
		A056-4	銘香?	□	土師器 坏	体部外面		
132		A056-5	墨香	人	土師器 坏	体部外面	正位	
133		A056-9	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
		A056-9	墨香	□	土師器 坏	底部内面		
134		A056-11	墨香	□	土師器 坏	体部外面		
		A056-11	墨香	□	土師器 坏	底部外面		
135		A056-12	墨香	□	土師器高台坏城	体部外面		

136	A056-13	線刻	□	土師器	皿	底部内面	
	A056-13	墨書	□	土師器	皿	底部内面	
137	A056-19	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
138	A056-20	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
139	A056-21	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
140	A056-22	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
141	A056-23	墨書	×	土師器	坏	底部外面	
142	A056-24	墨書	×	土師器	坏	底部外面	
143	A056-25	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
144	A057-2	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
145	A058-4	墨書	田	土師器	坏	体部外面	正位
146	A058-5	墨書	田	土師器	坏	底部内面	
147	A058-6	墨書	田	土師器	坏	体部外面	
		墨書	田	土師器	坏	底部内面	
148	A058-9	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
149	A058-10	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
150	A058-12	墨書	田	土師器高台付皿		体部外面	
151	A058-16	墨書	□	土師器高台付皿		体部外面	
152	A058-17	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
153	A058-22	墨書	久	土師器	坏	体部外面	
154	A058-23	墨書	□□	土師器	坏	底部内面	
155	A058-25	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
156	A058-26	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
157	A058-27	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
158	A058-28	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
159	A058-29	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
160	A058-31	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
161	A058-34	墨書	田	土師器	坏	体部外面	
162	A058-35	墨書	冪	土師器	坏	体部外面	横位
163	A058-36	墨書	冪	土師器	坏	体部外面	正位
164	A038-5	墨書	文	土師器	坏	体部外面	横位
165	A038-6	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
166	A-038-8	朱書	人	土師器	坏	体部外面	正位
169	A038-10	線刻	王	土師器	坏	底部内面	
170	A038-11	線刻	×	土師器	坏	体部外面	
171	A038-12	墨書	記号	土師器	坏	体部外面	
170	A038-13	墨書	□	土師器	坏	底部外面	
171	A038-14	墨書	□	土師器	坏	体部外面	
172	A038-16	墨書	人	土師器	皿	底部外面	
173	A038-23	墨書	□	土師器	坏	体部外面	

174	第3群	A038-24	線刻	記号	土師器 坏	底部外面		
175		B009-1	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
176		B011-1	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
177		B011-2	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
178		B011-3	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
179		B014-1	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
180		B014-2	墨書	□	土師器 坏	底部外面		
181		A060-1	墨書	入	土師器 坏	体部外面	正位	
		A060-1	墨書	新	土師器 坏	底部外面		
182		A060-2	墨書	寺	土師器 坏	底部外面		
183	A061-7	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
184	A062-1	墨書	富	土師器 坏	体部外面	正位		
185	A062-2	墨書	人	土師器 坏	体部外面	正位		
186	A062-4	墨書	西	土師器 坏	体部外面	正位		
187	第4群	A062-5	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
188		A062-10	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
189		A062-11	墨書	□	土師器高台付皿	底部外面		
190		A062-12	墨書	□	須惠器 甕	底部外面		
191		A062-16	墨書	千	土師器 坏	体部外面		
		A062-20	墨書	□	土師器 甕	胴部内面?		
192		A063-5	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
193		A063-6	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
194		A063-7	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
195		A063-11	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
196	A063-12	墨書	人	土師器 坏	体部外面			
197	A063-14	墨書	□	土師器 鉢	体部外面			
198	A063-14	墨書	□□□	土師器 鉢	底部外面			
199	A063-18	墨書	万	土師器 坏	体部外面			
200	A063-19	墨書	□	土師器 坏	底部外面			
201	A064-3	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
202	A064-6	墨書	千	土師器 坏	体部外面			
203	A064-11	墨書	□	土師器高台付皿	体部外面			
204	A064-13	墨書	千	土師器高台付皿	体部外面			
205	A064-17	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
206	A064-18	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
207	A064-19	線刻	□	土師器高台付鉢	底部外面			
208	A064-20	墨書	人	土師器 坏	体部外面	正位		
209	A064-21	墨書	人	土師器 坏	体部外面	正位		
210	遺構外	D4-80-4G3	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
211		D5-70-1G7	墨書	人	土師器 坏	体部外面	正位	

212		D5-671G12	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
213		E5-4-2G16	墨書	寺	土師器 坏	底部外面		
214		F5-12G19	へろ書	×	須恵器 坏	底部外面		
215		C5-27-1G20	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
216		D5-8G21	墨書	□□	土師器 坏	体部外面		
217		D5-28G22	墨書	□	土師器 坏	体部外面～ 底部外面		
218		D5-30G23	線刻	□	土師器 坏	底部内面		
219		D5-38-3G24	墨書	□	土師器 坏	体部内面		
220		D5-49G25	墨書	□	土師器 坏	体部内面		
221		D5-49G26	墨書	□	土師器 坏	体部内面		
222		D5-49G27	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
223		D5-87-1G28	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
224	遺 構 外	D5-87-1G29	墨書	人	土師器 坏	体部外面		
225		E5-21-1G30	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
226		E5-2G31	墨書	冪	土師器 坏	体部外面	正位	
227		E5-2G32	墨書	□	土師器 坏	底部内面		
228		F5-22-3G33	墨書	冪	土師器 坏	体部外面	正位	
229		E5-40-4G34	墨書	人	土師器 坏	体部外面	正位	
230		E5-4235	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
231		E5-4336	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
232		E5-52-2G37	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
233		E5-52-2G38	墨書	□	土師器 坏	体部外面		
234	表探39	墨書	□	土師器 坏	底部内面			
235	E5-53G40	墨書	□	土師器 坏	体部内面			
236	E5-73G-41	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
237	E5-84-1G42	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
238	F4-94G43	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
239	F5-22-4G44	墨書	□	土師器 坏	体部外面			
240	表探45	墨書	□	土師器 坏	体部外面			





遺跡全景



プラン検出状況



プラン検出状況(2)



プラン検出状況(3)



プラン検出状況(4)



完掘全景



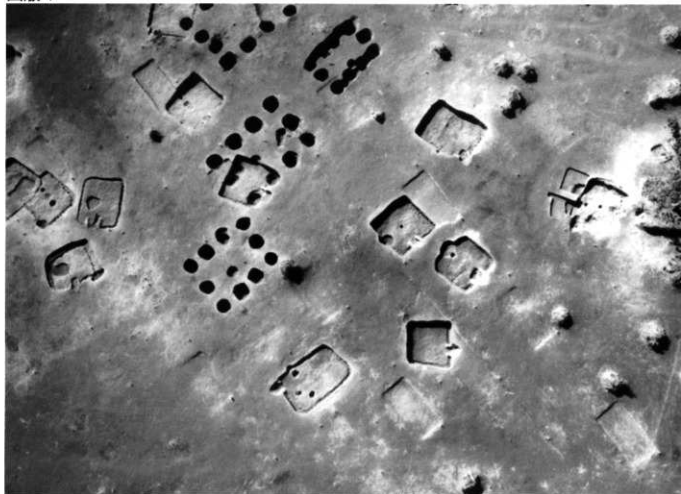
完掘全景(2)



完掘全景(3)



完掘全景(4)



完掘全景(5)



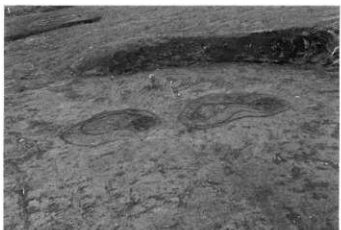
完掘全景(6)



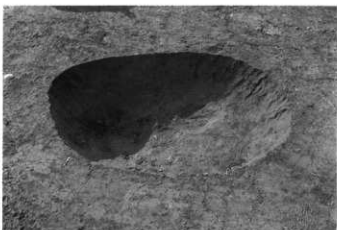
F001



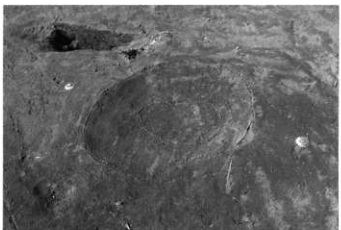
F005



F002



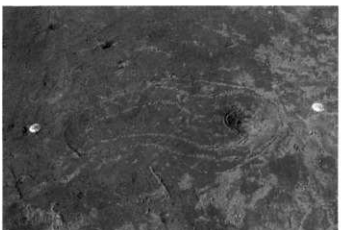
F006



F003a.b



F007



F003c



F009